
猛虎奮迅 - 呂布伝 -

Hirotsugu Ko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猛虎奮迅 - 呂布伝 -

【Nコード】

N2397Y

【作者名】

Hirotsugu Ko

【あらすじ】

”猛虎奮迅 - 呂布伝 -”は、中国の歴史小説・三国志をもとに作られたフィクションです。三国志に登場する猛将・呂布を美化した作品となり、事実とは大きく異なります。

尚、この物語は、Yahoo!ブログで掲載されたものを転載しております。また、このサイトは、”猛虎奮迅 - 呂布伝 -”のみを取り扱った専用サイトとしておりますので、ご了承ください。

最後に、作者自身で思うところがあり、挿話をした部分がありますので、ご容赦願います。「挿話前と挿話後の話別対応について」をご参考してください。(2011/11/20 am 2:30)

主な登場人物

- 呂布陣営 -

呂布 リュウブ 人中の呂布と評された猛将。献帝に親衛隊長として雇われる。

高順 コウジュン 丁原の代から仕える古参の武将。忠実で真面目な人物。

張遼 チヨウリョウ 各地を渡り歩く武芸者。豪放磊落な性格の持ち主。

臧霸 ソウバ 泰山の山賊の首領。義侠心の厚い男。

? 萌 カクボウ 古くから呂布に仕える忠義に厚い武将。

王楷 オウカイ 弁舌に優れた? 萌の部下。

成廉 セイレン 呂布と瓜二つの顔を持つ男。

楊奉 ヨウホウ 元李? の部下で献帝派。呂布に将来を賭けた男。

韓暹 カンセン 河東白波賊の首領。裏社会で多くの仲間と交流がある男。

陳宮 チンキョウ 呂布陣営の参謀。反曹操派。

丁原 テイゲン 呂布の義父。傍若無人な董卓と対立する。

- 董卓陣営 -

董卓 トウタク 洛陽を占拠し、大將軍の位を得た逆臣。

李儒 リジュ 董卓陣営の参謀。冷酷な頭脳を持つ。

董卓 トウホン 董卓の弟。彼と共に悪事を働く。

華雄 カコウ 董卓陣営の歴戦の強者。酒にだらしない。

李? リカク 董卓の配下で、剣の達人。野心家。

郭? カクシ 李? の部下。鬼郭? の異名を持つ武人。

貂蝉 チヨウセン 王允の養女で、董卓の愛妾。傾国の美女である。

- 曹操陣営 -

曹操 ソウソウ 後に魏を建国した英雄。呂布を害悪な存在として見ている。

荀? ジュンイク 曹操陣営の参謀。明晰な頭脳を持つ。

夏侯惇 カコウジュン 曹操の従兄弟。勇猛果敢な猛将。

夏侯淵 カコウエン 曹操の従兄弟。弓馬の達人。

曹仁 ソウジン 曹操の従兄弟。短気で、手段を選ばない男。
曹洪 ソウコウ 曹操の従兄弟。彼を誰よりも尊敬している。
曹安 ソウアン 曹操の従兄弟。当小説のオリジナル武将。
梁滸 リョウコ 曹安の配下。当小説のオリジナル武将。
徐晃 ジョウコウ 元楊奉の配下。呂布と共に転戦をするが…。
典韋 テンエイ 許？と共に、曹操軍の中でも特に恐れられる武芸の達人。
許？ キョウチョ 典韋と共に、曹操軍の中でも特に恐れられる武芸の達人。
鮑信 ホウシン 青州兵の兵卒。その兵団の頭領的存在の武人。
管亥 カンガイ 青州兵の兵卒。その兵団の副頭領的存在の武人。

- 劉備陣営 -

劉備 リウウエイ 黄巾賊の征伐に貢献した武人。後に、徐州の太守となる。
関羽 カンウ 劉備の義弟。知勇兼備の名将として名高い。
張飛 チョウエイ 劉備の義弟。酒好きで、短気で粗暴な荒くれ者。
陳登 チントウ 徐州に住む異端児。後に、劉備の参謀的存在となる。
曹豹 ソウホウ 陶謙の代から仕える徐州の最古参の侍大将。
許耽 キョタン 曹豹の懐刀的存在の男。
陶謙 トウケン 臨終の間際に、太守の座を劉備に譲った先代。

- その他 -

袁紹 エンショウ 反董卓連合軍の総帥。
袁術 エンジュツ 反董卓連合軍に参加した諸侯の一人。
馬騰 バトウ 西涼の太守。李？と同郷の武将だが、献帝派。
孫堅 ソンケン 反董卓連合軍に参加した諸侯の一人。二刀流の武人。
孫策 ソンサク 孫堅の長男。父と同じく、二刀流の使い手。
紀霊 キレイ 袁術の配下。計算高い一面を持つ。
伍瓊 ゴケイ 都仕えをする呂布の友人。反董卓派。
周？ シュウヘイ 都仕えをする呂布の友人。反董卓派。
張？ チョウバク 陳留の太守。人望のある武将。
張楊 チョウヨウ 河内の太守。呂布と同郷の男。

楊醜^{ヨウシュウ} 張楊の配下。
華佗^{カダ} 天下を渡り歩く名医。

- 皇室派 -

献帝^{ケンテイ} 後漢の皇帝。呂布の親友。
王允^{オウイン} 献帝派の忠臣。反董卓派。
伏完^{フクカン} 献帝派の忠臣。反李?派。
少帝^{ショウテイ} 献帝の兄で、前皇帝。

挿話前と挿話後の話別対応について

新規の話（2話分に相当） 第10話・後半～第12話・前半
に追加

挿話前の第10話・後半 第12話・後半にシフト

挿話前の第11話 第13話にシフト

挿話前の第12話 第14話にシフト

挿話前の第13話 第15話にシフト

・
・
・
以後、順々に2話ずつ、シフトします。

第14話以降に（改）マークが付きませんが、サブタイトル（第1話）が変更されただけで、内容の変更は行っておりませんので、ご了承ください。

尚、第13話（元・第11話）は、今回の挿話により、内容の変更箇所あり。

挿話前：全30話 挿話後：全32話 に変更。

（挿話に踏み切った理由）

作者の見解にて不十分などところがあるため、ある話を挿入したいと考えました。それは、物語で出てくる呂布があまりにも堅物になってしまったので、もっと人間味のあるキャラクターにしたいと言う観点から始まった次第です。また、三国志演技では重要な役割を果たしている貂蝉が当作品では登場場面が少なすぎることや物語の終盤で特異なキャラクターとして登場する成廉の描写が中途半端すぎ

るなどの作者的に気になるところがあるため、それらを補う目的も
あります。前者については、ハードボイルドな呂布を描きたかった
ため、彼と貂蝉の関係を引き離し、できるだけ描写を抑えようと執
筆したことが原因となります。しかし、彼女の話を取っ払うと、三
国志は本当に殺伐した作品となるのだと感じ、全体のバランスを考
えた上で必要な人物と考えるに至りました。だが、演技の通りに呂
布とくつつけると話がおかしくなりますので、作者的傾国の美女・
貂蝉を描きたいと思います。後者については、作者の構成能力の問
題であり、呂布と瓜二つの人物という意味深な設定なのに、あまり
にもちよい役すぎると言う観点から、せめて呂布との出会いの場面
ぐらいは挿入するべきと考えるに至ったからとなります。

第1話

この話は、中国史に登場する一人の猛将の伝記である。
話の舞台は、現代の位置で中華人民共和国の北部にあたる。

光武帝が後漢を建国してから百年が過ぎていた。

後漢第十一代皇帝・靈帝は、政治に関心がなく、皇后や貴妃の外戚とそれを取り巻く一部の官僚、後宮の事務を司る宦官たちに託して、自らは後宮に美女を集めて、酒池肉林の世界に興じていた。

そして、彼らも靈帝が政治に無関心なことをよいことに、これまた私利私欲に走り、公然と賄賂が横行したのであった。

彼らの墮落は悪政を招き、重税や夫役に苦しめられた領民の怒りが爆発し、各地で反乱が発生したのであった。

それに対して、王朝はその大規模な反乱を鎮圧するために各地の豪族と義勇軍を用いた。その結果、反乱軍の鎮圧には成功はしたが、同時に群雄と呼ばれる武装勢力を生み出すことになってしまったのであった。

そして、その中の一人である西涼の太守・董卓は、天下を手中に収めようと野心を抱き、二十万の軍勢を率いて首都・洛陽に迫った。成す術を失っていた中央政府は、董卓の入城を拒むことができず、実権を奪われてしまったのであった。

そして、権力を掌握した董卓は、自らの都合の良いように独裁政治を始めたのである…。

時は、西暦で189年…。

時代は、後漢末期。年号は、中平6年となる。

董卓は、各地の群雄へ号令をかけ、洛陽にて緊急会議を開くことを伝えた。各地の群雄は、その呼びかけを受け、こぞって洛陽を目指したのであった。

その中に、并州の刺史・丁原がいた。丁原は、愛馬・赤兔馬にまたがり、威風堂々と行軍を続けていたのであった。

「さすがのお前も、少々疲れてきたか」

丁原は、そう言つて、赤兔馬の首をなでた。赤兔馬は、その体を真紅に染め、筋肉隆々の見事な体躯を持ち、一日千里を走ると言われるぐらいの名馬であつた。

そして、丁原は、彼の横に並ぶ見事な体格を持つ青年に目を向けた。彼は、養子を同行させ、洛陽へと向かつていたのである。

養子は、性を呂、名を布、字を奉先と言つた。呂布は、武芸に秀でた一騎当千の武人で、自身が愛用する方天画戟を前に彼と互角に渡り合えたものは、誰一人存在はしなかつた。彼の名は、次第に天下へ鳴り響き、“人中の呂布”と評されるに至つた。そして、丁原は彼の武勇を愛し、養子としたのであつた。

「もう少して洛陽に着くな」

丁原は、呂布にそう声をかけた。

「そうですね。しかし、今回の召集は、一体何でありましょうか？」

呂布の問いかけに、丁原は豪快に笑つた。

「詳しいことは、わからん。内密な話のようじゃからな」

丁原は、そう言つて静かに目を閉じた。

「恐らく、自分が天下を取つたことを、世に知らしめるための号令なのだろう」

丁原の答えに、呂布は言葉を返した。

「董卓は、軍勢を率いて中央政府に脅迫して乗つ取つた人間です。

そんな人間に天下を任せて、大丈夫なのでしょううか？」

呂布が眉をひそめて言つと、丁原は小さく笑つた。

「各地の群雄も同じことを思つておるだろうな」

「すると…。まだ、天下は平定しないと」

「うむ…。世の中はもつと混乱することだろう」

丁原は、ふと空を見上げた。

「これからは、用心して生きていかないといけない世の中になる。

董卓がうんぬんと言うのではなく、各地の群雄が野心を抱いて、我こそが中原の覇者になろうと天下を狙い、権力争いを演じることになるだろうな」

「…」

呂布は、丁原の言葉を受けて沈黙した。と、その時、丁原らより先行して先の様子をつかがっていた高順という家臣が、戻って来た。高順もまた武芸の達人であり、何よりも忠義に厚い男だったので、丁原に重用されていたのであった。

「丁原様。洛陽の街が見えて来ましたぞ。洛陽の城外では、既に多くの群雄たちが陣営を張って、集結しているようです」

「そうか…。ならば、少し急ぐとするかのう」

丁原は、自らが率いてきた手勢に号令をかけ、急ぎ洛陽へ向かったのであった。

洛陽に到着した丁原は、すぐに部下たちに命じて陣営を張らせた。そして、彼は呂布を連れて宮廷へ参内したのであった。

「まずは、少帝様にご挨拶をしなければ…」

丁原は、最近になって新たに即位をした少帝に挨拶をしようと思いきや、向かった。前皇帝である霊帝は、酒色にふけり、不摂生な日々を過ごしたせいか、若くして病死したため、その息子が跡を継いでいた。とは言え、後漢の臣下として、忠勤に励む思いの強い丁原は、決してそれをないがしろにしてはならないと思っていたのであった。

「父上。董卓どのには、挨拶に行かれないのですか？」

呂布は、丁原が董卓の名を口にしなかったので、ふと気になって尋ねてみた。

「そうだったな。でも、まずは帝に拝謁してからだ。わしは、どうもあの野心家のことが好きになれん」

丁原は、そうぼやいた。彼もまた、董卓をよく思わない群雄の一人だったからである。

「私も、力づくで実権を奪い、その権力を利用して好き勝手する輩

は、好きになれません」

呂布が、そう力強く答えると、丁原は小さく笑った。

「うむ…。さすが、わしの息子だ」

呂布に勇気づけられた丁原は、歩みを止めることなく、謁見に向かっていたのであった。

そして、丁原と呂布は、何千人が入っても窮屈さを感じないほどの広大な謁見の間へ通され、少帝に拝謁したのであった。

「よくぞ、遠路よりお越しくだされた。さぞ、大変な道のりであったろう」

少帝は、威厳を保ちつつも、丁原を温かく迎えた。

「漢の臣下であれば当然のこと…。帝にご拝謁でき、至極光栄にございます」

丁原は、深々と頭を下げた。

「なんと、心強い言葉…」

少帝は、そう言って、表情を和らげた。

「朕は、即位したばかりで不安なことだらけじゃ。これから、朕の良き力となってくれ。丁原よ…」

「もったいなきお言葉。今後もさらなる忠誠を誓います」と、その時、少帝の横へ控えていた陳留王が口を開いた。

「丁原どの。あなたの横で控えられておられる御仁は誰ですか？」

陳留王は、丁原のそばにいた屈強の若武者に興味を持った。この陳留王は、少帝の年の離れた腹違いの弟で、まだ9歳になったばかりのあどけない少年であった。

「はい。息子の呂布と申す者にございます」

丁原は、そう紹介すると呂布は、静かに会釈をした。

「なんと…。そなたが、あの人中の呂布と評されたほどの天下の豪傑だったのか！」

陳留王は、大きく目を見開いて、そう言い放った。

「拙者のことをご存じだとは…。光栄の極みでございます」

「私もあなたと出会うことができ嬉しく思うぞ」

陳留王は、そう言つて、にっこりと笑つた。

「おお、そうじゃ…。折角だから、是非そちの極め抜いた武芸をこの目で見てみたいのう」

その陳留王の言葉に、少帝は笑顔を見せた。

「うむ…。それは、良いかもしれんな」

少帝は、そう言つて、呂布に目を向けた。

「どうであろう…。今度、一緒に狩りにでも連れて行つてもらえぬか？」

少帝の言葉に、呂布は思わず目を丸くした。

「拙者のような者が、陳留王様のお供にですと…」

呂布は、群雄に仕える一介の武人である。そのような身分の低い者が、帝の親族と共に行動をするなど、当時では考えられない話であった。

「構わん。我が弟のたつての望みじゃ。朕が許す」

少帝は、そう言つと、にこやかに笑つた。

「もったいなきお言葉…。拙者で良ければ、いつでもお供をさせて頂きます」

呂布は、あまりのことに深く頭を下げた。

「では、近いうちに狩りへ行こうぞ。呂布よ…」

陳留王は、笑顔で元気よく、そう言ったのであった。

第2話

翌日、大將軍の位まで登りつめた董卓は、洛陽に集まった諸侯を大広間に集めて会議を開いた。そこには、名の知れた諸侯も含め、そうそうたるメンバが集まっていたのであった。それは、董卓の権威が如何なるものであったかを物語っている。

「諸侯の方々よ…。よくぞ、遠路より集まってくれた。まずは、そのお礼を申し上げよう」

董卓は、そう言つて、悠然とした態度で諸侯の顔ぶれを見渡した。それに対して、一同は緊張した面持ちで、彼をじっと見つめたのであった。

「本日、集まつて頂いたのは他でもない。ある重大なことを、皆で話し合おうと思つたからじゃ」

董卓は、そう話を切り出した。

「重大なことですか？」

丁原は、怪訝そうな顔をした。

「わしが、この城に入城した時は、すでに靈帝はなく、少帝が即位をされていた。わしは、その少帝を近くで見っていたのだが、どうも帝としての器があるようには思えなくてのう」

董卓が、そう言いかけると、丁原はふいに眉をひそめた。

「わしには、そうは思えません」

丁原の発言に、董卓は眉をピクリと動かしたが、さらりと流して続けた。

「それに対して、陳留王様は、幼少ながら聡明であり、とてもしっかりされておられる。わしは、陳留王様こそ帝としてふさわしいと思つのだ」

「一体、何をおっしゃりたいのですか？」

丁原は、表情を厳しくさせた。

「少帝を廃して、陳留王を擁立するべきだと…。わしは、皆に提案

する」

「異議あり！」

董卓の論理に、丁原はふいに声を発した。

「即位されて間もないのに、器があるかないかなどを見極められるものではない。それに、臣下の身でありながら、勝手に帝の去就を決めるなど言語道断である」

しかし、董卓は、その発言に対して低く笑った。

「この混乱した世を、秩序ある世にするためには、優れたトップが必要である。今は、一刻を争う時……。のんびり構えていれば、それだけ民草が苦しむことになるう」

董卓の言葉に、丁原は毅然とした態度で反論した。

「わしは、少帝が愚か者だとは思わん。大將軍よ……。さては、幼い陳留王様を担ぎあげて傀儡化し、自分の思い通りに国を動かそうとしているのではないのか！」

「何を申すか……。貴様！」

董卓は、ふいに怒鳴り声をあげた。と、その時、董卓の横で控えていた腹心の李儒が割って入ってきた。この男は、董卓から絶大な信頼を受けている当代随一の知謀の士であった。

「大將軍様……。丁原は、自分の意見を述べたままでですぞ。他の諸侯の意見も聞いてみられた方がよろしいかと……」

李儒は、そう助言をして董卓をなだめた。

「うむ……。そうであったのう」

それを聞いた董卓は、少し心を落ち着けてから口を開いた。

「それでは、皆の者……。他に意見はあるか」

すると、他の諸侯たちは、我が身の可愛さのためか、董卓の提案に賛成する意見を口々に申し始めたのであった。

「……」

丁原は、次々と飛び込んでくる諸侯の言葉を聞いて、次第に顔を青白くさせていった。

「残念だったのう、丁原どの……」

事前に根回しを行っていた李儒は、思わずニヤリと笑った。

「バ、バカな。この世には、もう忠臣はいなくなってしまったと言
うのか…」

現実を突きつけられた丁原は、愕然として沈黙したのであった。

「わはははは…。どうやら、陳留王様の擁立に賛成の者が多いよう
じゃのう。では、皆の意見を踏まえて、少帝を廃することにしよう」
その発言を受けた諸侯たちは、啞然とする丁原に目もくれることな
く、一斉に頭を下げたのであった。

会議が終了し、諸侯がぞろぞろと退席した後、李儒は董卓に話しか
けた。

「うまくいきましたね。大將軍様…」

その李儒の言葉に、董卓は眉を吊り上げた。

「いや…。わしの意見に反対をした丁原は、恐らく黙ってはいない
だろうな。それに、少帝もそう簡単には引き下がるまい…」

董卓は、そう言って、李儒に視線を送った。

「丁原を殺せ。少帝もだ」

その言葉に、李儒はふいに顔をしかめた。

「恐れながら、大將軍様…。そう簡単に、丁原を殺害することはで
きません。本日、彼の横で控えていた男をご存知ですか？」

「呂布のことか。確かに、厄介だな…」

董卓は、眉間にしわを寄せた。

「何か、よい策はないか。奴さえ居なければ、丁原を殺すことなど
たわいもないはずだ」

董卓の問いかけに、李儒はしばし考えた。と、李儒の頭の中で何か
浮かんだ。

「そう言えば、それがしの部下から聞いた話なのですが、丁原が皇
帝に謁見した際に、その場にいた陳留王が呂布と狩りに行く約束を
したそうです。陳留王に狩りをして頂くようお願い申し上げ、呂布
を丁原から引き離してみましよう。そうすれば、少帝と陳留王も別

々となりますので、両者をたやすく無きものにできるはずです」
李儒の言葉に、董卓の目が光った。

「ふっふっふ…。そう言うことか。よし、速やかに取り計らえ」

「はっ…。かしこまりました」

李儒は、そう発して頭を下げ、退出したのであった。

その頃、幕舎に戻った丁原は、大いに憤慨していた。

「大將軍にせよ、諸侯にせよ、何と言うザマだ。あれが、漢の臣下たる態度か。もう世も末だ」

丁原は、呂布にそう愚痴を言った。

「私もあきれて物が言えませんでした。世の中は、ここまで腐っていたのですね」

「しかし…。何とかしないと、少帝は帝位を追われ、董卓に逆らえる者が本当にいなくなってしまうな」

丁原が、そう言いかけた時、ふいに高順が幕舎の中に入って来た。

「殿…。陳留王様が、お見えになりましたぞ」

「な、何…。陳留王様だと。すぐに、お通しせよ」

丁原は、高順にそう命じて、すみやかに陳留王を幕舎に迎えたのであった。

「約束通り、参ったぞ。さあ、狩りに行こうではないか」

陳留王の言葉に、呂布は暗い顔をした。

「陳留王様…。大変申し訳ないのですが、今日はそんな気分になれませぬ。どうかお引き取りを願えぬでしょうか」

と、その時、ふいに丁原は口を開いた。

「呂布…。男の約束だ。陳留王様のお供をいたせ」

「ち、父上…」

丁原の発言に、呂布は思わず戸惑った。

「わしのことなら、もう大丈夫だ。さつき、散々愚痴を吐いたから、少しは腹の虫も治まったと言うものだ」

丁原は、そう言って、笑顔を見せた。

「ほら、丁原も良いと言っておるではないか。いくぞ、呂布…」

屈託のない笑顔を見せる陳留王に対して躊躇をする呂布の姿を見た丁原は、途端に大声を発した。

「陳留王様に対して無礼だぞ。さっさと支度をしろ！」

丁原の叱咤を受けた呂布は、即座に頭を下げた。

「はっ…。ははあ…。かしこまりました」

こうして、陳留王に押し切られた呂布は、陳留王のお供たちと共に狩りへ出かけたのであった。と、その様子を、陰からじっと見つめる者がいた。

「ふっ…。うまくいったな」

李儒は、低く笑いながら、目を光らせたのであった。

第3話

呂布と陳留王が狩りに出かけてから数時間ほど経った後、丁原の幕舎におびただしい蹄の音が聞こえてきた。

「うん…。何だ？」

不審に思った丁原は、幕舎から出て、外の様子を確認しようとしたと、ふいに彼の胸に矢が突き刺さったのであった。

「ぐっ…。ぐはっ…」

丁原は、思わずよろめいた。

「わはははは…。我は、董卓大將軍の弟・董旻である。大將軍の命令にて、逆賊を誅殺しに参上した」

「お、おのれ…」

丁原は、董旻を鋭く睨んだ。

「者ども…。かかれ！」

董旻は、間髪を入れずに手勢に号令をかけた。

「この下郎が！」

丁原の手勢である高順たちは、董旻の手勢に対して果敢に反撃を始め、その場はすぐさま乱闘騒ぎとなった。

「うぐぐぐ…。げほっ…」

丁原は、胸に刺さった矢を掴み、引き抜こうとした。すると、目の前に董旻が立ちはだかったのであった。

「安心しろ。すぐに楽にしてやるぜ」

董旻は、そう言い放って刀を抜き、それを丁原に浴びせた。

「ぐ…。ぐわあ！」

董旻の一太刀によって、丁原は絶叫と共に全身を朱に染めたのであった。

「と…。殿！」

その様を見た高順は、思わず悲鳴をあげた。

「お…。お前たちのような悪逆非道な輩は絶対に栄えることはない。

天は、絶対にお前たちを許さないだろう。ぐふっ…」

丁原は、その場に倒れて絶命したのであった。

「よし…。丁原をやったぞ。さあ、あとの連中も皆殺しにせい！」

董旻は、容赦なく部下たちに、そう命令した。

「くっ…。くそっ！」

高順は、目の前に迫りくる董旻の手勢を次々と斬り刻んでいった。

しかし、圧倒的な数でやって来た董旻の手勢に、高順たちは次第に苦しくなり、周りの者は次々と討たれていったのであった。

「皆の者…。血路を開いて、この場を脱出するぞ！」

高順は、齒がゆい気持ちを押し殺して、そう声を張り上げたのであった。

その頃、少帝は宮廷のある一室で、李儒と応対していた。

「どうした、李儒よ…。何か、急な用か？」

少帝は、穏やかに李儒と接した。

「陛下…。実は、私の部下が郷里よりも珍しい名菓を頂いたそうです。是非、陛下に献上したいとのことですよ」

李儒は、そう言うと、菓子を持った部下を呼び寄せた。

「おお…。それは、すばらしい…。早速、頂くとしようかのう」

少帝は、にこにこしながら、その菓子を食べた。と、次の瞬間、少帝は大量の血を吐いたのであった。

「がはあ…」

少帝は、吐血しながら倒れてもだえ苦しんだ。そして、あつと言つ間に息を引き取ったのであった。

「うまくいきましたな。李儒様…」

と、部下がそう言った瞬間、彼は自分の腹に剣を突き立てられて朱に染まっていることに気付いた。

「陛下の命との引き換えだ。本望に思え」

李儒は、そう言って刀を引っこ抜き、再び斬りつけて部下を殺してしまつたのであった。

「誰か、出会えい！」

李儒は、その声を張り上げて、周囲の文官たちを呼び寄せた。

「うっ…。これは…」

文官たちは、仰天をして少帝の亡骸に駆け寄った。

「こやつが、郷里から送られた名菓を陛下に献上したいと申し、その中に毒を入れて陛下を毒殺しおったのだ」

「な…。なんと、恐れ多いことを…」

文官たちは、突然の少帝の死に、声をあげて嘆きだした。

「ふっふっふ…。これで、我らの思うがままだな」

李儒は、腹の中で、そう嘲り笑ったのであった。

一方、呂布と陳留王の一行は、和やかな雰囲気の中、狩りに興じていた。

「やあっ！」

呂布は、颯爽と馬にまたがると縦横無尽に大地を駆け回った。そして、鹿や猪などの獲物を見つけたるやいなや、次から次へと仕留めていった。その呂布の華麗な弓術に、陳留王は次第に見とれていったのであった。

「仕損じる矢が一本も無いとは…。呂布は、まさに弓馬の天才だ」

陳留王は、ため息をこぼしながら、目をキラキラと輝かせた。その様子を見て、呂布はふいに空を見上げた。

「地上の獲物だけでは、芸がないからな」

すると、呂布はこちらに向かって飛んで来る雁の群れを見つけた。

「陳留王様…。あそこに飛んでいる雁の群れをご覧になってください」

呂布は、そう言って、力強く指差した。

「何…。まさか、あの飛んでいる雁を射落とすと申すのか」

「よく見ていてください」

呂布は、そう言って、矢を弓につがえて放った。すると、矢は1羽の雁に突き刺さり、大地に向かって真っ逆さまに落ちてきたのであ

った。

「す、凄い…。見事じゃ、呂布！」

陳留王は、興奮をして、思わず声を張り上げた。

「喜んで頂けて、光栄にござります」

呂布は、につこりと陳留王に笑顔を見せた。

「さすが、天下に名をはせた豪傑だ。しかし、ここまでとは…」

陳留王は、興奮が冷めやらないうちに呂布に駆け寄った。

「呂布よ…。お前と出会えて、本当に良かったと思うぞ。お前は、

嘘いつわりのない真の豪傑じゃ」

「ありがたき幸せ…」

と、その時、背に矢を受けた高順が、馬に乗って駆けこんできたのであった。

「どうした…。その格好は！」

呂布は、尋常でない様子に声を荒げた。

「一大事です。殿が、董卓の手勢に討たれました！」

「なっ…。何っ！」

呂布は、大声を張り上げた。

「董卓めは、殿のもとに呂布様がないことをいいことに軍勢を差し向け、董卓と名乗る者に斬られてしまいました。無念です…」

高順は、そう言うと、大粒の涙を流した。

「お、おのれ…。あの奸賊め！」

呂布は、高順の報告を受けて、怒りの頂点に達した。すると、別の方向から、またも馬の蹄の音が聞こえてきた。そして、馬にまたがった文官らしき男が、呂布たちのもとへ駆けこんできたのであった。

「大変です。帝が不逞の輩に襲われ、毒殺されました！」

「な、なんだと…。兄上が！」

陳留王の顔は次第に青ざめていった。

「へ、陛下がお亡くなりになられただと…」

呂布は、次から次へ起こる禍に気が動転した。

「さあ、陳留王様…。急いで、宮殿にお戻りください」

「う、うむ…。わかった」

陳留王は、言われるがままに、急いで宮殿へと戻っていったのであった。

「高順…。我らも幕舎へ戻るぞ！」

「はっ…」

呂布は必死に冷静さを取り戻そうとしながら、高順を連れて幕舎へ戻ったのであった。

幕舎に戻った呂布は、無残な姿となった丁原の亡骸を見つけた。

「ち、父上…」

呂布は、丁原の亡骸に駆け寄った。

「俺がそばにいれば、こんなことには…」

呂布は、そう言って大いに嘆き始めた。

「ほんとうに立派なご最期でした」

高順は、そう言って目をつぶり、頭を垂れた。

「ゆ、許せん…」

呂布は、静かに口を開いた。そして、おびたらしい憎悪の念を発した。

「絶対に許さんぞ、董卓…。必ずや貴様の首をかき切ってやる！」

呂布は、天に向かって、そう吐き捨てたのであった。と、その時、

丁原の愛馬だった赤兎馬が嘶いた。

「あの鳴き声は、赤兎馬…」

呂布は、急いで鳴き声の聞こえる方へ向かった。すると、赤兎馬は落ち着いた表情で呂布を見つめながら、縄に繋がれていたのだった。

「よくぞ、無事であった。どうやら、うまく敵に見つからずに済んだようだな」

呂布は、そう言って、赤兎馬を見つめた。

「お前は、亡き父上の形見だ。これからは、俺に力を貸してくれ」

呂布は、そう言って、赤兎馬の頭をなでた。赤兎馬は、まるでその

言葉を理解したかのように、小さく頷いたのであった。

第4話

少帝の亡き後、董卓の陰謀により、陳留王・劉協は皇帝に即位をした。そして、名を献帝とし、年号も初平と改めたのであった。

「しかし、いつまで洛陽に潜伏されるおつもりですか」

呂布につき従う高順は、そう問いかけた。呂布たちは、洛陽でもホームレスたちがたむろをする集落に身をひそめていた。彼らは、丁原を殺害した董卓を恨み、路上生活をしながら暗殺をする機会を探っていたのであった。ちなみに、赤兎馬は、とある民家に頼んで隠してある。

「わかりきったことを言うな。奴の首をはねるまでに決まっているだろう」

呂布は、干し肉をかじりながらそう言った。

「しかし、大將軍ともあるう方が、そうそう街路に現れるとは思いませんが…」

「それゆえ、聞き込みもしながら待ち伏せをしているのであろう。」

奴を斬る機会など、道端だけではないはずだ」

高順は、その言葉を聞いて深くため息をついた。と、その時、何者かが道を伝って呂布に近づいてきた。

「よもや、呂布どのにございますか？」

その武官らしき男は、ふいに呂布に話しかけてきた。

「何やつ！」

高順は、そう叫んで刀に手をかけた。

「待て、待て…。決して、怪しい者ではござらん。拙者は、帝より呂布どのを探して参るよう命じられた者です」

「陳留王様の使いの者か」

呂布は、眉間にしわを寄せた。

「今は、陳留王様ではなく献帝でございますが…。それよりも、呂布どのに会うことができて光栄にございます。至急、献帝のもとま

「来て頂けませぬか？」

武官の言葉に、呂布は小さく頷いた。

「献帝の命令であれば、いたしからぬこと……」

呂布は、武官に連れられて、宮廷へと向かったのであった。

宮廷に入るやいなや、呂布は献帝のいる奥の部屋に通された。

「おお……。無事であったか、呂布……。心配をしていたぞ」

献帝は、呂布の姿を見るや、急いで駆け寄った。

「陛下もお変わりないようで、安心を致しました」

呂布は、そう言って、頭を下げた。すると、献帝は悲しい顔をして、呂布を見つめた。

「朕が狩りへ行こうとお前を誘ったばかりに、そちをこんな目に遭わせてしまった。とても心苦しくてならぬ」

その言葉を聞いた呂布は、首を振って答えた。

「何を申されます。陛下も兄上様を失い、さぞかしおつらかったのでしょうか」

呂布は、献帝の心中を察しながら話した。すると、献帝は急に真剣な表情に変わった。

「朕は、兄上を殺したのは、董卓の仕業と思っている。奴は、兄上と丁原を殺し、権力の強化を図ろうとしたのじゃ」

献帝の話聞いて、呂布は大きく頷いた。

「恐らくそうでしょう。このまま、奴を好き勝手にさせてはなりませんまい」

「まったく、その通りじゃ」

献帝は、そう相槌を打った。

「奴の暴拳を止めねばならぬ。しかし、朕だけではどうにもならぬのじゃ」

献帝は、そう言って呂布を見つめた。

「呂布よ……。朕の親衛隊長になってくれぬか？」

「えっ……」

呂布は、思いがけない言葉に、声を詰まらせた。

「そちが、朕のボディガードとなってくれば、これほど心強いことはない。そして、共に奸賊・董卓を失脚させようじゃないか」
献帝の話聞いた呂布は、心の底から何かがかみ上げてくるものを感じた。

「ありがたき幸せにございます。是非、陛下のおそばに居させてください。命を賭けて陛下をお守りし、必ずや董卓の首をかき切ってみせましょう」

「おお、誠か…。朕は、うれしくてたまらないぞ」

献帝は、そう言って、涙を流した。

「頼むぞ、呂布よ…。お前だけが、頼りじゃ」

「ご期待に背かぬよう、尽力いたします…」

献帝は、呂布の手を取って笑顔を見せた。

「そうじゃ…。朕の爺やを君に紹介しよう。王允よ、参れ…」

献帝は、そう言って手を叩き、部屋の外で待っていた老人を招き入れた。

「呂布様、お初にお目にかかります。司徒の王允にございます」

王允は、そう言ってお辞儀をした。この老人は、献帝を幼い頃から孫のように可愛がっていた漢の重鎮で、彼にとって数少ない味方の一人であった。

「爺やは、朕が物心のついた時から面倒をみてくれた忠臣じゃ。何かあれば、爺やと相談するがよい」

「そうでしたか。拙者は、呂布と申す者…。武骨者ではありますが、何卒よろしく頼みます」

呂布は、そう言って王允の手を取り、董卓打倒を誓ったのであった。

翌日、献帝は、大広間に董卓大將軍以下重臣たちを呼び寄せた。

「まったく、この忙しい時に…。一体、何が始まることやら…」

董卓は、突拍子もない献帝の号令に愚痴をこぼした。

「皆の者、ご苦労である。今日、集まったのは他でもない。この度、

朕の親衛隊に、新たな武芸者を加えることにしたので、紹介をした
いと思つた次第じゃ」

「新たな武芸者だと？」

董卓は、ふいに怪訝そうな顔をした。

「呂布よ……。参れ……」

献帝は、大広間に呂布を招き入れた。

「なっ……」

董卓は、呂布の姿を見て顔を引きつらせた。すると、呂布はずか
かと入ってきて、献帝の横に並んで、頭を下げた。

「呂布にございます。この度は、陛下のお導きを受け、参上いたし
ました。今後とも、宜しくお願いします」

「呂布どの……。そなたの武勇は、天下に鳴り響いている。陛下を宜
しく頼みましたぞ」

王允は、そう言つて頭を下げた。

「呂布には、親衛隊長を任せることにした。皆の者、宜しく頼むぞ」
献帝は、そう宣言して、董卓に視線を送った。

「ぬ……。ぬう！」

董卓は、思わず顔を歪めたのであった。

「おのれ、あのガキンちよめが……。出過ぎた真似をするにもほどが
あるわい！」

朝議が終わつた後、董卓は自宅に戻り、酒を食らつていきり立った。

「まことにもつて、遺憾にござりますな。帝に奉つてやつた恩をあ
だで返すとは……。陛下は、なんと節操のないお方じゃ」

董卓の言葉を受けた李儒は、そう言つたため息を漏らした。

「かくなる上は、献帝も廃してしまうか……」

董卓がそう発した時、李儒はこう返した。

「恐れながら、献帝に代われる候補者はもうおりません。それに、
コロコロと帝が代わるようなことが起きると殿の名誉に傷がつきま
すし、それこそ民衆の政治不信につながりましょう」

「むむう……。確かに、そうなのう」

董卓は、そう言って齒ぎしりをした。

「今回の一件は、いたしかたありません。機会を待って、事を起こすしかございますまい。それに、親衛隊ごときに殿が掌握する官軍を脅かすことはできないでしょう」

李儒の発言を聞いて、董卓はこう口にした。

「わかった……。新たな親衛隊長の任命の件は、目をつぶるとしよう。だが……」

董卓は、そう言って続けた。

「わしに逆らったことは、決して忘れぬ……」

董卓は、次第に目の色を変えていった。

「わしの野望を邪魔する者はどうなるか……。今に見ておれよ!」

董卓は、そう言うと、持っていた酒杯を握りつぶしたのであった。

第5話

一方、呂布は、高順と共に街を出歩いていった。

「呂布様が、陛下の親衛隊長に抜擢されるなど夢にも思いませんでした。こんなに嬉しいことは、ございません」

高順は、そう言っつて、笑顔を見せた。

「ははは…。董卓の青ざめた顔は、ほんとに痛快だったぞ。お前にも見せたかったな」

呂布は、そう答えてから、さらに続けた。

「今日は、実に気分がいい。どこかで祝杯をあげようか」

「とことん、お付き合いさせていただきます」

高順は、そう答えて深く頭を下げた。と、その時、目の前に武芸者らしき一人の男が立ちはだかったのであった。

「お前か。その名を天下に鳴り響かせる武芸者・呂布は？」

武芸者らしき男は、そう言っつて近寄ってきた。

「何者だ！」

呂布は、その男に対して尋ねた。

「それがしの名は、張遼…。字は、文遠だ。ここで会ったのは、まさに千載一遇のチャンス。お主を倒して、俺の名を轟かせてやるぜ」張遼と名乗る男は、そう言っつと、刀を静かに抜いた。史実の張遼は、曹操に仕えた文武両道の名将としてよく知られているが、この時点では自らの武芸を武器に諸国を渡り歩いては、名のある武芸者と勝負をし、その力量を天下に示して名声を高めようとする武勇一辺倒の漢であった。

「面白い。やれるものなら、やってみろ」

呂布もそう言っつて、刀を抜いた。

「その首、もらった！」

張遼は、躊躇することなく、呂布に斬りかかってきた。しかし、呂布は、張遼の太刀筋を俊敏に見極めて、その攻撃をかわした。

「ほう…。なかなか、いい太刀筋だな」

呂布は、ニヤリと笑った。

「我が殿に単身で刃を向けるとは…。なんと無謀な男だ」

高順は、腕組みをして、その様を涼やかに見守った。高順も相当の手練れであったが、呂布の武には到底及ばないのだ。それが、名もなき無礼者如きに負けるはずがないと、彼は確信していたのである。

「その余裕…。どこまで、続くかな」

張遼は、そう言って、目を光らせた。こうして、呂布と張遼の剣劇は、次第に激しくなっていた。しかし、勝負はなかなかつかず、斬り合うことすでに百合を越えたのであった。

「はあ、はあ…」

張遼は、ついに息を切らし始めた。

「どうした。もうおしまいか？」

呂布は、不敵な笑みを浮かべた。

「まだ、終わってはいないわい！」

張遼は、そう言って、呂布に斬りかかったが、手に持っていた剣を払いのけられ、組み伏せられてしまったのであった。

「くっ…。こ、殺せ！」

張遼は、もがきながらそう叫んだ。すると、呂布はふいに小さく笑った。

「俺の剣に対して、ここまで耐えられた奴は他にはいない。張遼とやら、俺の家来になる気はないか？」

呂布の思いがけない言葉に、張遼は大きく見開いて動きを止めた。

「…。わはははは！」

張遼は、急に大きな声を上げて笑い出した。

「俺を家来にしてくれるのか。面白いことを抜かす奴だな」

張遼は、そう言って、さらに続けた。

「よかるう。お前に敗れた以上、俺は死んだも同然だ。好きなように使え」

こうして、呂布は新たに張遼という猛者を家来にしたのであった。

呂布が獻帝の親衛隊長となつてから数年の年月が過ぎた頃、洛陽よりはるか東に位置する陳留という土地で、ある英雄が董卓打倒に向けて挙兵しようとしていた。彼の名は、曹操、字を孟徳と言つた。曹操は、首都・洛陽で将校として仕えていたが、董卓が洛陽を占拠すると彼の暗殺を企てた。しかし、その計画は露見してしまつたため、都落ちをするハメとなり、出生の地である陳留に戻つていたのであつた。

「その後漢は、董卓の暴政によつて、民草たちは大いに苦しんでいる。何とか、この状況を打開する手立てはないのであるうか？」曹操は、自軍の兵力だけでは到底かなわないため、それを打開する策を練つていたのであつた。と、その時、何かがひらめいた。

「そうだ……。帝から私へ董卓討伐の勅令を受けたことにしよう。そして、各地の有力諸侯に呼びかけ、巨大な連合軍を築きあげれば、勝算は十分にあるぞ」

そう思い立つた曹操は、帝から勅令を受けたと偽り、董卓の暴政に対する非難を手紙に添えて、各地の有力諸侯たちに送つたのであつた。

その文書は、当時董卓に次ぐ勢力を持ち、渤海を拠点としていた袁紹のもとにも届いたのであつた。ちなみに、袁紹は、勅命を受けて渤海の地へ就任する以前に、曹操と共に首都・洛陽で将校として仕えていた時期があつたため、彼とは親交があつたのだつた。

「ふむ……。確かに、曹操の言うように、このまま董卓を野放しにはできぬな。しかし、曹操は本当に帝から勅令を受けたのであろうか？」

袁紹は、あご髭をなでながら、首をかしげた。すると、横に控えていた参謀の田豊が横やりを入れてきた。

「例え偽勅であつても、曹操の言葉には大義名分があります。董卓によつて苦しんでいる者は数知れず、皆彼を恨んでおります。各地

の諸侯たちは、この激に賛同し、曹操の元へ集まることでしょう。ならば、我が軍も遅れを取ってはなりませんまい」

田豊の言葉に、袁紹は大きく頷いた。

「そうだな。ならば、我が軍も大軍を率いて参ろうぞ」

袁紹は、そう言って立ち上がった。

こうして、曹操の激文を受けた各地の諸侯たちは次々と挙兵し、反董卓軍連合軍に参加していったのであった。参加したメンバは、曹操や袁紹の他に、南陽の袁術、江東の孫堅、冀州の韓馥、豫州の孔？、河内の王匡、東郡の喬瑁、北平の公孫？などであった。ちなみに、現時点では諸侯でないが、後の三国鼎立時で英雄の一人となる劉備、字は玄德も参加をしていた。そして、反董卓連合軍は、総大将を袁紹、参謀を曹操として軍容を整え、洛陽へ迫ったのであった。

そうした動きを察知した董卓は、急いで配下たちを集め、緊急会議を開いたのであった。

「皆の者…。今、各地の諸侯たちが天子様に対して刃を向けて集結し、この洛陽を攻め込もうとしておる。このような逆賊どもは、一刻も早く駆逐せねばならぬ。皆が一丸となって、この困難を乗り越えようではないか」

董卓は、そう激を飛ばして、部下たちを奮い立たせようとした。

「朕は戦による大量の血を流す解決は好まぬ。皆の者…。朕の名を勝手にかたり、利用する曹操と言う不逞な輩を一刻も早く捕らえてくれ」

献帝は、董卓の激に続いてそう述べて、諸將たちに訴えたのであった。

「はっ…。この呂布が、必ずや下手人・曹操をひっ捕らえてみせませう」

呂布は、献帝に対して、そう誓った。

「我が軍の陣容だが、総大将は歴戦の猛者である華雄將軍とする。

そして、呂布どのには、副将をお願いしたいと考えている。いかがかな？」

董卓は、呂布にそう尋ねた。

「異存はありませぬ。華雄將軍のもとで、武功をあげてみせましよう」

「うむ、うむ……。頼もしい限りじゃ」

董卓は、にこやかに、そう頷いた。

「それでは、大將軍様……。直ちに出發をします」

華雄は、そう言うと、諸將たちを連れて、戦の準備に取り掛かったのであった。

緊急会議の終了後、董卓と李儒は別室にて話をしていた。

「くそ、いまましい。何で、呂布を副将にせねばなんのだ！」

董卓は、そう言いながら、辺りを行き来した。

「帝のご命令であれば、いたしかたございますまい。それに、奴の武勇は他を圧倒しております。毒は毒を持って制すべしともいいますゆえ、徹底的にコキ使ってやれば宜しいでしょう」

李儒がそう言い終わると、董卓は間髪をいれずに、こう話した。

「奴に軍勢を預けて、本当に大丈夫であろうか。逆賊どもに寝返る可能性はないのか？」

その董卓の言葉に対して、李儒はこう述べた。

「それは、大丈夫でしょう。逆賊に寝返ることは、帝を裏切ることになります。あれだけ、帝の信任の厚い者が裏切るはずは、ございませぬ」

「むむ……。そうじゃのう。ならば、後は呂布が奴らとの戦いの中で戦死でもしてくれれば、万々歳ということか」

董卓は、そう言うと、ニヤリと笑ったのであった。

第6話

呂布は、反董卓連合軍と戦う準備をするために、宮廷を出ようとした。と、その時、ふいに二人の男たちに呼び止められた。

「お努め、ご苦労さまです」

「呂布どの…。これから、戦の準備をされるのですか？」

伍瓊と周？に声をかけられた呂布は、笑顔を見せた。

「おお…。伍瓊どのに、周？どのではないか。いかが致した？」

この城門校尉・伍瓊と尚書・周？は、呂布が洛陽で帝の親衛隊長を務めるようになってから仲良くなった無二の親友であった。

「この度の戦で、呂布どのが官軍の副将として出陣されると話を伺ったので、挨拶をしておこうと思った訳だ」

伍瓊は、そう言うのと、くつたくのない笑顔を見せた。

「そうだったのか。ありがとう、伍瓊…」

呂布は、丁寧な頭を下げた。

「しかし、ついに世に点在する反董卓派たちが動き始めましたな。

聞いた話では、反董卓連合軍は相当な数の義勇兵を集めたそうだが、周？は、そう言って眉をひそめた。

「そうだな。それだけ、董卓の暴政に不満を持つ者が多いということだろう」

呂布は、周？の問いかけに対して、毅然とした態度でさらりと答えた。

「呂布どのは、董卓の片棒を担ぐことに抵抗はないのか？」

その伍瓊の言葉に、呂布は表情を陰らせた。

「言うておくが、俺は董卓のために働く気はない。全ては、天子様のためだ。めったなことを言うてない」

呂布は、そう言いきって、表情を引き締めた。

「どうやら、いらぬことを聞いてしまったようだな。すまん」

伍瓊は、そう言って頭をかいた。

「我らは、宮中であって董卓の所業に異を唱える同志じゃ。これからもお互い連携を取って、共に董卓の野望を阻止していこう」

周？は、小さく笑いながら、そう答えた。

「うむ…。こちらこそ、宜しくな」

呂布は、そう言つと、彼らと互いに顔を見合わせて握手をした。

「しかし、今回は連合軍とあつて兵の数が半端ではない。気を引き締めてかからないと命はないぞ」

伍瓊は、そう言つて、呂布の身を案じた。

「その通りだ。こんなところで、お前に先立たれたのでは、まさに董卓の思つつぶだからのう」

周？が、そう続けて言つと、呂布は大きく笑つた。

「案ずることはない。反董卓連合軍など所詮は烏合の衆だ。ひとたび乱れば、あえなく壊滅するであらう。それに、この俺の武勇に勝る者など、そうたくさんはおらぬ」

呂布の発言に対して、伍瓊と周？は、こう口々に言つた。

「わしは、お前を心配して言っているのだぞ」

伍瓊は、言葉を荒げて、そう言つた。

「我らは、同志であると共に親友でもあるのだ。絶対に死ぬようなことがあつてはならん」

その周？の言葉に、呂布は大きく頷いた。

「ありがとう。肝に銘じておくよ」

洛陽に来て以来、見知らぬ者ばかりに取り囲まれて、心を落ち着けることのなかつた呂布にとって、その言葉はとても有難く感じた。

「それでは、急いで準備に取り掛からないといけないので、ここで失礼する」

呂布は、そう言つて頭を下げた。

「呂布どの…。ご武運を祈っておりますぞ」

「どうか、お気をつけて…」

伍瓊と周？は、呂布の姿が見えなくなるまで、手を振り続けたのであつた。

それから、数日後…。

華雄を総大将とした官軍は、反乱軍を鎮圧するため、大行列を成して洛陽を出発したのだった。そして、彼らは洛陽から東方へ向かったところにある？水関に到着し、そこで敵が現れるのを待ったのであった。ちなみに、？水関は、周囲を山々に囲まれた壮大で強固な関門で、洛陽の都を外敵から守るために造られた要害である。

「敵は、まだ現れぬか。なんと悠長なことよ…。」

華雄は、そう言って、高らかと笑った。

「恐らく、急ピッチで色んな毛並を持った者を寄せ集めただけに、仲間内でうまくまとまらず、喧嘩でもしているのかも知れませぬ…。」
華雄の言葉を受けて、副将の呂布は、そう皮肉を言った。

「所詮は、烏合の衆か…。このこやって来たなら来たで、あつと言う間に蹴散らしてくれるわい。」

華雄は、そう言うと部下に命じて酒を持って来させた。

「景気づけといくか…。奴らがやって来るまで、飲みながら待つとしよう。」

酒杯に酒が並々と注がれると、華雄は、それをぐいっと飲み干した。
「くう、うまいな…。」

すると、華雄は調子に乗って、次から次へと酒杯を空けていったのだった。それを見た呂布は、たまらず、彼をたしなめた。

「総大将…。戦の前ゆえ、ほどほどにされよ。」

「堅いことを言うな。ほれ、そちも飲まれよ。」

そう華雄が勧めると、呂布は大きく首を横に振った。

「いや、拙者は遠慮させて頂く…。」

「まったく、面白みに欠ける男よのう…。」

こうして、華雄は、呂布の言葉に耳を貸すことなく、酒を飲み続けたのだった。

一方、反董卓連合軍は、彼らが到着してから数刻遅れた頃に、その

洛陽への道の途中にある大きな関門にたどり着いたのだった。

「どうやら、奴らはここで我らを迎え討とうとしておるな」

曹操は、？水関にたなびく董卓軍の旗を見て、その声を発した。

「よかるう…。望むところだ」

袁紹は、そう言ってニヤリと笑った。

「総大将どの…。まずはそれがしがいつて参ります。敵の出鼻を見事にくじいてみせましょう」

諸侯の一人である孫堅は、勇んで先鋒を買って出た。

「うむ…。貴公なら、心配をする余地はない。健闘を祈るぞ」

袁紹は、孫堅をそう激励した。孫堅は、後漢末期に起こった農民による数々の反乱を鎮圧した功績を持つ歴戦の強者であった。

そして、両軍は激突した…。

董卓軍は、華雄の指揮のもとで勇敢に戦い、次第に孫堅軍を圧倒していった。

「さあ、もう少して奴らは根をあげるぞ。怯むことなく、果敢に攻めろ！」

華雄が、その声を発しながら、沸いて出て来る孫堅軍の兵士を斬り刻んでいると、ただ一騎で、何者かが迫ってきた。

「そこにいるのは、総大将・華雄とみた。それがしと一騎打ちの勝負をしろ！」

孫堅は、勇敢に華雄を挑発した。

「わはははは…。この俺様に喧嘩を売るとは、大した度胸だ。一太刀で、ねじ伏せてくれるわい！」

華雄は、そう言って、孫堅に斬りかかった。

「酔えば酔うほど冴えわたる我が武芸をとくと味わえ…」

「この江東の虎をなめるなよ！」

孫堅は、華雄の大刀を片方の刀でとらえて払いのけ、もう片方の刀で華雄を斬りつけた。

「ぐ…。ぐおっ！」

孫堅に斬りつけられた華雄は、思わず大刀を大地に落とす。

「とどめだ！」

孫堅は、大刀を払いのけた刀で、鮮やかに華雄の首をはね飛ばしたのであった。

「敵の総大将・華雄を討ち取ったぞ！」

孫堅は、そう大声を発して、刀を天に突き上げた。その様子を見た董卓軍は、恐怖のあまり混乱状態となり、潰走を始めたのであった。

「何事だ！」

乱戦のさなか、呂布は大声を発した。

「大変です。総大将が、孫堅に討たれました」

「な……。何っ！」

呂布は、その情報を聞いて、仰天した。

「いつも酒ばかりかっくらって、ふんぞり返っているから、こうなるのだ。だが、俺は違うぞ！」

呂布は、戦場から逃げ失せようとする味方の兵たちとは逆に、果敢に一騎で突進していった。

「さあ、束になってかかって来い。この呂布が、相手になってやる！」

呂布は、その声を発すると次から次へと迫りくる将兵たちを叩き伏せていった。

「よし……。この高順も殿に続くぞ！」

「この張遼……。逃げも隠れもしないぜ！」

高順と張遼も呂布の勇猛果敢な振る舞いに促され、やって来る将兵を見事に斬り捨てていったのであった。

「どんどん来やがれ。逆賊どもが！」

呂布の武勇は圧倒的で、迎え討つところ敵なしと言わんばかりに、敵の死体の山をどんどん築いていった。そして、次第に孫堅軍は、

呂布の武威に恐怖を抱きはじめ、逆に潰走を始めていった。

「敵はおよび腰になったぞ。反撃開始だ！」

呂布の奮闘ぶりに勇気づけられ、孫堅軍の潰走ぶりを見た董卓軍の

将兵は、逃げるのをやめて、再び孫堅軍に立ち向かい始めたのであった。

「いかん…。このままでは、孫堅軍が壊滅してしまう。こちらも、全軍で総攻撃をかける！」

袁紹は、そう全軍に命令を下した。そして、命令を受けた反董卓連合軍の将兵たちは、一斉に董卓軍へ襲いかかったのであった。

第7話

「面白い…。死にたい奴から、かかってきな！」

呂布は、方天画戟を振り回しながら、雨後の夕ヶノコのように増えてくる敵兵たちを難なく斬り伏せていった。

「むづ…。あの漢は、何者だ！」

鬼神のごとく、縦横無尽に暴れまわる呂布を見た曹操は思わず唖つた。

「恐らく、献帝のお気に入りの豪傑・呂布でございましょう」

袁術は、眉間にしわを寄せながらそう言った。

「あれが、呂布…。なんと、恐ろしい漢だ。奴と互角に張り合えている者が一人もいないではないか」

曹操は、そう言つて、生唾をゴクリと飲んだ。

「まあ、心配するな。ならば、こちらの屈強な武芸者たちを奴にぶつけるまでだ」

袁紹は、そう言つと6人の武芸者たちを呼んで指示をした。

「くそつ…。斬つても、斬つてもキリがないぜ」

と、その時、呂布を呼びとめる声が聞こえてきた。

「その男…。我ら、この6人と戦え！」

選りすぐりの武芸者の一人である鮑忠は、呂布に向かってタンカを切った。

「ほう…。何者だ、お前ら」

呂布は、鮑忠らに目を向け、ガンをとばした。

「我こそは、済北の将・鮑忠…」

「わしは、冀州の潘鳳だ…」

「拙者の名は、南陽の愈涉…」

「俺様は、河内の方悦じゃ…」

「わしの名は、上党の穆順…」

「俺は、北海の武安国だ…」

自分たちの名を次々と吐き出す鮑忠たちの様子を見て、呂布は小さく吹き出した。

「ふっ…。面倒だから、まとめてかかってきな」

「言わせておけば、図に乗りおつて！」

鮑忠たちは、そう言つて呂布に一齐に襲いかかった。

「どおりやああ！」

呂布は、地を揺るがすような大声を張り上げたと同時に、一瞬にして6人の武芸者を真つ二つに斬り捨てたのであった。その様子を見た曹操は、思わず声をあげた。

「な、何っ…。あの屈指の6人の武芸者たちが、瞬殺だと！」

反董卓連合軍は、その恐ろしい光景を目の当たりにし、すくみあがつてしまった。

「よし…。この勢いで、一気に壊滅させるぞ！」

呂布の号令を受けた董卓軍は、戦闘本能をむき出しにして、弱腰となった反董卓連合軍に襲いかかった。

「わははは…。大したことはない奴らだ。もっと骨のある奴はおらぬのか！」

呂布は、そう言つて先陣を切り、勇ましく追撃をした。と、その時、何者かが呂布を呼びとめた。

「待て…。これ以上、好き勝手はさせん！」

「何者だ！」

呂布は、そう言つて振り向くと、ぼさぼさ頭に虎髭をたくわえた漢が、蛇矛を持って駆け寄つて来たのであった。

「俺の名は、張飛、字は翼徳だ…。神妙に勝負せい！」

張飛と名乗る漢は、ただならぬオーラを放ちながら、そう言い放つた。

「この漢…。ただ者ではないな」

幾多の修羅場をきり抜けて来た呂布は、その漢を一目見て、すぐに強敵であることを察知したのであった。

「いくぞ！」

張飛は、問答無用と言わんばかりに馬の腹を蹴り、一気に襲いかかっていた。

「来い！」

呂布は、そう言つて、方天画戟を力強く握りしめた。

そして、呂布と張飛の刃が大きくぶつかり合ったのだった。すると両者は、その攻撃を払いのけて遠ざかると、再び接近をして激突したのであった。

「ぬうおおお！」

「ふんぬううう！」

両者は、お互いの刃を押しあい、唸り声をあげた。と、次の瞬間、張飛はさつと蛇矛を下げて、すかさず突きを繰り出した。

「なんの！」

呂布は、その突きを受け止めて払い、すかさず攻撃に転じた。

「甘いぜ！」

張飛は、その攻撃を難なく受け止めた。そして、両者は激しい斬り合いとなり、一進一退の攻防を演じたのであった。周囲の者たちは、そのすさまじい闘いに目を奪われ、その剣劇の行方を見守った。そして、両者はついに打ち合うこと数百合を越えたのであった。

「はあ、はあ……」

「ふう、ふう……」

両者が互いに息を切らし始めた時、その修羅場に向かって、二人の武将が馬で駆けこんできたのであった。

「がんばれ、張飛！」

「わしも、加勢するぞ！」

両者の前に現れたのは、反董卓連合軍で張飛の義兄弟にあたる劉備と関羽、字は雲長であった。劉備と関羽も、張飛と同様に武勇に秀でた武人であった。

「ぬう……。3対1とは、卑怯なり。俺もその戦いに加わるぞ！」

「この高順も、加勢をいたす…」

劉備らの動きを察知した張遼と高順は、そう口々に言い放って、呂布に迫り来る新手たちの前に立ちはだかったのだった。

「ぬう…。邪魔をするな」

劉備は、そう叫んで高順に一撃を食らわそうとしたが、うまく裁かれてしまった。

「そこをどけえ！」

関羽も続けて、立ちふさがる張遼に攻撃をしたが、難なく防がれてしまった。そして、呂布対張飛、張遼対関羽、高順対劉備の乱戦が始まったのであった。

「むう…。これでは、らちがあかん…」

曹操は、思わずそうこぼした。

「ふむ…。本日は、ここまでだな」

袁紹は、そう言うと、引き上げを促すドラを鳴らした。

「引き上げの合図だ」

合図を耳にした劉備は、関羽と張飛に引き上げを促した。

「いたし方あるまい…」

関羽は、劉備をちらりと見て頷いた。

「ちつ…。運のいい奴め。だが、次は必ずその首をはねてやるぜ！」

張飛は、そう言うと、劉備らと共に味方の陣へと帰っていったのであった。

「待ちやがれ！」

張遼が、劉備たちを追いかけようとすると、呂布はそれを制した。

「もう、我が軍は疲労困憊だ。俺たちも、ここで引き上げるぞ」

「むむ…。わかりました。皆の者、我らも引き上げるぞ」

張遼は、呂布の指示に従い、味方へそう促した。

「この俺をここまで苦しめるとは、なんとという漢だ。張飛よ…。あなたの名は決して忘れないぞ」

呂布は、厳しい眼差しで、去っていく張飛の姿を見つめたのであった。

第8話

その後、？水関の攻防は、延々と続いた。

初めは両軍とも一進一退の攻防を続けていたが、大義を掲げて勢いに乗る袁紹率いる反董卓連合軍は、じわりじわりと優勢になっていった。しかし、華雄戦死後、総大将となった呂布を擁する董卓軍は、籠城戦の構えをとり、必死に反董卓連合軍の攻撃を食い止めていたのだった。

「？水関の戦況はどうなった？」

？水関より遠く離れた洛陽にいる董卓は、傍にいた李儒にそう聞いた。

「はっ……。あまり芳しくないとのことにござります」

「それは、いずれ？水関を破られて、洛陽にまで兵が押し寄せて来ると言うことか」

董卓は、遙か遠くにある地平線を見ながら、そう言った。

「こしゃくな奴らだ。李儒よ、何か良い策はないのか」

董卓は、李儒にそう聞くと、彼は厳しい眼差しでこう述べた。

「恐れながら、この洛陽においては危険だと考えます。かくなる上は、長安へ遷都をしてはどうでしょう……。さすがに長安までは距離があるため、兵糧の問題などを考えますと、奴らも追っては来ないので
は？」

長安は、シルクロードの基点として西方諸国との交易が盛んな都であり、その繁栄ぶりは洛陽に次ぐものであった。戦いの最前線を部下たちに任せて御大将の安全を図り、豊富な経済力を駆使して反撃の機会を伺おうと李儒は考えたのであった。そして、万が一、洛陽が落ちても長安に立てこもれば、十分防ぐ手立てがあるとみていたのである。

「しかし、何の根拠もなく遷都はできぬぞ」

董卓の問いかけに、李儒はこう答えた。

「ならば、城内にいる童子たちに遷都を暗示させる歌を流行らせ、それを根拠としてはどうでしょう?」

「なるほど…」

董卓は、あご髭をなでながら、眉をひそめた。

「うまく、やれよ…」

「はっ…。承知つかまつりました」

李儒は、お辞儀をして、すみやかに退席したのであった。

数日後、城内で妙な歌が流行り始めた。そして、歌が流行り始めたことを確認した董卓は、すぐに朝議を開いたのであった。

「本日、皆に集まって頂いたのは他でもない。最近、この城内で長安への遷都をした方が良くと暗示する歌が童子たちの間で流行っているそうだ。わしが思うに、これは天から与えられた啓示であると考えている。故に、早急に遷都を行いたいと考えておるのじゃ」

董卓がそう言い終わるやいなや、たちまち司徒の王允は反対の意を表した。

「大將軍様…。今は、そのような時ではございません。童子たちの歌を信じるなど、もつての他にござります。この歴史ある洛陽を捨てれば、民は路頭に迷い、天下の乱を増長させるだけですぞ」

王允の諫言に、董卓は激怒した。

「わしは天意をくみ、国家のためを思つて考えているのじゃ。それに、天下の計を成すのに、民百姓のことなど案じられるか!」

董卓の一喝に、諸官は一同に静まり返った。だが、ただ一人、城門校尉の伍瓊が毅然とした態度で異論を唱えたのであった。

「大將軍様…。国は民があつてこそ、成り立つものです。どうか、民草を憐れんで頂きたく思います」

その伍瓊の発言を聞いた董卓は、厳しい表情となり、こう言い返した。

「控えろ…。第一、貴様は何者だ。何故、こんなところにいる!」

「私が呼びつけました。この者は、私が可愛がっている男で、城門

校尉でありますが、いささか才がありますので……」

王允は、そう言つて頭を下げた。

「そのような勝手なことは許さん……。城門校尉の分際で、わしに意見するとは何事だ……。早く、この下衆の首をはねろ！」

「大將軍……。今、一度ご再考を……」

伍瓊は、その声を発しながら、その身を警護兵たちに槍で突かれて、首をはねられたのであった。

「おお……。なんと惨いことをなさいますか」

王允は、亡骸となった伍瓊の傍により、すすり泣きを始めた。

「黙れ……。わしに逆らう奴は、みな死罪じゃ！」

董卓は、そう言つて王允を蹴りとばした。

「下がれ、王允……。殺されなかつただけでも、マシと思え！」

董卓の傍若無人な振る舞いの前に成す術の無い王允は、伍瓊の首を手にとつてスゴスゴと退出したのであった。

「皆の者……。異存はございませんな」

李儒の確認に、誰一人逆らう者はいなかった。こうして、董卓は異論を持つ諸官を抑えつけ、強引に事を決めてしまったのであった。

そして、朝議が終わるやいなや遷都の発令が書かれた高札は、洛陽中に掲げられたのだった。

「事は急を要する。準備は進んでおるか？」

董卓は、命令通りに事が進んでいることを確認するため、近くにいた李儒にそう問いかけた。

「はい……。高札を立て、役人にふれさせましたから、民草たちも我が軍勢について参りましょう」

董卓は、李儒の話を聞いて眉間にしわを寄せた。

「貧乏人どもはついて来るだろう。しかし、富貴な者は家財を持つて亡命する可能性がある。今、朝廷は金銀に乏しい状態であるゆえ、臨時徴収令を出せ」

「承知しました」

董卓は、これを機に火事場泥棒を企んだのであった。こうして、李儒は兵を集めて、富豪の家を手当たり次第に襲わせた。そして、大概の者たちは抵抗をしたため、皆殺しにされ、金銀財宝を略奪したのであった。

「臨時徴収の件、遅滞なく完了致しました」

董卓は、そう李儒の報告を受けた。

「よし…。ならば、出発じゃ！」

董卓は、そう大きく言い放って、さらに続けた。

「李儒よ…。洛陽を出た後は、都中に火を放って焦土化させる。敵にくれてやるものなど何も無いからな」

「かしこまりました」

李儒は、そう言っって頭を垂れた。

こうして、董卓軍は洛陽を出発したのであった。

「さあ、とっとと歩かぬか。止まれば、斬り殺すぞ！」

民草の誘導を任された武官たちは、悪鬼のごとく鞭を振りまわした。

「お父さんは、病気で歩けないのです。何とぞ、お慈悲を…」

一人の娘が、指揮を取る武官に泣きついてきた。

「ならば、その足手まといは殺すまでだ」

武官は、そう言っって、その娘の親父を惨殺したのであった。

「お父さん、お父さん…」

娘は、亡骸となった父に寄り添って泣き始めた。

「止まるなと言っったのが、わからんのか！」

武官は、いきり立ち、ついにその娘まで殺してしまったのであった。このような鬼畜な所業が、あちこちで起こったため、行軍は阿鼻叫喚の状態となった。そして、流民の群れが一通り城門から出た途端、ふいに都から火の手が上がったのであった。

「おお…。なんと言うことじゃあ。歴史ある洛陽の美しい都が燃えている」

董卓の焦土戦術により、李儒と董卓は兵を率いて洛陽中に火矢を放ち、洛陽を火の海にしてしまったのであった。

「わはははは……。燃えろ、燃えろ……。全て、焼き尽くしてしまえ。おかげで、良い余興になったわい」

洛陽が大きな炎を上げて燃えるさまを見ながら、董卓は大笑いをした。

「このような悪行は、断じて許さぬ。董卓よ……。いずれ、時が来れば、その報いを受けることになるであろう」

王允は、そう言って、伍瓊の形見の品を握りしめたのであった。

第9話

まもなくして、長安への遷都の報は？水関にも伝わってきた。

「殿……。一大事にござります」

高順は、大慌てで呂布のもとに駆けつけた。

「何事だ！」

慌てふためく高順を落ち着かせながら、呂布は尋ねた。

「大將軍様が、長安への遷都を強行し、洛陽に火を放ったとのこと
です」

「な、何っ！」

高順の報告を聞いた呂布は、たまらず仰天した。

「なんと恐れ多いことを……。かような暴挙、誰も諫言をしなかった
のか？」

呂布は、声を荒げて問いただした。

「異論を唱えた伍瓊どのが、その場で処刑されたそうです」

「伍瓊どのが、殺されただと！」

呂布の怒りは頂点に達した。

「おのれ、あの逆臣が……。我が友を殺し、罪もない洛陽の民を流民
にさせ、必死に戦っている？水関の兵たちを見捨てて、自分だけが
さっさと逃げ失せるとは！」

呂布は、たまらず傍にあつた椅子を蹴りとばした。

「いかが致しましょう」

高順は、冷静に努めて、呂布に問いかけた。その様子を見た呂布は、
こみあげてくるものを必死に抑えながら、冷静に応えようとした。

「このまま、？水関で籠城戦を続けても、いずれは突破されるだけ
だ。ならば、我らも今宵の内に、ひっそりと城を出て、長安を目指
そう」

「承知つかまつりました。それでは、皆にふれまわってきます」

高順は、そう言って、急いで退出した。

その夜、呂布たちは、闇にまぎれて？水関を脱出した。その報を聞いた反董卓連合軍は、すぐさま追撃を開始したのであった。

「皆の者…。このチャンス逃すな。二度と息を吹き返さないよう、徹底的に叩いてしまえ！」

曹操は、そう容赦なく、大声を張りあげた。そして、反董卓連合軍は、敵兵と見るやいなや、次から次へと董卓軍の兵を斬り殺していったのであった。その様子にぐつと耐えながら、呂布は赤兎馬へ鞭を打ち続けた。

「殿…。味方の兵が、どんどん敵の餌食となっておりませぬ！」

高順は、思わず声を荒げた。

「やむを得ん…」

呂布は、そう言って歯ぎしりした。

「皆の者…。恨むなら、大將軍を恨め。全ては、大將軍のしでかした暴挙が原因なのだからな！」

呂布は、そう言いながら、追撃してくる敵兵を斬り刻み、必死に長安を目指した。

「こんな理不尽なことで、死んでたまるか。帝を守るためにも、父上や伍瓊の仇を討つためにも、絶対に生き抜いてやる」

呂布は、鬼のような形相で、赤兎馬に鞭を打って走り続けたのであった。

一方、反董卓連合軍は、執拗に董卓軍を追いまわしていた。と、その時、一人の斥候が袁紹のもとに駆けつけてきた。

「大変です。総司令官様…。洛陽が煌々と燃えておりますぞ」

「何っ！」

袁紹は、その報告を聞いて、ぎよつとした。

「恐らく、董卓が火を放ち、洛陽から脱出したのだと思われます」

「おお…。何と言うことだ。あの莊嚴で麗しい洛陽の街が炎に包まれたのだ…」

袁紹は、固めた拳を震わせながら、そう言った。

「袁紹どの…。もしかしたら、逃げ遅れた者もおるやもしれません。至急、洛陽へ急行し、状況確認をしましょう」

傍らにいた曹操が言くと、袁紹は大きく頷いた。

「うむ…。我ら義勇軍は、民のために立ち上がった軍勢だ。民を救うことこそ、我が軍の使命である」

こうして、袁紹は、董卓軍の追撃を取りやめ、軍勢を洛陽へ向かわせたのであった。

洛陽に到着した反董卓連合軍は、天を焦がす勢いで燃え広がる都を目の当たりにし、愕然とした。

「皆の者…。すぐに火を消すのじゃ」

袁紹は、すぐさま消火の号令を出した。その命令を受けた反董卓連合軍は、一斉に炎に包まれた洛陽へ突入した。

「財物には手を出すな…。逃げ遅れた老人・女子供を保護してやれ！」

曹操はその号令に続けて、辺りにいる部下たちに、そう命令をしていったのだった。そんな中、劉備の率いる軍勢は降りかかる火の粉を払いながら、臆することなく先陣を切って、炎の海へと身を投げたのだった。

「このような暴挙のために、罪のない良民を犠牲にさせてたまるか」
劉備は、そう言って歯を食いしばりながら辺りを見渡した。すると、燃え盛る炎の中で、劉備は民家の前で倒れている一人の老人を見つけたのだった。

「むづ…。あんなところに、行き倒れのご老人がいる」

劉備は、ためらうことなく、その老人に駆け寄った。

「おお…。お侍さま、お助けください」

炎に包まれた家から、やっこの思いで脱出した老人は地を這いながら、劉備の姿を見て思わず手を伸ばした。

「我らが来たからには、もう心配いりませんよ」

「すまんのう」

劉備は、そう言って、老人を抱きかかえた。

「兄者…。俺は、こっちの方を見てくる」

関羽は、指をさして、そう口にした。

「ならば、俺はこっちへ行ってみるぜ」

張飛も関羽に続けて、別の道を指差した。

「うむ…。頼んだぞ」

劉備は、そう言って、目で合図をしたのだった。反董卓連合軍の中でも、劉備の率いる軍勢は民百姓から募集した義勇兵で結成されていたせいか、最も献身的に救助活動を行ったのであった。

反董卓連合軍は、救援救助および消火活動で、幾日もの時間を費やすことになった。その結果、董卓を完全に逃がしてしまうことになり、また自軍の兵糧が尽きてしまったのであった。

「総大将より、お話がある。皆の者、心して聞くがよい」

曹操は、そう言って、一步下がった。すると、袁紹は、ずかずかと前へ出て来て、辺りを見渡しながら演説を始めたのだった。

「洛陽の大半は焦土と化した。とりあえず火は全て消すことはできた。また、逃げ遅れた住民を多く助けることもでき、我が軍は大義の旗のもとで動くことができたと思う。董卓を取り逃がしたのは残念であるが、奴らの軍事力を激減させることはでき、今回の連合軍の働きは、おおむね成功であったであろう。時は経ち、故郷へ帰りたい者もおられるだろうし、これにて連合軍を解散したいと思う。こうして、反董卓連合軍は解散となったのであった。そして、諸侯たちは続々と、故郷を目指して散っていったのである。」

第10話

呂布が長安にたどり着いてから、数か月が経った。

「呂布どの…。最近、大將軍様は、さらに傲慢になってきておりますな」

周？は、自宅に呂布を呼び、そう切り出した。

「ああ、段々ひどくなる一方だな。自分に逆らう者は、徹底的に処刑を繰り返す始末だ」

呂布は、そう言っつて、酒杯を飲みほした。

「やはり、暗殺しかないかもしれん…」

その周？の発言に、呂布は眉をひそめた。

「しかし、どうやって実行するかが問題だ」

呂布がそう言つと、周？はニヤリと笑った。

「手だてはあるぞ。最近、大將軍は王允様の娘を妾とされたのをご存知か？」

それを聞いた呂布は、小さく頷いた。

「貂蝉どこのことか。大層お美しい方だと聞いている」

「今、大將軍は彼女に夢中になっているそうだ。そこで、貂蝉どのに話を持ちかけ、暗殺の機会を探ってはどうかと思うのだが…」

それを聞いた呂布は、少し考え込んだ。貂蝉は、戦乱の中で親を亡くし、孤児となっていたところを王允の計らいで養女となった女性である。ある日、董卓が王允の屋敷へ訪れた時、彼女に一目ぼれをし、強引に自分の妾にしてしまったのであった。

「ふむ…。しかし、貂蝉どのは協力してくれるかな？」

「貂蝉どのは、王允様の寵愛を受け、多大な恩義を感じております。王允様にも、きちんとご説明をして取り計らってもらえれば、我らに協力してくれるはずだ」

周？は、自信を持ってそう言った。

「やってみる価値は、ありそうだな」

呂布は、そう言って、口角をあげた。

「よし…。私が根回しをやるから、君は大将軍のとどめを刺してくれ」

「わかった…。共に伍瓊の仇を討とう」

呂布と周？は、そう言って乾杯をしたのであった。

こうして、周？は王允のもとへ参り、説得を行った。王允は、その計画に賛同し、自らも貂蝉へ口添えをすると約束をしたのであった。そして、周？は貂蝉の居る部屋へ忍びこみ、計画を具現化するため、密に話し合いを行うことにしたのであった。

「貂蝉どの…」

周？は、貂蝉の部屋の前で、そう声をかけた。

「誰です？」

貂蝉は、小さな声で尋ねた。

「周？にございます」

「まあ、周？様ですか。父・王允からお話を伺っております。どうぞ、お入りください」

貂蝉は、そう言って、周？を中に入れた。

「貂蝉どの…。今日もまた、一段とお麗しいですな」

「おほほ…。そのようなお世辞など…」

貂蝉は、機嫌よさそうに笑った。

「さあ…。そんなことよりも、早く本題に入りましょう」

「それでは…」

こうして、周？と貂蝉は、話し合いを始めた。そして、段々と話は最後の仕上げの部分となり、二人は周囲への警戒心が薄れるほど熟考していった。

「ここが肝心だからな」

周？が顎ひげをなでながら、首をひねっていた時、ふいに何者かが、憤激しながら目の前に現れたのだった。

「何者だ…。貴様！」

周？は、はつと我に帰り、後ろを振り向いた。すると、そこには貂蝉に夜伽をしてもらおうとやって来た董卓が仁王立ちをしていたのであった。

「し、しまった…」

「わしのかわいい貂蝉に手を出そうとは…。この不屈き者めが！」

周？は慌てて逃げようとしたが、董卓の剣はすばやく彼をとらえた。

「ぐ、ぐあつ…」

周？は、胸に突き刺さった剣から血が滴る様子を見て、思わず悶えた。

「死ねえ…。下郎め！」

董卓は、そう言つて、周？の首をはねとばしたのであった。

翌日、周？の首と共に高札が掲げられた。

右の者、大將軍の妾と密通しようとした罪で処罰された由…。

「し、周？…」

その高札を見た呂布は、静かに目を閉じて涙を浮かべた。逆臣を成敗しようとした志した者が、密通と言う破廉恥な罪を被せられて死んだのである。呂布は、周？の無念さが痛いほど感じたのであった。「なんと、不名誉な死にざまだ。これでは、周？があまりにも惨すぎる」

呂布は、こみ上げてくるものを必死で抑えた。

「周？よ…。お前の死は、決して無駄にはせん。必ず、俺が逆臣・董卓の首をはねてみせるぞ」

呂布は、そう心に誓つたのであった。

董卓は、貂蝉の間男を退治したことで、数日の間はとても上機嫌だった。と、言うのは、近頃、彼が留守にしている間を狙つて、彼女が若い男と会つていると言う噂が流れていたからであった。

「貂蝉ほどの美人はおらぬ…。ありえない話ではない…」

疑心暗鬼となつた董卓は、それを悩みの種とし、常に頭を抱えてい

たのだった。本来ならば、浮気の疑いがある貂蝉に咎めがあつても良さそうなものだが、彼は完全に彼女の虜となつていたため、少しも彼女を責めず、聞くことすらしなかつたのであつた。そんな時、董卓は、彼女の部屋に入り込んだ周？を目撃した。そして、彼が噂の間男だと思ひ込んだ董卓は、問答無用で彼を惨殺したのである。

「わしのかわいい貂蝉にちよつかいを出すなど言語道断じゃ」ところが、間男の噂話は、再び囁かれ始めたのであつた。

「むう…。新手の間男が現れおつたか…」

周？は犯人ではないため、当然と言えば当然なのだが、貂蝉の美貌を高く評価していた董卓は、それに気付かなかつた。

「見せしめに奴をさらし首としたのに、まだ貂蝉を狙つか…。何と大胆不敵な…」

怒り狂つた董卓は、剣の腕の立つ強者たちを揃えて、監視の目を行きわたらせることにしたのだった。すると、その者たちは、数百人近くの容疑者を捕らえて、ことごとく斬り殺したのであつた。

「こんなに容疑者がたくさんいるものなのだろうか…」

あまりにも惨殺された者の数が多いので、臣下たちの中には不審を持つ者もいた。実は、董卓に対して異心を持つ者や疑わしき者に目をつけた彼は、この機会を利用して、どさくさに紛れて彼らを暗殺していたのであつた。

だが、貂蝉の間男の噂は、一向に途切れることはなかつた。無論、殺された彼らが、犯人では無かつたからだった。

「一体、犯人は何者なのだ…。それとも、貂蝉に手を出そうとしてゐる輩は、複数いるとも言つのか…」

と、そんな時、頭を抱える董卓のもとに有力な情報が舞い込んできたのであつた。

「なんと、呂布に似た男が、貂蝉の部屋の前でうろついていただ」と！

董卓は、その話を聞くやいなや激怒した。

「おのれ…。わしに盾突くだけでは飽き足らず、わしの女まで奪お

うと言つのか……」

董卓は、急いで部下に命令し、呂布を呼び出そうとしたのだった。

その頃、自宅でくつろいでいた呂布は、高順から耳障りな噂を聞かされたのであった。

「何……。俺が、貂蝉と密通しているだと！」

呑気に茶を啜っていた呂布は、思わず吹き出した。

「はい……。街中、その噂で持ち切りとなっておりませぬ」

高順が冷静にそう言つと、横にいた張遼は、ふいに大きく笑つた。

「わはは……。さすが、我が殿だ……。武勇だけでなく、精力も絶倫だったか！」

「馬鹿なことを言つな……。俺が、そんなことをするはずが無いだろうが！」

その張遼の冷やかに、呂布は顔を紅潮させて怒鳴つた。すると、高順は心配そうな顔をして、こう言つた。

「しかし、困りましたな……。この噂が、大將軍の耳にでも入つたら、確実に咎められますぞ」

それを聞いた張遼は、ニヤニヤしながら、軽く否定した。

「いや、間違いなく殺されるな……」

「貴様……。そんなに俺を殺してえのか！」

激怒した呂布は、張遼に掴みかかつて、喧嘩を始めたのだった。と、その時、董卓の使いの者が、厳しい表情で呂布の屋敷に訪れたのであった。

「呂布様……。大將軍がお呼びです……」

「やはり、来たか……」

それを聞いた呂布は、思わずため息をついた。すると、傍にいた高順は、ふいに呂布の耳元で囁いたのであった。

「殿……。行つてはなりません……。飛んで火にいる夏の虫ですぞ」

「わかつておる……。しかし、ここで命令を無視すれば、さらに疑われるだけだ」

呂布は、小声でそう言い返すと、その使者に対してこう告げた。

「わかりました。すぐに支度を致します」

そして、一礼をすると呂布は、出掛ける準備をするため、別室へ向かった。彼は、董卓の前で堂々と申し開きをしようと考えたのだった。一方、それを聞いた使者は、安心した面持ちで、すみやかに屋敷を去っていったのであった。

「おい……。このことを陛下にお伝えした方がいいぞ……」

その部屋で高順と二人きりとなった張遼は、おもむろにそう彼に話した。

「そうだな……」

高順は、その意見に小さく頷くと、すぐに部下へ命じて、献帝のいる宮殿へと走らせたのであった。

第11話

その頃、董卓は、呂布の到着を手ぐすねを引いて待っていたのであった。

「貂蝉に手を出す者は、誰であれ許さん…。いや、あの生意気な坊主は、ここで始末するべきだな…」

董卓は、そう口にすると思わずニヤリと笑った。と、その時、彼の部下から呂布の到着の旨を伝えられたのであった。

「やっと来たか…。今日が、貴様の命日じゃ」

董卓は、呂布に対して、すぐに大広間に来るよう指示したのだった。

そして、呂布と面会をするやいなや董卓は、こう切り出したのであった。

「最近、わしの愛妾である貂蝉が、何者かと密通していると言う噂が後を絶たない状態だ。そこで、怪しい奴らをとことく始末したのだが、それでも収まらぬ…。どうしたものやら…」

「左様でござりましたか…」

呂布が、そうしらばくれると、董卓は徐々に目つきを変えて続けた。「耳寄りな情報だと、どうやら犯人は貴殿によく似ていたとのことじゃ。まさか、お主が犯人ではあるまいな…」

董卓の問いかけに、呂布は毅然とした態度で言い返した。

「拙者では、ございませぬ。何故、拙者が大將軍様の寵姫に手を出さなければならぬのですか」

「黙れ…。そのような詭弁が、わしに通用するとも思ったか！」

董卓は、そう言い放つと、すぐに合図をして、部屋の隅で待機をさせていた刺客たちを呼び寄せ、彼を襲わせたのであった。

「狼藉者が！」

呂布は、そう発すると、刺客たちを一人残らず斬り捨てたのであった。

「おお…」

董卓は、あまりの呂布の強さに、思わずそうこぼした。

「大將軍…。さては、拙者をここで亡き者にしようと思われたか…。許せん！」

呂布は、刺客たちの血を吸った刀を董卓に向けて、怒りを露わにしたのだった。と、その時、大広間の入り口で、何者かが大声を発したのであった。

「二人とも、そこまでだ！」

「へ、陛下…」

突然の献帝の登場に、呂布と董卓は、思わず息を飲んだのだった。

「朕の前で、流血は許さん…。まずは、刀をしまえ！」

「申し訳ありません」

献帝の叱咤を受けた呂布は、すぐに刀を鞘に納めた。

「董卓よ、これは如何なる戯言か…。この漢が、そなたの寵姫を汚すような下衆であると思っておるのか！」

「いや…。しかし、陛下…」

董卓がそう言いかけると、献帝はそれを制した。

「言い訳をするな…。そなたは、その寵姫に入れ込みすぎて、どうかしていると思えぬ。それとも、女にうつつを抜かして、この国を滅ぼすつもりか！」

「め、滅相もございませぬ」

献帝の言葉を受けた董卓は、そう口にして、深々と頭を下げたのだ。つた。

「呂布よ…。どうやら、董卓は、勘違いをしておったようじゃ。今回の一件は、朕に免じて、許してやってくれぬか」

献帝は、ここで呂布が董卓を斬れば、彼はお尋ね者になった上、董卓が殺されたことで、その臣下たちが黙っていないと考え、穩便に事を鎮めることが適切であると判断したのであった。

「陛下の仰せであれば、異論はございませぬ」

それを察知した呂布は、献帝に感謝をしながら、お辞儀をしたのだ。

った。

「だが、その不貞な輩は、このまま見過ごすわけにはいかん。そこで、呂布よ…。お主が張り込んで、その間男を捕らえてやってくれぬか？」

その献帝の措置に、呂布は目を丸くしたが、すぐにこう答えた。

「御意にござります」

それを聞いた董卓は、顔を引きつらせながら、こう言った。

「おお…。呂布どのが、力を貸してくれると言うならば、これほど心強いことはない。期待しておるぞ」

「（なんで、貴様のために…）」

その董卓の言葉に呂布は、正直ム力ついたが、それを表情に出すことなく答えた。

「大船に乗った気分です、吉報をお待ちください」

こうして、呂布は、その間男を捕らえるため、張り込みを開始することになったのであった。

呂布は、屋敷に戻って高順たちに経緯を伝えると、すぐに手勢を連れて、貂蝉の住む部屋の周囲を固めたのであった。

「まったく…。陛下の親衛隊長のする仕事じゃねえな…」

ふと、張遼は、そう愚痴をこぼした。すると、その言葉に対して高順は、こう答えたのだった。

「そう言うな…。ここで、犯人を捕まえてしまえば、殿の容疑は完全に晴れるのだぞ」

「だから、俺はシロだと言っているだろうが！」

その発言に対して、癪に障った呂布は、すぐに言い返した。

「そうでした…。申し訳ありません」

高順は、うかつな発言をしたことに、後悔をしながら頭を下げたのだった。

「しかし、その間男は、どういう神経をしているのだろうな。あれだけ多くの者がさらし首となったのに、それでも通い続けるとは…」

と、呂布が、そう話題を変えようとした時、扉の奥から貂蝉が現れたのであった。

「お勤め、ご苦労様です……」

貂蝉は、そう言うと、深々とお辞儀をしたのであった。

「（何が、お勤め、ご苦労様です……」だ。お前が、変な野郎と不倫をするから、俺たちがこんな目に遭っているのだから……）」

呂布は、口をへの字にしながら、頭を下げたのだった。と、その時、貂蝉は、呂布の顔を見た瞬間に、表情を強張らせたのであった。

「うん……。どうされましたか？」

「……。いえ、何でもありませんわ。それでは、失礼します……」

貂蝉は、そう言うと、そそくさと奥へ引っ込んだのであった。

「何なんだ、一体？」

訳がわからない呂布は、そう発して、不快そうな顔をしたのだった。

しばらくして、日が傾き始めた……。

「しかし、遅っせえな……。かつたるくてやってられないぜ」

痺れを切らした張遼は、思わず声を上げた。

「これだけ、嚴重に警備しておるのだ。今日は、やって来ないかもしれないな」

呂布は、張遼にそう答えると、頭をガリガリとかいた。と、その時、奥の部屋から、再び貂蝉が現れたのであった。

「皆様……。さすがに、お疲れでございましょう。お酒と食事を用意しましたので、どうぞ召し上がってくださいませ……」

貂蝉は、そう言うと、女中たちに酒と肴を持たせてきたのだった。

「おお、気が利くじゃねえか。喉が渴いてしょうがないところだったんだ」

張遼は、途端に笑顔となつて、目を輝かせた。

「おい、仕事中だぞ。酒を飲んでいる場合ではない」

張遼の様子に、高順はそうたしなめた。すると、呂布は、それに対して、こう言ったのであった。

「うむ…。まあ、少しくらいなら良かるう」

「と、殿…。しかし…」

高順は、呂布に反論をしようとしたが、彼はそれを制して続けた。

「それに、折角、貂蝉どのが用意してくれたのだ。ありがたく頂戴するとしよう」

こうして、呂布たちは、貂蝉が用意した酒と肴を頂いたのだった。

すると、呂布たちは、すぐに猛烈な睡魔に襲われ、その場で眠りについてしまったのであった。

「うふふ…。ほんと、単純な人たちね…」

貂蝉は、そう言っつて、小さく笑った。実は、その酒と肴には、眠り薬が仕込まれてあったのだった。

第12話

しばらくして、呂布は、自身が眠りこけていたことに気が付き、はつと目を覚ました。

「しまった…」

我を取り戻した呂布は、すぐに周りで眠っている張遼らを起こそうと大きく揺すった。だが、彼らは、一向に目を覚ます気配を見せず、ぐうぐうと大いびきをかいていたのであった。

「ちっ…。眠り薬を盛りやがったな…。あのクソアマ！」

呂布は、奥にいる女狐に計られたと悟り、思わず歯ぎしりをした。だが、感情に任せて貂蝉を斬ると間違はなく董卓と仁義なき戦いとなり、さらに献帝の意に背く行為となるため、彼は苦虫を噛み潰す思いで堪えたのであった。と、その時、奥の部屋から男女二人の楽しそうな声が聞こえてきた。

「むっ…。この隙に、間男に入られたか…」

呂布は、冷静さを取り戻し、そつと聞き耳を立てて、中の様子を伺ったのだった。

「しかし、警備の者たちへ眠り薬を飲ませるとは、あなたも恐ろしいことをするものだ」

間男は、そう言って、笑いながら酒を飲み干した。それを聞いた貂蝉は、その男に流し目を使って、こう返したのだった。

「だって…。少しでも、あなたと一緒にいたいから…」

「貂蝉…」

そして、二人は互いに見つめ合った。

「でも、不思議なものね…。あなたとそっくりな人が、あの警備の方たちの中にいるのですから…。最初に見た時は、本当にびっくりしたわ…」

「へっ…。俺とそっくりな奴？」

間男が、そう言いかけた時、突如として呂布が割って入ってきたの

であった。

「こらあ、お前ら…。大概にしないと、さすがの俺もマジでキレるぞ！」

呂布は、そう言い放って、きつと間男を睨みつけた。すると、彼は目を丸くして、思わず息を飲んだのだった。

「…。お、俺とそっくりだ…。こりゃ、たまげた…」

「ほんとだ…。信じられぬ…」

間男の方も腰を抜かして、その場でしりもちをついたのであった。

「おい、お前…。まさか、俺の生き別れの兄弟ってことはないよな…。」

「そんな訳ねえだろ…。今まで生きていて、兄弟がいるなんて、聞いたこともねえよ！」

呂布は、間男のボケに、思わずつつこみを入れた。と、その時、貂蝉が初めて自分の顔を見て驚いた理由を知ったのであった。

「ここまで瓜二つじゃ、びっくりするのも当然だな…」

呂布は、思わず高笑いをした。と、すぐに我に帰って、刀を引き抜いたのであった。

「おっと…。あまりのことに、思わず任務を忘れるところだった。この間男を、とっ捕まえないと張り込んだ意味が無くなるってものだ」

「くっ…」

間男は、すばやく後ろへ飛び、刀に手をかけたのであった。

「や、やめて！」

貂蝉は、そう大きく言い放って、呂布を止めようとした。

「しかし、俺と同じ顔をした人間を斬ると言うのは、正直気分が悪すぎるぞ…」

呂布は、苦笑いをする、ふいに刀をすつと下した。そして、その間男に対して、おもむろに質問をしたのだった。

「なあ、お前…。名前は、なんて言うんだ？」

「俺か…。俺の名は、成廉だ…」

成廉の淡々とした答えに、呂布はニヤリと笑った。

「そうか……。ならば、成廉よ……。今回は、見逃してやってもいいぞ。大將軍の妾に手を出すほどの大胆不敵さに免じてな」

「ほんとうか？」

呂布の言葉に、成廉は思わず耳を疑った。

「ただし、条件が二つある。一つは、今後において、貂蝉どのに近づかないこと……。そして、もう一つは、俺の部下になることだ……。」その発言に、ふいに貂蝉が猛反発をした。貂蝉は、董卓によって無理やり妾にされた経緯があり、さらに彼とは大きく年の差が離れていた。そんな折に、若くてハンサムな成廉が目の前に現れ、彼に夢中となっていたからだだった。

「何をおっしゃるのです。私たちは、愛し合っているのよ。何の権限があつて、あなたが私たちを引き裂くことができるわけ？」

と、その貂蝉の言葉を聞いた成廉は、突然真面目な顔になって、こう言い出したのであつた。

「いや……。こんな関係は、もう止めよう。前々から考えてはいたが、中々切り出せなくて……。本当に済まない……」

「成廉……」

思わぬ成廉の言葉に、貂蝉は戸惑った。成廉は、腕つぶしには自信があつたが、学が無かつたため、定職に就くことができず、拳句の果てに盗人となつた男であつた。そして、たまたま、この屋敷へ忍び込んだ際に、彼女を見かけて一目ぼれをしたのだつた。その後、彼は、高格武士の格好をして彼女に近づき、次第に彼女と仲良くなつていったのだが、彼女と密会を重ねていくうちに、彼女に本当の自分を偽ると言う罪悪感と己に対する情けなさ、さらに将来への不安を強く感じるようになっていたのであつた。

「正々堂々と胸を張って付き合うのであれば話は別だが、今後において、とてもそのような状況になるとは思えない……。それに、いくら大將軍様とは言え、これ以上関係を続けていると、最後には堪忍袋の緒が切れると言うものだ。そうなれば、あなただって、ただで

は済まないだろう」

成廉は、そう言うと、呂布に向き直った。

「呂布どの…。ここで会ったのも、同じ顔で生まれてきたのも何かの縁だ。こんな女にだらしないダメ野郎を使って頂けるのなら、喜んでお貸ししますよ」

その成廉の言葉に、呂布は破顔した。

「よし…。決まりだな…」

呂布と成廉は、互いに手を取り合って頷いたのであった。

次の日、呂布は、董卓に拝謁をした。

「なんと、間男の噂は、貂蝉が流したデマだったと言うのか…」

「はい…。彼女は、大將軍様の気を引こうと、そう企んだそうにござります」

それを聞いた董卓は、思わず大声で笑ったのだった。

「わはははは…。そんなことをせずとも、わしの思いは変わらぬと言うに…。まったく、初々しい奴じゃ」

その彼のだらしない様子を見て、呂布は心の中で、こう皮肉を言った。

「(やれやれ…。これで、まずは一安心だな。しかし、あの董卓から揺るぎない寵愛を受け、ここまで骨抜きにしてしまうとは…。まさに、貂蝉は、傾国の美女という言葉がよく似合う恐ろしい女だぜ…)」

そして、呂布は、苦笑いをしながら、ため息をついたのであった。

ある日のこと、司徒・王允は献帝に呼び出された。

「最近、体調があまりすぐれぬので話の相手が欲しくてな」

「ははは…。この爺でよければ、いつでもお相手しますぞ」

王允は、笑顔で、そう口にした。

「近頃の董卓の所業は、目に余るものがある。なんとも嘆かわしいことじゃ」

献帝は、ため息を漏らして続けた。

「董卓は、民衆に対して重税をかけ、私腹を肥やしていると聞いておる。かような者に、国を任せるわけにはいかぬ」

献帝の話聞いた王允は、真剣な顔になって小さく頷いた。

「陛下のお考え、ごもつともでございます。それがしも同感です」
王允が自分の意見に賛同するのを見て、献帝は表情を厳しくさせたのだった。

「実は、妙な噂を耳にしたのじゃ。董卓が、我が先祖である歴代の墓をあばいて財宝を手に入れたと…」

それを聞いた王允は、静かに目を閉じて、こう答えた。

「残念ながら、本当の話のようです。それがしも、その話は伺いませぬ」

「何…。ならば、何故にその話を朕に教えてくれなかつたのじゃ。

董卓のしでかした行為は、我が先祖を愚弄するに等しいのだぞ！」

献帝は、途端に激怒をし、王允に詰め寄った。すると、王允は、無念の表情を浮かべながら、こう話したのであった。

「申し訳ありません。その話が明るみになったのは、つい最近のことでございますから…。と、言うのも、大將軍は、その一件に関わった十万余の人夫を一人残らず生き埋めにし、口封じをしたようですので…」

「なんと…。十万余の人夫を殺したと申すのか！」

献帝は、その話を聞いて肝を冷やした。

「酷いことをする…。民たちを物としか思つておらぬ証拠じゃ」

「おっしゃる通りです。少し前に、我が娘の貂蝉が男子を生んだ時に、ようやく跡継ぎができたと大將軍は、大喜びをしたそうですが、難病にかかつて急死してしまいました。その時に、ちょうど長安の街で祭りが行なわれていたことで、彼は腹を立て、多くの当事者たちが虐殺されたと伺っておりますし…」

それを聞いた献帝は、何かの覚悟を決めたかのように目を鋭くしたのだった。

「朕は、血を流すことは好まない主義じゃ。しかし、奴に対しては別なのかもしれん。民を救うために、決断をしなければならぬだろ…。」

献帝は、そう語尾を強めた。それを聞いた王允は、こう述べた。

「しかしながら、大將軍は自分にとつて都合の悪い者、諫言をする者は、ことごとく惨殺し、忠臣は皆死に絶えました。もはや、大將軍に逆らえる者はおりませぬ」

王允の話聞いて、献帝はこう言い返した。

「いや…。まだ、呂布がいる。彼の武勇の前では、董卓も成す術がないだろ…。」

献帝は、そう言つて眉間にしわを寄せた。

「確かに、武勇においては彼に勝る者はおりませぬ。しかし、暗殺となるとそう簡単には成功しますまい」

と、その時、王允はふと何かを思いついた。

「陛下…。たつた今、董卓を誅殺する策を思いつきましたぞ」

「何…。申してみよ」

王允は、献帝に近づいて、こう述べた。

「この策は、陛下にもご協力して頂く必要があります。方法としては、陛下がこのまま病のため、重体となつたように芝居をしてください。そこで、それを理由に董卓へ帝位を譲ると言つて、偽の詔を出してください。さすれば、大將軍はよろこんで禁門をくぐり、この陛下の住まわれる宮廷へ参内しましょう。そこに、兵を伏せて討ち取るのですぞ」

王允の策を聞いた献帝は、大きく頷いた。

「うむ…。うまくいきそうじゃのう」

「それがしも可愛がつっていた伍瓊を殺された恨みがございます。この策で、確実に奴を仕留めてみせますぞ」

そう言つて、王允の目に殺意が浮かびあがつたのであった。

その頃、董卓は自分の邸宅に腹心の李？を呼んでいた。李？は、董

卓が洛陽に入城する以前から彼に仕えてきた武勇の士で、彼が権力を掌中に収めた後、後將軍の位に任ぜられた武人であった。

「最近、不穏な動きがある。あれだけ肅清を行なったにも関わらず、未だにわしの命を狙う者が出没しているようだ」

「誠にけしからん話にございます。大將軍様のお命を狙おうとは…」
李？は、そう言って眉をひそめた。

「わしは、王允と呂布が怪しいと見ている。そちは、奴らを見張つて、不穏な動きがないか、逐次知らせてくれ」

董卓は、そう言って目を光らせた。

「承知致しました。大將軍様のお命を狙う不逞な輩は、この李？が全て処して参ります」

李？は、そう言って頭を下げた。実は、董卓も目の上のたんこぶである王允と呂布を亡きものにしようと企み始めていたのであった。

その夜、呂布は王允の館を訪れた。

「おお…。よく、お越し下された。呂布どの…」

王允は、呂布の手を取って笑顔を見せた。

「王允どののお呼びであれば、断る理由などございません」

「さあ…。外はお寒うございますから、どうぞ中へ…」

王允は、そう言って呂布を招き入れた。と、突然、館の曲がり角から李？が姿を現したのだった。

「ふっふっふ…。ついに、尻尾を掴んだかもしれんものう」

李？は、思わずニヤリと笑った。すると、彼と同行していた郭？がおもむろに口を開いた。郭？は、李？の片腕として長く付き従ってきた剣の達人である。

「どうします…。このまま、斬り込みますか？」

郭？の問いかけに、李？はこう言った。

「いや…。もう少し様子を見よう。奴らの警戒心が、完全に薄れた時を狙うのだ。それに…」

「それに？」

郭？は、その含みに、思わず首をかしげた。

「少し考えるところがある」

李？は、低く笑いながら、再び姿をくらませたのだった。

そして、王允は、呂布を奥の間へ案内し、董卓誅殺の策を話した。

「なるほど…。それならば、うまくいくでしょう。ならば、拙者もそこで待ち伏せをし、董卓めを一刀両断にしてみせます」

「頼りにしていませんぞ。呂布どの…」

と、その時、ふいに李？と郭？が奥の間へ踏み込んで来た。李？は、自分が王允の客人であると下男に偽って屋敷に潜入し、機会を伺っていたのであった。

「何やつ！」

呂布は、ふいに怒鳴り声をあげた。

「むう…。お主は、董卓の腹心・李？…」

王允は、招かざる客の登場に仰天した。

「わははは…。今の話、とくと聞かせてもらったぞ。王允どのに、

呂布よ…」

李？は、そう言って、大きく高笑いをしたのだった。

第13話

そして、数日後、董卓のもとにある物が届いた。

「何、あの呂布を斬って、首を持ってきただと…」

董卓は、目を丸くして李？を見た。

「はい…。やはり、大將軍様のお命を狙っていた首謀者は呂布でありました。それゆえ、我が剣にて斬り捨てました。是非、大將軍様にご確認して頂きたく、お持ちしました」

李？は、そう言って、持って来た筒の蓋を取った。

「おお…。まさしく、呂布の首じゃ」

董卓は、その首を見て満面の笑顔となった。

「むう…。拙者には、少し変な感じがしますが？」

傍にいた李儒は、そう言って首をかしげた。

「死体の首など、少し時間が経てば変形もしよう。でかしたぞ、李？…。これで、わしはようやく枕を高くして眠れるわい。わはははは！」

「お誉めの言葉を頂き、ありがたき幸せにございます」

董卓に上機嫌で誉められた李？は、そう言って深く礼をしたのであった。

それから、数日後、董卓のもとに詔が届いた。

「なんと…。わしに、帝位を譲るだど！」

その詔を見た董卓は、思わず大笑いをした。

「わはははは…。ついに、わしも天の人となったか…。かような嬉しいことは、他にはないのう」

「ご使者どの…。王允どのは、何と言っておられたか！」

何か引つかかるものを感じた李儒は、その使者に聞いた。だした。

「王允様は、受禅台を設け、お待ち申しあげると言っておられました」

「ようやく、あの古狸もわしに屈服したようじゃの。いいざまだ！」
それを聞いて、董卓は、ますます上機嫌となった。

「それでは、我ら朝臣百官は大將軍様をお待ちしておりますので、これにて失礼……」

使者は、そう言つて退出していったのであつた。

「李儒よ……。この即位の儀、そちも同行するが良い。そうじゃな、我が弟の董旻も連れていくとしよう」

董卓が有頂天になつていけると、李儒はその事に水を差した。

「大將軍……。それがしは、何か匂いますぞ。何かの企みでは、ないでしょうか？」

李儒の言葉に、董卓はこう答えた。

「案ずることはない。李？の報告では、わしの暗殺を試みていた首謀者は呂布であり、王允にその心は無いとのことじゃ。それに、その呂布は李？に誅殺され、この前に首実検をしたではないか」

董卓がそう話すと、李儒は静かに頭を垂れた。

「確かに、呂布の首をそれがしも見ました。しかし……」

「そう心配を致すな。万が一のことも考えて、李？も同行させるつもりじゃ」

董卓は、李儒の不安を払いのけるかのように、大きく笑つて、そう発したのだった。

「……」

李儒は、なんとなく腑に落ちなかつたが、決め手となる要素が見当たらなかつたため、ついに沈黙をしてしまったのであつた。

そして、数日後……。董卓は馬車に乗り、董旻と李儒、そして李？と手勢を連れて、献帝の住む宮廷へと向かつた。

「それでは、大將軍様……。この禁門より先は掟ゆえ、兵が入れませぬので、わずかなお供と共にお入りくださいませ」

董卓らの道案内を務めた朝臣は、そう声を発した。

「うむ……。わかつた。それでは、皆の者はここで待機をせい」

董卓は、そう言って兵士たちを待機させた。

「よし…。では、参るぞ。董旻に李儒、そして李？…」

「はい…」

こうして、董卓を乗せた車は、禁門をくぐり、禁庭へと足を運んだのであった。そして、門は閉ざされ、宮廷から王允が姿を現した。

「ようこそ、お越しくだされました。大將軍様…。誠におめでとうございます」

王允は、そう言って、深く頭を下げた。

「うむ…。ご苦労である。これからは、わしの力となって働くがよいぞ」

「ありがたき幸せ…」

王允がそう答えた瞬間、ふいに董卓らの前に草陰で潜んでいた兵がどっと押し寄せてきたのだった。

「親父の仇だ。死ねえ、董旻！」

呂布は、董卓の横にいた董旻を、一瞬で真つ二つにしたのであった。「ぬう、生きておったか。やはり、あの首実検の首は偽物か！」

李儒は、思わず声を荒げて、そう吐き捨てた。実は、彼らが見た偽首は、王允がある死刑執行人に働きをかけて、呂布によく似た死刑囚の刑の執行を早めさせ、入手したものであった。と、その時、李儒の前に成廉が立ちふさがったのであった。

「何も王允様の手を煩わさなくても、この俺の首で十分役目は務まるものを…。だが、我を生かしてくれた殿の期待に応えるためにも、命ある限り暴れさせてもらうぜ…」

そう言うと、成廉は、大刀を構えて殺気をみなぎらせたのだった。

「おお…。まだ、奴の影武者がいたのか…」

呂布と瓜二つの顔を持つ成廉を見た李儒は、思わず固まってしまった。それを見た成廉は、ここぞとばかりに、大刀を振りおろしたのだった。

「覚悟！」

「うびゃあっ！」

右腕を飛ばされた李儒は、あまりの激痛に思わず叫び声をあげた。そして、李儒は兵士たちの無数の槍で串刺しにされ、血を吐きながら絶命したのであった。

「ぬう……。計ったな、王允……。李？よ、かかれ！」

董卓は激高しながら車を降り、そう言い放った。と、その時、李？はこともあろうか、背後から董卓を斬りつけたのであった。

「ぐばあつぱあつ！」

董卓は、大量の血を全身から吹き出させながら、大地に転がった。

「な、何を致す……。ま、まさか、お前まで、わしを裏切るのか……」

その言葉に、李？はギリりと目を光らせた。

「逆臣・董卓を討つ！」

李？は、そう言っつて、容赦なく董卓の首をはねたのであった。そして、亡骸になった董卓は、周囲の兵士たちにめった斬りにされ、ついに肉片と化したのだつた……。これは、如何に董卓が人々に恨まれていたかを象徴するものであつた。

「よし……。ついに天下の極悪人・董卓を成敗したぞ！」

呂布は、そう言っつて、天高く拳を突き上げた。

「丁原様……。天から見ておられますか。殿の無念、見事に呂布様が晴らしましたぞ」

高順は、そう口にして、万歳をしたのであつた。

「王允どの……。董卓とその一味の家族には、既に我が兵を向けております。直に皆殺しとなりましょう」

李？は、閉められた門を兵士たちに再び開けさせ、自らの手勢を招き入れた。

「逆臣・董卓の誅殺が成功したのは、まさにあなた様のおかげじゃ。なんとお礼を申してよいやら……」

と、王允が李？へ駆け寄ろうとした時、ふいに王允の胸に矢が刺さつた。

「ぐわあ！」

王允は、その一本の矢によって心臓を貫かれ、絶命したのであつた。

「何を致す。李？どの！」

呂布の言葉に、李？はニヤリと笑った。

「董卓と王允…。この二人が片付けば、天下はわしのものじゃ」

「な、何っ…。それでは、我らの義に参加したのは、自らが天下人になりたいがためだったのか？」

呂布は、拳を震わせながら、それを強く握りしめた。

「わははは…。漁夫の利とは、まさにこのことじゃ。さあ、者ども…。あとは、呂布とその間抜けな仲間たちを始末するだけじゃ。かかれ！」

野望に取りつかれた李？は、呂布たちに対して、容赦なく手勢を放ったのであった。

第14話

李?の号令を受けた彼の部隊は、呂布たちを取り囲み、一斉に攻撃を仕掛けてきた。

「ぬうう…。おのれっ!」

呂布は、立ち向かって来る兵士を次から次へと斬り刻んでいった。と、その時、郭?が大声をあげた。

「呂布…。俺と勝負しろ!」

「こしゃくな!」

呂布は、いきり立って、郭?に襲いかかった。

「俺の剣の腕を甘くみるなよ」

郭?は、呂布の攻撃を受け流すと、すかさず反撃した。

「おっと!」

呂布は、声を発して、そのするどい攻撃を受け止めた。

「やるな…。さすが、鬼郭?の異名は伊達ではないな」

呂布は、この混乱した状況の最中で、おもむろに武人の血が騒ぎ、思わずニヤリと笑ったのだった。そして、二人の斬り合いは激しさを増し、延々と続いたのであった。と、その時、ふいに高順が声をあげた。

「殿…。味方の兵が、次から次へと討ち取られ、総崩れとなっております。もはや、防ぎようがありません」

「むう…。多勢に無勢か。かくなる上は、血路を開いて突破するぞ!」

呂布は、そう発すると、手のひらを返したかのように隙をついて、郭?の前から遠ざかったのだった。

「待て…。まだ、勝負がついておらんぞ!」

郭?は、逃げる呂布を追いかけようとしたが、迫り来る兵士たちに阻まれてしまい、とうとう彼を見失ってしまったのであった。そして、呂布たちは、攻撃の目標を1点に集中させ、強引に突破したの

だった。

「逃がすな……。追撃しろ！」

李？は、怒号を発して、呂布たちへ追撃を指示した。

「皆の者……。力のある限り、逃げる！」

呂布たちは、長安の街の中を、散り散りバラバラとなって逃げ失せたのであった。

そして、自宅に戻った呂布は、赤兎馬にすばやくまたがった。

「こうなったら、ひとまず長安から脱出するしかない」

呂布は、そう言つと、献帝のいる宮廷の方を見つめた。

「陛下……。生きていれば、またどこかで会えましょう」

彼は、そう言い残すと、後ろめたさを感じながら赤兎馬の腹を蹴ったのだった。

そして、呂布は城門を守る兵士たちを蹴散らしながら、命からがら長安を脱出したのだった。すると、少し離れたある場所で、高順と張遼、そして数名の者たちがたむろをしている光景を目撃したのであった。

「高順！」

呂布は、大声を発して、彼の名を呼んだ。その声を聞いた高順は、すぐに振り向いて満面の笑顔を見せたのだった。

「殿……。ご無事でしたか」

「うむ……。遅くなつて、すまなかつたな。こいつだけは、どうしても共に連れて行きたかつたのでな」

彼らの下にたどり着いた呂布は、そう言つて赤兎馬の頭をなでた。

「それでは、急いで出発しましょう。ここに居ては、追手が来るかもしれないません」

張遼が、そう言つと、呂布はふいに顔をしかめた。

「しかし、そうは言つても行く当てがない。どうしたものか……」

その言葉を聞いた張遼は、急にニヤリと笑った。

「俺に心当たりがあります。少々、長旅になりますが…」

「おお…。それは、どこだ？」

興味を持って尋ねてくる呂布に、張遼は話を続けた。

「陳留に張？と言う御仁が居て、以前世話になったことがあります。その時は、とても気が合ったため、今でも親友でございます」

「そうだったのか。ならば、その張？どのに、俺もかくまってくれよう頼んでくれるか」

呂布の問いかけに、張遼は小さく頷いた。

「お安いご用でございます」

その言葉に、呂布は思わず破顔した。

「よし…。ならば、決まりだな。我らは、これより陳留へ向かうとしよう」

こうして、呂布たちは張遼の知り合いである張？の住む陳留を目指して、旅立っていったのであった。

時は流れた…。

陳留に到着した呂布たちは、曹操の部下として太守に任ぜられた張？のもとで、ひっそりと身を潜めていたのであった。

「ここへ来て、もう1年が経つ。陛下は、ご無事であるつか…」

献帝を思う呂布は、片時もそれを忘れはしなかった。

「殿…。ならば、陛下へ文でも書いたらどうでしょうか？」

思い悩む呂布に、高順はそう助言をした。

「うむ、そうだな…」

呂布は、大きく頷くとすぐさま机に向かい、手紙をしたためたのであった。

「よし、書けたぞ。誰か…」

彼は筆をおくと、近くに控えて部下を呼びつけた。

「はい…。ここにあります」

「少し長旅になるが、この手紙を長安にいる陛下へ渡してきてくれぬか？」

「承知しました」

その部下は、そう言うと、すぐに陳留を発つていった。

呂布の手紙を携えた部下は、巧妙に人の目を欺きながら宮廷に潜入し、献帝へ手紙を渡すことに成功したのであった。

「おお……。これは、呂布からの手紙……。そうか、お主はまだ生きておったか」

献帝は、小さく笑いながら、その文を読んだ。そして、手紙を読み終わつた献帝は、思わず天を仰いだ。

「呂布よ……。お前が、羨ましいぞ。朕は、長安にて籠の中の鳥じゃ。毎日が、生きた心地がせぬ。朕も長安を脱出して、住みなれた洛陽に戻りたいものじゃ」

長安を李？に占拠されて以来、献帝は宮中にて監禁状態となつていたのであった。それに加え、董卓や王允がいなくなり、目の上のタンコブがなくなつた李？は暴君と化し、我が物顔に暴政を始めたのであった。

「焼け野原でも良い。朕は、洛陽が恋しいぞ……」

そのため、献帝は、ますます故郷への思いが強くなつていたのであった。そして、思案の末、呂布に対して返書を送ることにしたのであった。

そして、数か月を経て、献帝の文を携えた呂布の部下が、ようやく戻つてきたのであった。呂布は、その手紙を喜んで受け取り、すぐに読み始めた。すると、そこには、献帝の苦悩に満ちた内容が綴られていたのだった。

「なんと……。陛下は、かような辛い目に遭われておられたのか。おいたわしい……」

呂布は、悲しい顔をして、さらに手紙の中身を読んでいった。

「そうですか……。陛下は、故郷に帰りたいのですか……」

呂布は、手紙を机に置いて、窓の外をじっと見た。

「わかりました。では、お望み通り、拙者が陛下の長安脱出のお手伝いをしましょう」

彼は、そう心に決め、再び文を書いたのだった。そして、また部下を呼びつけて、献帝へ渡すよう指示したのであった。

そして、さらに月日を経て、その手紙は献帝へと渡ったのだった。

「そうか……。朕の長安脱出の手引きを致してくれるか。ありがたいことじゃ」

献帝は、その文を読んで涙を流した。

「そなたに再び会えるのじゃな。待つておるぞ、呂布……」

献帝は、胸を熱くさせながら、呂布と再会できることを大いに喜んだのであった。

第15話

陳留の太守・張?の下には、陳宮、字は公台と言つ策士がいた。彼は、曹操が都落ちをする際にその手伝いをしたが、曹操の心の中に残虐かつ冷酷な一面があることを感じた彼は、曹操のもとから離れて、張?を頼つて身を寄せていたのだった。

「曹操にはついてゆけぬ…」

陳宮の曹操への不信感は、都落ちの時から始まる。その際、彼らはある民家で宿を求めたのだが、あることをきっかけに曹操は、その主人が自分たちを捕縛して懸賞金を得ようと企んでいると疑い、主人とその家族を皆殺しにしたのだった。だが、すぐにそれが勘違いであると判明し、罪なき者たちを殺めたことに気づいたのだが、曹操は罪悪感を持つどころか、その所業を正当化したのであった。そして、陳留にたどり着いた後も陳宮はしばらくの間、曹操に仕えたのだが、その不信感は日を追うごとに募り、ついに出奔をするまでに至ったのである。その後、陳宮は張?と出会い、刎頸の交わりの如く意気投合をすることになり、彼の食客となっていたのであった。

ある日のこと、陳宮は耳寄りな情報を入手し、張?と面会をしていた。

「この度、曹操は徐州を攻めると言っている。徐州の太守・陶謙は、とても民百姓に優しいお方で、とても人望がある方だ。だが、その配下の者が曹操の父に狼藉を働き、殺してしまったそうだ。そのため、曹操の怒りを買うことになり、その報復戦が行なわれることになったと言っわけだ」

陳宮の話に、張?は眉をひそめた。

「恐らく、報復戦とは大義名分で、本当の目的は要衝の地・徐州の占領なのだろうけどな」

頭をかきながら張?が言つと、陳宮はふいに目を光らせた。

「無論、この戦争は、曹操自身が指揮をすることになる。それゆえ、現在の曹操の本拠地である？州は、兵士たちがこぞって徐州に向かうため、手薄になることでしょう」

「陳宮よ…。君は、私に謀反を起こせと誘うのか？」

張？の問いかけに、陳宮は眉間にしわを寄せた。

「張？どのも私と同様、曹操に対して不信感を持つ人でありましよう」

陳宮の言葉に、張？は表情を厳しくさせた。

「これを機に？州を奪えば、曹操軍は路頭に迷います。さらに、陶謙と計らって曹操を挟撃すれば、奴の首を取ったのも同然…。後漢を揺るがす奸臣を討ち滅ぼすことこそ、武士の本懐だと思えますが…」

陳宮の話を聞いて、張？は心を動かされた。

「うむ…。まさに、そうだな。曹操は、自らが皇帝になろうとする野望の見え隠れする危険な人物…。才気あふれる人間ゆえ、そのうちに頭角を現してくることだろう。ゆえに、その芽が出る前に刈り取っておく方が良いのかもしれん」

こうして、張？は、曹操への謀反を決意したのであった。

そして、張？は、少しでも自軍の戦力を増強させようと考え、食客となつている呂布を自室へ呼んだ。

「呂布にございます。お呼びでしょうか？」

呂布は、張？の前で会釈をした。

「おお…。よくお越しくだされた。さあ、中に入ってください」

張？は、そう言つて、彼を部屋の中へ招き入れた。すると、部屋の中では、彼の友人である陳宮が待っていたのであった。

「お初でございます。私は、陳宮という者です。どうか、お見知りおきを…」

陳宮は、呂布を見るやいなや頭を下げた。

「彼は、私の親友なのだ」

「そうでござりましたか」

そう言つて、呂布も陳宮に対してお辞儀をした。

「実は、そなたに頼みがあつて呼んだわけだ」

「頼みとは？」

張？は、呂布へ曹操討伐の話を持ちかけた。その話を聞いた呂布は、静かに目を閉じて頭を垂れた。

「そうでしたか…。しかし、我らはしばらくの間、お暇を頂こうと考えていたところでございます」

「それは、どう言つことござる？」

呂布は、献帝の長安脱出の手引きを援助する話をした。

「なるほど…。陛下は、かような境遇にあられるのか。なんと、おいたわしいことか…」

張？は、眉間にしわを寄せて、静かに目を閉じた。

「しかし、我々は張？どのに大変お世話になつております。拙者としては、張？どののお力になれるのなら、お手伝いをしたく思います」

その言葉を聞いた陳宮は、静かに口を開いた。

「陛下をお救いになることは、殊勝なお考えにござります。ならば、我が軍の初戦である？州攻めだけを手伝って頂ければ、宜しいかと私は考えますが…」

陳宮の助言を聞いて、張？は大きく頷いた。

「うむ…。そうだな。初戦だけでも手伝ってくれば、後はこちらで算段できる。どうであろう、呂布どの？」

張？は穏やかな顔で言つと、呂布は真面目な顔をしてこう述べた。

「お心遣い、痛み入ります。それでは、我々は全力を尽くして、張？どのの初戦のお手伝いをさせて頂きます」

呂布は、そう言つて深く頭を下げた。

「なんと純粹なお方だ。献帝に対して、ここまで忠義を尽くせる者など、他にはおるまい」

陳宮は、心の中でそう思った。そして、彼は、次第に呂布と言つ漢

に興味を持っていくのであった。

それから、数日後…。

曹操は、報復戦を行うため、軍隊を率いて徐州へ向かったのだった。

「我らは大義のため、今から曹操を討ちにくぞ…。出陣だ！」

そのタイミングを見計らっていた張？は、部下たちにそう号令をし、陳留にて反旗を翻して、陳宮と共に曹操の本拠地である？州を襲ったのであった。

「拙者の体得した武芸…。とくと披露しましょう」

呂布は、この？州攻めで大活躍をし、曹操軍を終始圧倒したのだった。そして、？州は、あつと言う間に陥落したのであった。

「よもや背後から突かれようとは…」

本拠地を奪われ、帰る場所を失った曹操は呆然となった。

「しかし、まさかあの呂布が、反乱軍に手を貸して余に立ちほだかるとは…」

こうして、曹操は呂布に対して憎しみの感情を、抱くようになったのであった。

一方、呂布たちは初戦のみを手伝う約束だったため、？州が陥落すると献帝を救い出すべく、すぐさま長安を目指して旅立ったのであった。

「高順…。手はずは、問題なく整っておるな？」

呂布たちは、旅の途中で立ち寄った宿舎で、打ち合わせを行っていたのだった。

「はい…。長安の都から献帝を連れて脱出する際に協力をしてくれる者たちへは、既に連絡を取っております。そして、脱出後、李？の追手が来ても立ち向かえるよう、河東白波賊という義賊への要請もできておりますので、心配はございません」

高順は、そう淡々と述べた。

「うむ…。それを聞いて安心したぞ」

呂布は、そう言つて、満面の笑みを浮かべた。

「後は、陳宮どのが授けてくれた策が成功するかどうかですな……」

張遼は、呂布をチラリと見て、ふいに眉をひそめたのだった。実は、呂布たちと別れる間際で陳宮は、献帝の救出作戦が成功するよう、彼に知恵を貸していたのであつた。

李？は、今や後漢の最高権力者である。圧倒的な兵力を持つ彼とまともに争つては勝ち目がないと見た陳宮は、彼らの兵力を分散させるために、ある秘策を講じたのであつた。

「彼の考えた策だ。間違いはあるまい」

呂布は、陳宮と語り合い、彼のおふれんばかりの知略を肌で感じた。そして、彼にとても興味を持ち、高く評価していたのであつた。

「しかしながら、洛陽へたどり着いても、それからどうするおつもりですか。董卓によつて焦土化した洛陽は、今でもわずかな民がひっそりと暮らす無法地帯……。近隣諸国より攻められるような事態になれば、我ら手勢と長安の協力者たち、白波賊だけでは、防ぎようがありません」

張遼の問いかけに、呂布はニヤリと笑つた。

「実は、張？どのが曹操を成敗された後、軍勢を率いて洛陽へ入つてもらつ手筈となつていいるのだ」

「張？どのが、洛陽の太守ですと……」

高順と張遼は、あまりのことに仰天した。

「張？どのは、義に厚いお方……。彼ならば、董卓らと違って献帝を敬い、民のために善政をしてくれろと、俺はそう思つていいるのだ」

「なるほど……。それならば、献帝を中心とした政権を築きあげ、荒廃した後漢を立て直すことができるかもしれませんな」

張遼は、呂布の意見を聞いて、感銘を受けた。

「さあ、明日の出発は早い……。そろそろ寝るとするか」

呂布は、そう言つて、高順たちに就寝を促した。

「陛下……。もう少しで、再会できますぞ」

呂布は、はやる気持ちを抑え、献帝に会える日を楽しみにしていた

のであった。

そして、呂布たちは、旅の途中で河東白波賊と合流した。

「おいらは、河東白波賊の頭目・韓暹と申します。この度は、呂布どのの大義にいたく感動しました。今後とも、宜しく…」

韓暹は、そう言って、呂布と握手をした。

「韓暹どの…。こちらこそ、宜しく願います。共に力を合わせて、陛下をお救いしましょう」

呂布は、そう言って頭を下げた。

「あと少し行けば長安ですが、一気に突入しますか？」

韓暹は、そう尋ねると、呂布は小さく笑った。

「いや…。余計な波風は立てぬ方がよい。我々はここで待ち、使いの者を出して、城内にいる協力者たちに陛下をここまでお連れするよう、お願いするのだ」

呂布は、そう言うと、部下の一人に書簡を渡したのだった。

第16話

そして、献帝のもとに呂布の書簡が届けられた。

「おお…。長安の近くまで来たか。これで、ようやく洛陽へ戻れるのう」

献帝は、そう言って深くため息をついた。

「陛下、脱出する準備は万全でございます。陛下がお声を発すれば、いつでも行動できますぞ」

献帝の妃の父親である伏完は、力強くそう言った。

「李?には、陛下は大好きな狩りへ行くと言ってあります。また、彼に異心を持ち、陛下に忠誠を誓う者で楊奉と言いますが、李?はその者を信用しております。その者が、今回の陛下の警護に就いて同行しますので、李?は安心していらっしゃるようです」

後漢の大尉・楊彪は、そう言って李?の目をうまく欺いたことを説明した。

「無論、我らも同行いたします。案ずることは、何一つありません。行軍校尉の尚弘は、そう自信を持って述べた。

「皆の者、本当にご苦労であった。心から礼を言っぞ」

献帝は、感謝の意を込めて、忠義の士たちに頭を下げたのだった。

そして、献帝と妃である伏皇后を乗せた車は、狩りへ行くと呼びかけて禁門を出て行った。献帝の一行は、楊彪、伏完、尚弘、楊奉など一角の人物が従ったため、おびただしい数の人夫たちと荷車を連ねて、長安の城門をくぐって行ったのであった。

「何だか、お供の数がやけに多い気がするが?」

不審に思ったその城兵は、すぐに上司へ報告をしに行った。

「うむ…。確かに、妙だな。すぐに上へ報告しよう」

こうして、下からの報告は、順々に上へ上へと報告されていった。

そして、その話は、ついに李?のもとにまで達した。

「何だと…。そんな大人数を率いて、陛下は狩りへ出かけただと！」
部下の報告を聞いた李？は、思わず仰天をした。

「むづ…。あやしいな…」

李？は、兵士たちを集めて、献帝の住む宮殿内を搜索しよう命じた。そして、数時間後、宮殿内の搜索へ行った兵士たちが戻って来た。

「大変です…。宮廷内は、もぬけの殻です」

「ぬづ…。やはり、長安からの逃亡を計ったのか。絶対に逃がさんぞ！」

帝を擁すると官軍となり他の諸侯へ幅を利かせることができるが、その庇護を受けられなくなったり、帝にたてついたりすると逆賊の汚名を被せられて標的にされると言う理屈は世の常であったため、李？は激昂したのであった。と、その時、彼の斥候の一人が息を荒げて駆け込んできたのだった。

「殿…。西涼の馬騰が、兵を挙げ、長安を目指しております」

「な、何つ…。馬騰が、この長安に向かっているだと！」

李？は、たちまち表情を豹変させた。馬騰は、董卓に代わって新しく西涼に赴任した群雄の一人で、献帝に対して忠義の厚い漢であった。ちなみに、西涼は、長安の西に位置する辺境の地で、周辺の異民族の侵略を阻止するための要害である。同郷の者同士だったので、李？は自分に対して刃向うことはないとかかくっていたのだが、陳宮の書状によって献帝の真意を悟った馬騰は、忠節を全うするため、兵を動かしたのであった。無論、馬騰は陳宮と言う人物を知らないの、書状の名義は献帝の親衛隊長である呂布としてある。これが、陳宮の講じた秘策であり、李？と馬騰を引き離して、お互いを争わせる離間の策であった。

「むづ…。こんな時に長安へ攻め入って来るとは…」

思案の末、李？は勇猛な騎馬兵を持つ馬騰軍を迎撃するために、甥の李暹と李別に大半の兵士を与えて出撃させたのであった。

「まあ、献帝を捉えるだけのことだから、そこまでの兵力は必要あ

るまい」

そう考えた李？は、すぐに軍勢を整えて、献帝の一行を追いかけることにしたのだった。

一方、献帝らは、何かに憑りつかれたかのように、洛陽を目指していた。そして、一時も速度を緩めることなく、かなりの距離を進んだのだった。

「陛下…。そんな強行軍をして、お体にさわりませんか？」

伏完が、そう問いかけると献帝は、こう述べた。

「李？は、いずれは我らの真意を察するであろう。それゆえ、我らは進めるだけ進んでおく必要がある」

献帝は、そう言って話を続けた。

「それに、こうやって長安から離れれば離れるほど、焦って追いかけてくる奴らの軍勢は、長蛇の陣のごとく細長くなるであろう。使いの者から聞いた呂布の伝言は、その状態を作り出して欲しいとのことであつたからな」

献帝は、そう言って眉をひそめた。

「そう言えば、呂布どのの姿が見当たりませんか」

伏完は、ふいにはつとした。

伏完「ま、まさか…」

呂布の狙いを察知した伏完は、目を大きく見開いたのであつた。と、その時、後方からおびたらしい馬の蹄の音が聞こえてきた。

「陛下…。追手が押し寄せてきましたぞ！」

楊奉は、大声を上げて報告をした。

「もう来たか…。ならば、その荷車の積み荷を破って撒き散らすのじゃー！」

献帝は、そう指示して、人夫たちに積み荷の袋を破らせた。すると、中から輝かしい金銀財宝がわつと目に飛び込んできたのであつた。

「李？は、自分だけが富貴を楽しみ、部下たちにはロクに褒美を与えていないと聞く。目の前に財宝が転がっていれば、飢えた生活を

強いられている兵士たちは、それを自分の物にしようとかっつきになるであろう」

献帝は、そう言ってニヤリと笑った。

「おお……。なるほど、献帝もなかなかの策士でございますな」

楊彪は、献帝の奇策を聞いて、思わず感嘆した。

「さあ、皆の者……。それを、辺り一面に撒き散らすのだ！」

尚弘の号令により、人夫たちは、次から次へと積み荷を破って、金銀財宝をばら撒き始めたのであった。

「うむ……。そのくらいでよからう。では、先を急ぐとしよう……」

「皆の者……。出発だ！」

伏完の号令を受け、献帝の一行は再び動き始めたのだった。

そして、献帝の策は成功した。追ってきた先鋒の者たちは、皆貧しい暮らしを強いられていた者ばかりだったため、一面に広がる財宝に目を奪われてしまったのだった。そして、彼らは、いつしか献帝追走の任務を忘れ、夢中になって金銀を拾い集めたのであった。

その頃、呂布たちは、ある山野に身を潜めていた。

「だいぶ、敵の軍勢は長く伸びてきたようだな」

呂布は、通り過ぎていく敵の軍勢を横目に、ニヤリと笑った。

「如何に大軍を率いても、ここまで伸びきってしまえば、大軍の意味はなくなる。それに、この集団は、李？が力で抑えつけて無理やりまとめている烏合の衆にすぎないため、奴の首さえとれば、自然に自滅していくだろうからな」

その呂布の作戦を聞いて、高順たちはうんうんと頷いた。

「あとは、ここに李？が通ってくるのを待つだけですな」

高順は、そう言って呂布へ目配せをした。と、その時、馬にまたがった大将らしき者が現れた。

「おお……。あれこそ、まさに李？！」

呂布は、すぐに部下へ命令を出し、山野から踊り出たのであった。

「むう…。伏兵がおったか！」

ふいに現れた呂布たちの手勢に李？は怯んだのだった。

「李？よ…。先日の裏切りの恨み、ここで晴らしてくれる」

呂布は、そう言つて、方天画戟を構えた。

「ぬう…。そう言つお前は、呂布…。こしゃくな！」

こうして、二人は互いに馬を走らせて接近した。

「この俺をなめるなよ！」

李？は、そう言つて、長刀をぶんぶん振りまわした。

「甘いぜ…。もらった！」

呂布は、李？の隙をついて、思い切り突きを食らわせた。

「ぐわあっ！」

その突きは、見事に李？の喉をとらえたのだった。そして、その勢いで、彼の首は胴体からちぎり取られ、天を舞ってから大地に落ちたのであった。すると、その首はまるでボールのようにコロコロと転がり、彼の兵士たちの目の前で静止したのだった。

「逆臣・李？を討ち取つたり！」

呂布は、そう大声を発して、李？の死を宣言したのであった。

「ひい…。御大將がやられた。もう、だめだ！」

その宣言を聞くやいなや、李？の兵士たちは、瞬く間にパニック状態となつて敗走を始めたのだった。前述もしたが、李？は、自分と近親の者だけで富貴を独占し、部下たちにはろくな手当は出さず、奴隷のように扱つた。そのため、厭戦気分が蔓延することとなり、命を懸けて戦おうとする者は、誰一人もいなかったのである。

「よし…。皆の者、追撃を開始しろ！」

そして、呂布たちは、逃げまどう敵兵を手当たり次第になぎ倒したのであった。

一方、呂布と別行動をとつた張遼と韓暹ら白波賊は、一軍を率いて李？らよりも先へ進んでいた郭？の軍勢と激突していた。

「これより先には行かせるな。殿が合流して来るまで、戦い抜くの

だ！」

「白波賊の力を今こそ、見せつけるぞ！」

張遼は、部下たちにそう鼓舞し、韓暹は、迫り来る兵士たちを、次々と討ち取っていったのであった。

「おのれ、田舎侍どもが…」

郭？が、そう言いかけた時、矢傷を受けた兵士の一人が彼のもとに現れたのだった。

「一大事です…。殿が討たれました！」

「な、何っ！」

その報告を受けた李？軍は、みるみるうちに大混乱に陥ったのであった。そして、戦意を失った彼らは、次から次へと張遼たちの餌食となっていくのだった。

「取り乱すな、お前ら！」

郭？が必死に自軍を立て直そうとした時、李？を討った勢いで、呂布たちが怒涛の如くなだれ込み、とうとう挟み撃ちになってしまったのだった。

「こうなったら、俺一人だけでも戦い抜いてやる…！」

次々と味方が討たれていく中、郭？は鬼神のごとく槍を振りかざし、敵を突き殺していったのだった。しかし、如何に手練れの勇将であっても限界がある。気が付いた頃には、郭？の周りには味方は一人もなく、彼自身は身動きすらできない状態となってしまうのだった。と、そこへ、張遼が単騎で近づいてきた。

「郭？よ…。ここで殺すには惜しい。我らに降りたまえ」

その勧告に対して、郭？は小さく笑った。

「武人として生まれ、戦場で死ぬのは本望だ。ゆえに、俺はここで散ることにする…」

郭？の答えを聞いた張遼は、彼の土道に心を打ち、こう言い返した。

「ならば、名もなき雑兵に貴殿を殺させるわけにはいかん。俺が、介錯をしよう」

「ありがたい…」

張遼の心意気に感動した郭？は、無抵抗で彼に突き殺されたのであった。

一方、馬騰軍を迎え撃つために出撃した李暹と李別の大兵団は、彼らと死闘を繰り広げて辛くも痛み分けとなったが、その最中で李暹と李別は、戦死したのだった。その後、徹底的に打ちのめされた李？の残党たちは、命からがら長安へたどり着いたのだが、愚かなことに主柱を失った彼らはたちまち権力争いを始めた。そのため、彼らは自然消滅への道を歩むことになってしまったのであった。

こうして、李？軍の追手を阻止した呂布たちは、無事に献帝の一行と合流したのだった。そして、呂布は、献帝と念願の再会を果たしたのである。

「久しぶりだのう。元気におったか？」

献帝は、呂布の顔を見て、満面の笑顔となった。

「はい…。献帝もお元気そうでなによりです」

「今度こそ、朕と共に漢を復興させていこうな」

献帝の言葉に、呂布は小さく頷いた。

「ありがたき幸せ…。この呂布は、いつまでも献帝の味方ですよ」

呂布と献帝は互いに大きく笑って、がっちりと手を握り合っただった。

「さあ、先を急ぎましょう。我らが都、洛陽へ…」

呂布の言葉を聞いて、献帝は大きく頷いたのであった。

第17話

呂布たちと合流した献帝の一行は、旅の途中で新しく河内の太守となった張楊の手勢に出くわした。ちなみに、河内は、黄河を挟んで洛陽より北東に位置する要衝である。

「陛下が洛陽に向かわれていると伺いましたので、お迎えに参りました。これより先は、我々の軍勢がお守りしますので、ご安心ください」

張楊は、そう言って、深く頭を下げた。

「おお……。それは、ありがたい。よろしく頼むぞ、張楊よ……」

献帝は、笑顔でそう答えた。と、その時、ふいに呂布が声を発した。「張楊ではないか。久しぶりだな」

「そう言うお前は、呂布……。こんな所で、同郷の者に出会えるとは思わなかったぞ」

呂布と張楊は、互いに手を取り合った。

「今では、河内の太守か。出世したものだな」

「ははは……。何を言う。お前の方こそ、陛下の親衛隊長と言う重役ではないか」

張楊は、そう言って、大きく笑った。

「お主が駆けつけてくれるとは、とても心強いぞ。ありがとう」

「礼には及ばないさ。陛下を守るのが、我ら家臣の務めと言うものだ」

張楊の言葉に、呂布は大きく頷いた。

「そうだったな。では、共に洛陽まで万全の警護をしよう」

「うむ……。こちらこそ、よろしく」

こうして、献帝の一行は、河内軍に守られながら、無事に洛陽の街へたどり着いたのであった。

そして、警護の任を終えた張楊ら河内軍と別れた呂布たちは、荒廃

した宮廷の再建に取りかかった。献帝が帰って来たと言うことで、洛陽でひっそりと暮らしていたわずかな住人たちは、大いに喜び、こぞって協力をしたのであった。

それから、数日後のこと…。

「おお…。だいぶ元通りになってきたのう」

「はい…。あと、もう少しですな」

呂布と献帝は、急ピッチで行われる宮殿の復旧具合を眺めながら話をしていた。

「しかし、義に厚く、朕に忠誠を誓う有力者・張？は、まだ到着しないのか？」

献帝がそう心配をすると、呂布は軽く頭を下げ、こう発した。

「はい…。書簡は送っておりますので、もうじき兵を率いてやって来るのではないかと思いますが…」

と、その時、呂布たちのもとに斥候が戻ってきたのだった。

「一大事です…。張？軍は、曹操軍によって滅ぼされたとのことですよ」

「な、何っ！」

呂布は、思わず大声を上げた。

「どう言うことだ…。詳しく説明してくれ」

呂布が表情を険しくさせながら言うと、その斥候は、こう話した。

「はい…。張？様は、呂布様と共に初戦を勝利で飾った後、路頭に迷った曹操軍を一気に片付けようと、？州から軍勢を率いて出陣したそうです。しかし、曹操軍は劣勢に怯むことなく果敢に抵抗をし、激しい乱戦となりました。そして、その激戦の末、曹操軍の方が勝利をおさめたのでございます。そこで、張？様は、体制を整えるため、？州へ引き上げようと思いましたが、？州に住む有力者たちが曹操と内通し、城門を閉じて矢で応戦したため、張？様は来た道に戻らざるをえなくなりました。そこを、すかさず曹操軍に攻撃され、張？様は戦死されたとのことですよ」

斥候の話聞いた呂布は、がっくりと膝から崩れた。

「なんと言うことだ。張？様が、死んでしまうとは…」

呂布は、大粒の涙を流して泣いたのだった。しかし、泣いている暇などはなかった。その後、勢いに乗った曹操は、呂布たちが不在の間に周辺諸国を次々と攻略し、着実に一大勢力を築いていったのである。

それから数日後…。

呂布の屋敷に、別の斥候が帰ってきて、よからぬ知らせを伝えてきたのであった。

「殿…。曹操が軍勢を率いて、この洛陽に迫っている模様です」

「何だと…。曹操が、こつちへ向かって来ているのか！」

呂布は、その話を聞いて仰天した。

「曹操は洛陽に陛下がおられる情報を掴んだようです。そして、陛下を我が手中に収めるべく、兵を出したそうにございます」

「なんと言う野心家だ。陛下を利用して、その絶大な権力を自分の物にしようとしているのだな」

呂布は、ぐつと唇をかみしめた。

「殿…。城壁は、完全に修復できておりませぬ。野戦にて、曹操軍を撃退するしかない方法はないかと思えますが…」

近くで話を聞いていた張遼が、そう言うと、呂布は小さく頷いた。

「うむ…。すぐに迎撃の準備に取り掛からねば…」

そう言つて、呂布は、急いで兵舎へ向かおうとした。と、その時、張遼と共に傍にいた高順が呂布に対して、声を発した。

「お待ちください…」

「どうした？」

呂布がそう聞き返すと、高順は続けて、こう意見を述べた。

「ここは、河内に書簡を送り、援軍を出してもらってはいかががでしょうか？」

高順の意見に、呂布は大きく頷いた。

「そうだな…。すぐに、張楊へ援軍の要請をしてくれ」

「かしこまりました」

高順は、そう言っつて、使者に書簡を渡して、河内に走らせたのであつた。

河内に届けられた書簡を見た張楊は、すぐに目の色を変えた。

「事は急を要する…。ただちに、出陣の準備をしろ！」

張楊は、迷ふことなく呂布たちに援軍を出すことを決定したのであつた。だが、曹操軍と一戦を交えると言ふ張楊の号令に対して、部下の楊醜は大いに行く末の不安を感じたのであつた。

「最近の曹操軍は、天を突くような勢いだ。そのような強大な軍勢と戦つて、我らは勝ち目があるのだろうか」

そつ心の中で思つた楊醜は、我が身のかわいさゆえに、その日の夜のうちに張楊を暗殺してしまつたのであつた。

「張楊は、我ら家来のことを軽んじ、勝ち目のない戦いの犠牲にしようとしたので、わしが誅殺した。これからは、わしが河内の太守だ！」

楊醜は、家臣団の前でそう公言すると、続けてこう發した。

「曹操様こそ、天下を治める者としてふさわしいお方…。よつて、我々はこれより曹操軍に協力し、陛下を惑わす逆臣・呂布を討つ」
楊醜は、そう言つて、兵を率いて洛陽へ向かつたのであつた。

「何つ…。張楊は暗殺され、部下の楊醜が軍を率いて洛陽に迫つて
いるだと…」

斥候の報告を聞いた呂布は、思わず仰天した。

「なんと言つことだ…。俺が、お前に援軍を要請したばかりに、命を奪われる事態になるとは…」

呂布は、思いがけない友の死に、大いに嘆いた。

「しかし、その楊醜と言ふ男は許せん。仇は絶対に取つてやるぞ！」
呂布は、楊醜軍と戦うべく、兵を率いて洛陽を出たのであつた。

そして、曹操軍より先に洛陽に到着した楊醜軍は、呂布軍と激突した。呂布軍は、自身の手勢と楊奉の手勢、韓暹が率いる白波賊を合わせて、数千足らずの軍勢であった。

「者ども…。一気に蹴散らして、呂布を討ちとれ！」

楊醜は、大声を張り上げて、全軍に号令した。

「この俺を殺せるものなら、殺してみろ！」

呂布軍は、多勢に無勢ながらも果敢に戦い、楊醜軍を次から次へと蹴散らしていった。

「そこにいるのは、楊醜と見た。友の仇を討たせてもらうぞ！」

呂布は、楊醜を見つつけるやいなや怯むことなく突撃した。

「貴様の首をはねて、曹操様への手土産にしてやるわい！」

楊醜も果敢に呂布に向かって馬を走らせた。そして、呂布と楊醜は、互いに武器を振りかざして、すれ違う間にそれを振り下ろした。

すると、楊醜の首が、血しぶきを上げながら空中を飛んで、地面に転がったのであった。

「総大将・楊醜を討ち取ったぞ！」

呂布の雄叫びを聞いた呂布軍は、大いに士気が上がった。逆に、総大将を失った楊醜軍は、完全に色を失い、潰走を始めた。そして、楊醜軍は追撃をしてくる呂布軍の餌食となり、全滅してしまったのであった。

第18話

呂布たちが楊醜軍を殲滅させてから数時間後、洛陽に向かって来る曹操軍の偵察を終えた斥候が、慌てふためきながら彼らの下に戻ってきたのであった。

「何っ…。曹操軍の先鋒は、あの青州兵だと」

呂布は、思わず目を細めた。青州兵は、青州一帯に縄張りをはっていた元青州黄巾賊のことで、曹操の傘下に加わった歴戦の強者たちであった。

ちなみに、黄巾賊とは、献帝の父・靈帝の健在時に大規模な反乱を引き起こした農民たちの集団で、彼らが黄色い頭巾を頭に巻いていたことから、そう呼ばれた。その後、その反乱を先導した太平道の教祖・張角が死去し、彼らの主力部隊は鎮圧されたが、残った少数派の勢力が各地で点在する結果となったのである。青州黄巾賊は、その残党たちの中の一勢力であった。

「しかも、その青州兵を率いているのが曹操の従兄弟・曹純…。それに、猛将と誉れ高き鮑信、管亥が従っているとは…」

高順は、思わず言葉を失った。

「そんなバカな…。鮑信や管亥は、既に戦死したと聞いているぞ。何かの間違いじゃないのか？」

張遼は、ふいに声を荒げた。それは、呂布たちが入手している情報と大きく異なっていたからであった。その情報によれば、次のようになる…。

もともと？州を治めていた鮑信は、曹操軍の傘下に入る前の青州兵（青州黄巾賊）らが領地を狙っていると情報を入手したため、戦上手の曹操に助けを求めた。その要請に対して、曹操は快く引き受け、鮑信のもとへ馳せ参じたのであった。

その数日後、曹操は作戦のため、鮑信と共に戦場の下見に出た。しかし、運が悪いことに青州黄巾賊と出くわしてしまい、激しい斬り

合いとなった。その最中、囲みを突破した曹操は命からがら逃げ延びたのだが、鮑信は奮戦むなしく戦死したのだった。

その後、曹操が指揮する？州軍と青州黄巾賊との戦いが始まり、勝利を収めた曹操は、その屈強な残党たちを自軍の兵として組み入れたのであった。

「青州黄巾賊の将の一人である管亥も北海の太守・孔融と劉備の連合軍と戦い、その最中で劉備の義弟・関羽と激しい一騎打ちを繰り広げた末に斬られたと聞いている。一体、どうなっているんだ？」張遼は、困惑の表情を見せながら呻いた。

「これは、何かあるな。しかし、敵を前にして、あれこれと詮索している場合ではない。如何なる猛将が相手であったとしても、陛下を守るために打ち破るのみだ」

呂布は、そう言っ、動揺する自軍を鼓舞したのであった。

その頃、曹純率いる先鋒部隊の青州兵は、着実に洛陽を目指していた。

「皆の者…。もう少しで、洛陽の都だ」

曹純は、そう口を開いて、一呼吸おいた。

「一刻も早く、陛下を逆賊の手からお救いせねばならぬ。ここが、一番のふんばりどころだ。心してかかれ」

曹純は、そう言っ、付き従う鮑信と管亥に目をやった。

「はい、御意でございます。我々のような傭兵部隊に、先鋒役を命じ下された殿のご恩に報いるためにも、最善を尽くします」

鮑信は、軽くお辞儀をしてから、さらに続けた。

「我ら二人は、一度は死んだようなものです。今更、命を惜しむような真似は致しません」

「うむ、心強いな。頼りにしているぞ、鮑信に管亥…。そして、青州兵たちよ」

曹純は、そう言っ、不敵な笑みを浮かべたのだった。

残念なことに、呂布の放った斥候の報告通り、猛将・鮑信と管亥は

生きていたのであった。なんと管亥は、孔融・劉備連合軍と戦い、関羽との一騎打ちにて瀕死の重傷を負ったが、奇跡的に一命は取り留めていたのであった。

「この右肩から左わき腹にかけわたる傷を見よ…。これが、関羽から貰った俺の勲章だ！」

管亥は、ことあるごとに服を脱いでは、その傷を見せて自慢をした。

「そんな大怪我をして、よく死ななかつたものだ」

鮑信は、そんな彼を見ては、ため息をついて皮肉を言ったものである。

「鮑信よ…。お前が、我が青州黄巾賊に加わってくれたことを、本当に感謝している。こんな大事な戦に参加をすることができたのは、紛れもなくお前のおかげだからな」

「なんだ、藪から棒に…。ここまで来て、そんな昔話をするのか…」
急な管亥の発言に、鮑信は小さく笑いながら、過去を振り返ったのだった。

その時の話は、青州黄巾賊と一戦を交えるために、曹操と共に戦場の下見へ出かけた時までさかのぼる…。

鮑信は、青州黄巾賊たちに取り囲まれた後、この管亥と一騎打ちとなった。だが、その最中で、乗っていた馬が足の骨を折ったために彼は落馬をし、取り押さえられたのであった。そして、彼らに捕まった鮑信は、縄で縛られたまま、軍中に引き出されたのだった。

「殺すなら、殺せ。漢に刃向う逆賊には、従えん」

鮑信は、毅然とした態度で青州黄巾賊に、そう言い放った。すると、その軍中から管亥が声を上げた。

「落馬さえしなければ、俺は貴殿に斬られていたかもしれん。その類まれなる武勇を、ここで終わらせるのはとても惜しい。それに、貴殿は武だけでなく学識もある方だ。学のない我々にとっては、まさに得難い才覚。なんとか、我々の味方になって頂けないか？」
管亥の言葉に、鮑信は眉間にしわを寄せた。

「お主らの行いは、国家を混乱に陥れる所業。そのような悪事を手
伝うわけにはいかぬ」

鮑信の発言に、管亥はこう言い返した。

「ならば、何故に国家は我々をお見捨てになつたのだ。我々とて、
戦が好きでこんなことをやっているのではない。国家が腐敗をしな
ければ、我々は流民になることはなかつたのだ」

「……!!!」

言葉を失う鮑信に管亥は、さらに続けた。

「我々の軍は、見ての通り老若男女で構成されている混成部隊だ。

家族みんなが兵となつて戦っている。これが、どういう意味かわか
るか？」

「むむ……」

腐敗した中央政府に対して、何もできなかった鮑信は自責の念にと
らわれ、うめき声を発しながらうつむいたのだつた。

「我々は、生きるために戦っているのだ。自分の身を……。自分たち
の家族を、自分たちで守ろうとして、何が悪い……」

その管亥の言葉に、鮑信は強く胸を打たれた。

「確かに、国家がかように疲弊したのは、我ら官人の責任だ。申し
訳ない……」

鮑信は、そう言つて、さらに続けた。

「ならば……。やはり、俺を処刑してくれ。死んで、その罪を償いた
い」

無念の表情を浮かべながら鮑信がそう言つと、管亥は首を振つた。

「貴殿一人の責任でもないし、貴殿が死んだところで国は変わらぬ。
本当に、国を思うなら、我らと共に戦つてくれないか？」

管亥の発言に、鮑信はため息をもらした。

「だめだ……。俺は、国家に対して刃向うことはできん」

「そうか……」

鮑信がそう言つと、管亥はおもむろに彼に歩みより、縄を切つてほ
どいたのだつた。

「何の真似だ？」

鮑信は、思わず困惑した。

「貴殿を解放することにした。貴殿ならば、必ずこの国を良くしてくれると思っただからだ」

管亥の意外な言葉に、鮑信はあつけにとられたのだった。

「なんと言う者たちだ……」

鮑信は、そう言って、青州黄巾賊の顔ぶれをながめた。

「どうか、俺たちの生活を守ってください。いや、己の欲望のためでなく、天下万民の生きる道を示す、よき指導者になってください。鮑信どの……」

管亥は、そう言って、頭を下げた。彼らには、天下を取ろうとする野心はないし、自らの力で天下を動かす力もなかった。彼らは、最高の指導者であった張角亡き後、迷える自分たちを救ってくれる新たな賢君の出現を、ただ願っていただけだったのである。

「……。お前たちの気持ちはよくわかった。だが、残念ながら、この国家を変えるほどの力は俺にはない。俺より優れた人傑は、この世にたくさんいるからだ」

現実主義者の鮑信は、そう言って静かに目を閉じた。そして、一呼吸を置いてから再び見開いて続けた。

「俺は、お前たちを尊敬する。お前たちがどこまで通用するのかわ、この目で見てみたい気持ちで一杯なのだ。それゆえに、俺は、お前らの軍中に身を置き、お前たちの大義をしつかり見届けたいと思っている」

その答えを聞いた管亥は、少し考えてから、こう言った。

「そうか……。ならば仕方あるまい」

管亥は、そう言って、鮑信の目を見ながら続けた。

「だが、何もやらないよそ者を、我が軍においておくわけにはいかん。そうでなくても食い扶持に困っているのだからな。まあ、俺の兄貴になっってくれるなら話は別だが……」

急な管亥の申し出に、鮑信は小さく笑った。

「義兄弟か…。よかろう。ならば、今日より、俺はお前たちの家族だ」

こうして、鮑信は管亥と義兄弟の契りを交わしたのだった。そして、鮑信は自軍に戻ることなく、青州黄巾賊の軍団の中で留まることになったのであった。

第19話

その後、青州黄巾賊は、曹操軍と戦うことになり、死闘を演じたのだった。始めは両軍ともに一進一退の攻防で、互角の戦いをしていったが、曹操の巧みな戦術によって、青州黄巾賊は次第に旗色が悪くなり、追い詰められていったのであった。

「このままでは、彼らが壊滅する。何とか、彼らを救わなければ…」
そう思い立った鮑信は、管亥へ曹操軍に投降することを勧めた。そして、自らが使者となつて、曹操軍の軍中へ赴いたのであった。

「まさか、そなたが生きていたとは思わなんだ。何故、すぐに戻つて来なかつたのだ？」

曹操の発言に、鮑信はこう言い返した。

「彼らは、暴虐の徒ではなく、生きるために戦う道を選んだ者たちです。そんな彼らの信ずる大義で、この国がひっくり返るところを見たかつたからです」

思わぬ鮑信の言葉に、曹操はきよんとした。

「何…。と、言うことは、君は青州黄巾賊の一味になつたといふのか？」

「如何にも…」

鮑信は、そう言つて続けた。

「曹操どの…。彼らは、十分戦つた。彼らの大義を、自軍に活用する気はございませぬか？」

「彼らが、我が軍に投降すると言つのか？」

曹操の顔色は、次第に変わった。

「彼らは、国家が良くなることを強く望んでおります。今の漢を立て直せるのは、曹操どのをおいて、他にはございませぬ。故に、才気あふれる曹操どのに付き従つて、国家のために働きたいと願つております」

「ふむ…。」

曹操は、そう言って、顎ひげをなでた。

「彼らの力量を生かすことは、曹操どのにとって有益なものだと思います。いかがでしょうか？」

鮑信の言葉に、曹操は大きく頷いた。

「うむ…。君が、そう言うのであれば、考える余地はあるまい」

曹操は、そう言って、鮑信に握手を求めた。

「彼らの投降を認めよう。これからは、共に国家のために尽くそうではないか」

「ありがとうございます」

鮑信は、曹操の手を取って、そう感謝をしたのだった。こうして、鮑信の働きかけにより、青州黄巾賊は曹操軍の軍門に降ったのである。その後、曹操は、鮑信に対して、一平卒ではなく責任のある役職に就くよう強く勧めたが、彼はそれを固辞し、家族同然の青州兵たちと共に生きる道を選んだのである。

回想を終えた鮑信は、ふいに口を開いた。

「管亥よ…。世間では、俺たち二人は既に死んだことになっている。言わば、生きる屍状態だ」

鮑信は、そう言い放ってから、さらに続けた。

「しかし、俺はそれで良かったと思っている。それは、青州兵の一員として、家族として…。終生において、青州兵と共にありたいものだ」

鮑信の言葉に、管亥は黙ってうなずいた。

「わかつているさ…。我ら兄弟は、常に先頭をきって戦う名もなき一兵卒として、大義のために生きようぞ」

管亥は、そう言って、小さく笑ったのだった。

「来たか…」

呂布は、目の前から土煙が上がって来る方向をじっと睨んだ。そして、土煙の中から曹操軍の先鋒部隊が姿を現すと、呂布は大きく号

令を出した。

「全軍、突撃！」

呂布軍は、躊躇をすることなく、一斉に曹操軍を目がけて斬り込んでいったのであった。

「者ども、我ら青州兵の怖さを思い知らせてやれ！」

管亥は、そう鼓舞すると先頭をきつて、呂布軍の兵士たちをなぎ倒していったのだった。そして、幾度となく転戦を繰り返した青州兵は、その強さを存分に発揮し、呂布軍の兵士たちを圧倒していったのであった。

「さすが、前評判のある者たちだ。だが、俺たちは陛下を守るため、負けるわけにはいかない……」

呂布は、そう自分に言い聞かせ、単独で果敢に敵兵の中へ突っ込み迫ってくる者たちを斬り捨てていった。この鬼神のごとく暴れまわる彼を見て、優勢に戦っていた青州兵たちは、次第に恐怖を感じていったのだった。と、その時、鮑信が呂布を見つけて、大声を發したのだった。

「そこにいるのは、呂布とみた。俺と勝負しろ！」

鮑信は、ためらうことなく、呂布へ一撃を放った。

「むっ！」

呂布は、鮑信の鋭い一撃を受け止めて唸った。

「こしゃくな！」

呂布は、間髪を入れることなく鮑信へ攻撃をしたが、彼はその攻撃をさらりとかわして、すかさず攻撃に転じたのだった。

「食らえ！」

「おっと……」

呂布は、鮑信の繰り出す連続の突きに対して、方天画戟を巧みに操って裁いたのであった。

「見事な槍裁き……。恐れ入ったぜ……」

そこまで言いかけた時、呂布は、ふいにはっとして何かを悟った。

「そうか……。お主は、鮑信だな！」

「如何にもそうだ。いずれは、お前と剣を交えたいと思っていたぞ」
鮑信は、呂布にそう答えると同時に、突きを繰り出した。

「この亡霊が……。ここで、退治してやる！」

呂布は、その突きを難なく交わすと、方天画戟を大きく振り下ろしたのだった。

「やれるものなら、やってみろ！」

鮑信は、そう言い放って、その攻撃を受け止めた。こうして、二人の一騎打ちは、さらに激しさを増していったのであった。

「むう……。あそこで兄貴と戦っているのは、まさしく呂布！」

と、その時、管亥は、呂布と鮑信が戦っている姿を見つけたのだった。

「この管亥……。加勢をするぜ！」

管亥は、一心不乱に彼らを目がけて駆け寄っていった。

「そうはいくか……」

それを見つけた張遼は、そう言っ、管亥の目の前に立ちふさがったのだった。

「そこを、どけえ！」

「お前の相手は、俺がしてやる」

張遼は、管亥の放つ一撃を受け払って、睨みを利かせた。

「お、おのれ……」

こうして、張遼と管亥は、激しい斬り合いとなった。と、その時、ふいに高順が声を上げた。

「殿……。曹操軍の本隊が現れましたぞ！」

「くっ！」

呂布は、思わず苦悩の表情を浮かべた。

「よし、追いついたぞ……。一気に潰してしまえ！」

先鋒部隊と合流した曹操軍の本隊は、数万の大兵团となって、一斉に呂布軍へ襲いかかってきたのであった。

「これは、悠長に一騎打ちをしている場合ではない……」

両軍は入り乱れてもみくちやとなつたため、彼らの一騎打ちは勝負がつかないまま、散開したのであった。

「戦は数じゃない。それを、俺が教えてやるぜ！」

呂布は、そう大声を発し、曹操軍の本隊に激突したのであった。

「この呂布の刃を受けてみよ」

呂布は、方天画戟を振り回して奮戦をした。強敵の前に、呂布の武勇は、さらに洗練されていき、曹操軍の兵士をどんどん骸へと変えていったのだった。

「恐れるな……。如何に呂布が強くても、たかだか数千の兵しかおらぬ。勇気を持って立ち向かうのだ！」

曹操軍は、兵力差を利用して、力でねじ伏せようとした。すると、呂布軍は、次第にじわりじわりと押されていったのであった。

「殿……。味方が総崩れとなっております。一時、引きあげましょう」高順の言葉に、呂布は眉間にしわを寄せた。

「洛陽に引き上げて、防ぐ手立てはない。かくなる上は、血路を開いて突破し、戦場を脱出するしかない」

呂布は、そう言って歯ぎしりをした。

「陛下……。我らの力が足りないばかりに、またお別れをしなければならなくなりました。如何に、曹操とは言え、陛下のお命を狙うこととは、ございますまい。どうか、いつまでもお元気で……」

呂布は、迫りくる敵兵をなぎ倒しながら、戦場からの離脱を図った。そして、突破口が生まれると、そこから呂布たちは必死に逃げ失せたのであった。

第20話

その日の夜、戦場を離脱した呂布たちは、とある山野で野宿をしたのであった。

「ここまで来れば、追っては来ないだろう」

呂布は、疲れた体を大木に預けて一息をついた。

「しかし、すまなかつたな。お前たちまで、こんな目に遭わせることになって……」

呂布は、楊奉と韓暹らに目を向けて、そう言った。

「なあに……。俺たちは、あんたが気に入ったから一緒に付いて来たまでだ。それに、権力欲の強い冷酷な曹操とか言う男に頭を下げたくなかつたからな」

楊奉は、そう言って大きく笑った。

「呂布どの……。我らの手で陛下を奪回するためにも、これからは共に力を合わせて曹操に立ち向かっていきましよう」

「ありがとう。楊奉どの……」

呂布は、そう言って頭を下げた。

「殿……。しかしながら、これからどうするおつもりですか？」

張遼のふいな問いかけに、呂布は言葉を詰まらせた。

「そうだな……」

呂布は、夜空を眺めながら途方に暮れ、そうため息を漏らしたのであった。と、その時、ふいに韓暹が、こう話を切り出したのであった。

「呂布どの……。おいらには、気心の知れた友がおります。名前は、臧覇と言う山賊で、泰山に縄張りを張っております。一時、彼のもとに身を寄せてはどうでしょう？」

韓暹は、呂布に向かって、そう提案した。ちなみに、泰山は、？州に近接する標高・1,545mの山で、歴代の皇帝が封禅の儀式を行い、庶民の間でも信仰の歴史がある霊山であった。現在は、世界遺産に登録されている。

「ほう…。それは、願ったり叶ったりだな。しかし、大丈夫なのか？」

「臧覇は、義を重んじる漢で、弱い者への略奪は一切せず、私腹を肥やす悪い権力者や金持ちしか襲わないことを信条としております。泰山の近くまでたどり着いたら、おいらが先に行って彼と話をつけてきましょう」

韓暹の話聞いて、呂布は深く頭を下げた。

「すまん。韓暹どの…。恩にきまずぞ」

それを見て、高順は穏やかな顔をして、口を開いた。

「良かったですな。殿…」

「うむ…。どんな世でも、人とのつながりと言うものは大切なものだ」

呂布は、そう言って、笑顔を取り戻したのであった。

そして、呂布たちは山野を離れ、臧覇がねぐらとする泰山を目指したのであった。

一方、献帝を擁することに成功した曹操は、焦土化した洛陽では外敵の侵入を防ぐことができないと判断し、献帝に許昌の都へ移って頂くようお願い出ていた。許昌は、広大な農地が広がる豊穡の地で、堅固な城郭と壮麗な宮殿を備えており、献帝の安全を図るには絶好の場所であった。曹操は、董卓らと違って紳士的であり、理路整然と丁寧論ずるので、献帝は曹操を次第に信頼するようになっていった。そして、この英邁な新しい指導者である曹操の意見を受け入れることにした献帝は、一族と近習の者たちを連れて許昌の都へ向かったのであった。

「これで、陛下の安全は図れましたな。しかも、陛下は殿をとても信頼されている様子…。着々と万全な体制が築き上がっている気がしますぞ」

曹操の参謀である荀？の発言に、曹操はこう言って顔をしかめた。

「うむ…。陛下は、常に余の意見を重用してくださる。しかし、一

つだけ厄介なことがある」

「それは、どんなことでございますか？」

曹操の発言に、荀？は尋ねた。

「呂布のことだ。陛下は、呂布を無二の親友だと断言し、それ故にこの余も奴と仲良くするよう強く言われるのだ。一体、あのような野蛮人のどこが良いのやら…」

曹操は、そう言って頭を抱えた。

「それがしも、殿と同じ気持ちでございます。あの男は、ただ無用に天下をかき乱しているだけで、この国にとっては害悪であり、ただの厄介者にすぎません。早い段階で、始末をしておくべきだと考えます」

荀？の意見を聞いて、曹操は大きく頷いた。

「しかし、奴はゴキブリみたいに生命力があつて、すばしっこいからう。今度は、どこへ消えていったのやら…」

曹操は、そう言って、ため息をついた。

「ゴキブリは、エサを得るために必ず姿を現します。その内に、向こうからまた現れることでしょう。それよりも、今は奴のことばかりを考えず、当面の課題を一つずつ処理することに力を注ぐべきです」

荀？がそう述べると、曹操は真剣な表情になった。

「我が領土内で暴れている泰山の山賊たちのことか…。確かに、治安の回復のためにも、奴らを野放しにはできぬからな」

曹操は、そう言って顎をなでた。

「しかし、所詮は山賊…。奴らの退治は、？州の太守で余の親族に当たる曹安に任せておけば、問題ないであろう」

曹操の答えに、荀？は首を振った。

「殿…。恐れながら、曹安様は少々お人好しなところがあります。事を確実に遂行するために、違う者を起用して頂けないでしょうか？」

「むむ…。そうかのう。余には、そう思えぬが…」

山賊相手に労力を費やしたくなかった曹操は、この時ばかりは荀の意見を却下したのであった。

それから月日は経ち、呂布たちは、長く辛い旅路を経て泰山の近くにまで迫っていたのであった。

「呂布どの…。あそこに見える山が、泰山となります」

韓暹は、そう言って指をさした。

「おお…。あれが、泰山か」

呂布が、そう感心をしていると、高順が何かの異変を察知して、ふいに声を発したのだった。

「殿…。あちらより、泰山に向かって軍勢が押し寄せておりますぞ」高順の言葉に、呂布は眉間にしわを寄せた。

「もしま、どこかの官軍が山賊退治にやって来たのでは…」

呂布たちは、状況を確認するため、急ぎ泰山へ向かったのだった。

一方、泰山では、忽然と軍勢が現れたことで騒然となっていた。

「お頭…。？州の軍勢が、我らを退治しようところちらへ向かっております」

泰山の副首領・孫観が、首領の臧覇に、そう報告をした。

「おのれ…。ならば、あべこべに奴らを壊滅させてやるまでだ。いくぞ、孫観に呉敦！」

「はっ…。承知！」

臧覇は、孫観ともう一人の副首領である呉敦と共に手勢を率いて山を下り、？州軍の迎撃へ向かったのだった。

「殿…。山賊たちが、山を下りてきましたぞ」

曹安の配下の梁滸は、指をさして、そう言った。

「ほう…。討って出て来たか。その勇氣だけは、褒めてやるぞ」

曹安は、そう言ってニヤリを笑った。そして、両軍の距離が段々と狭まっていき、まさに激突をしようとした瞬間、急に何者かがその中に割って入ってきたのであった。

「その戦……。ちょっと待たれい！」

呂布は、大声を発して両軍を牽制したのであった。

「何者だ！」

曹安は、たまらず声を発した。

「拙者は、陛下直属の部下の呂布である……。両軍とも、戦をする前に、まずは拙者の話を聞け！」

呂布は、そうタンカを切ったのだった。

「呂布……。奴が天下に鳴り響く、あの豪傑なのか！」

呂布の名を聞いた臧覇たちは、目を大きく見開いた。

「陛下の直参が、一体何の用でござるか……」

曹安の声に、呂布はニヤリと笑った。

「拙者は、両軍に和睦をするよう提言する」

その話を聞いた曹安は、思わず大きく笑った。

「ははは……。冗談は、止めて頂きたい。我らは、曹操閣下の命を受けて、山賊退治に参ったのだ。今更、兵を引くことなどできぬわい」
しかし、呂布は、曹安の発言に対して毅然とした態度で反論した。

「よく聞け……。この和睦は天意である。天に逆らえば、双方はそれなりの報いを受けることになるであろう」

「一体、何を根拠に天意だと申すか！」

曹安は、声を荒げて怒鳴った。

「ならば、今からその証拠を見せてやろう……」

呂布は、そう言うと、大地に方天画戟を突き刺した。

「天が我にこう言っている。我に弓を持たせて、この方天画戟の小枝を狙って一矢射よ……。我は天意に従い、見事それを的中させ、天意である証明をいたす」

その話を聞いた両軍は、途端に啞然としてしまった。

「方天画戟の小枝を、たった一本の矢で的中させるだ……」

「そのような芸当、例えトリックを使っても無理だ。とても、人が成せるような技ではない……」

どよめく両軍をよそに、呂布は再びニヤリと笑った。

「では、早速始めさせて頂くぞ」

呂布は、そう言つて、突き刺さつた方天画戟から離れていった。そして、彼はその的が常人の肉眼で捉えられるかどうかの瀬戸際のところまで歩き、立ち止まったのだった。

「とんでもない距離だ。果たして、矢が届くのかどうか…」

臧覇は、汗をぬぐいながら、ごくりと生唾を飲んだ。

「さあ、参るぞ…」

呂布は、そう言つと、力強く矢をつがえて弓を構えた。

「殿の一矢で、すべての運命は決まります。がんばってください」

高順は、祈るような思いで、呂布を見つめた。

「いぞ…」

呂布は、掛け声と同時に矢を放つた。そして、放たれた矢は迷うことなく、一直線に飛んでいき、見事に方天画戟の小枝に当たつたのであつた。

「な…。なんと…」

臧覇は、思わずため息を漏らした。

「いかがでござる？」

呂布は、曹安を見て、そう尋ねた。すると、曹安は、ふいに大きく笑いだした。

「わはははは…。なんと凄いことをしでかす男だ。こんな痛快なことはないぞ」

曹安は、そう言つて、呂布へ近づいた。

「わしは、？州の太守・曹安だ。お主に免じて、今回は兵を引いてやる。だが、次は無いと思えよ」

「有難い話だ。感謝いたすぞ、曹安どの…」

こうして、？州軍は泰山の山賊討伐を一時休止することになったのであつた。

第21話

？州軍と停戦を結んだ呂布たちは、臧覇に連れられて泰山の山寨に入った。

「呂布どの…。ここが我らの山寨でございます。長旅で、さぞお疲れでしょう。大したものはございませぬが、ごゆっくりしてください」

臧覇は、そう言って頭を下げた。

「こちらこそ。我々のような者を受け入れて頂き、ありがとうございます」

臧覇の丁寧な挨拶に、呂布も深くお辞儀をした。

「呂布どのの武勇は、天下に鳴り響いております。先ほどの武芸も人知を超えたものと思えませぬ」

「その高名な呂布どのにお越し頂いたとあれば、それが私たちも至極ほこりにございます」

呂布の真摯な態度を見て、泰山の副首領を務める孫觀と呉敦は、そう言って頭を下げた。

「ははは…。今日は、なんとめでたい日だ。今夜は、皆で大いに飲み明かそうぞ」

臧覇は、そう言って豪快に笑い、呂布を歓迎する宴が始まったのであった。

そして、その宴は次第に盛り上がっていった。呂布は、臧覇の様々な武勇伝や苦労話を耳にすることで、次第に彼と言う人物に興味を抱き始めたのであった。

「この漢は、ただ者ではない…」

呂布はそう感心をしたが、ふと疑問が浮かんだ。

「ところで、臧覇どの…。貴殿のような剛毅な漢が、何故に山賊となったのだ？」

呂布がそう問いかけると、臧覇は急に真面目な顔をした。

「うむ…。だいぶ昔の話となるが、県の役人ともめ事を起こしてしまつてな…」

「もめ事を？」

呂布がそう相槌を打つと、臧覇は話を続けた。

「俺の父は県の役人で、清廉潔白な男として民から慕われていた。しかし、ある日、その太守が不正を犯した時に、父が先頭を切つて諫言をしたため、逆恨みをされてしまい、ついには逮捕されてしまったのだ」

「むう…。なんとも、ひどい話だな」

その話を聞いた呂布は、真摯な目で臧覇を見つめた。

「父が逮捕された話を聞いた俺は、いてもたつてもいられなくなつた。そこで、孫觀や呉敦らと共に父を奪還するべく、俺たちは父を牢獄まで護送する集団を襲い、父を助け出したのだ。しかし、そのおかげで俺たちはお尋ね者になってしまい、今に至る結果となつた訳だ」

「そうだったのか…。それは、至極大変だったな」

呂布は、そう言つて静かに目を閉じたのであつた。その様子を見た臧覇は、暗い雰囲気を変えようと、ふいに破顔した。

「まあ、俺はじつとしておれない性質だから、役人みたいな仕事は向かないと思つているぜ。気ままな山賊暮らしの方が、性にあつているかもな」

「それは、言えているな」

それを聞いた孫觀たちは、思わず大笑いをした。

「ははは…。しかし、貴殿らは本当に気持ちの良い奴らだな。とても仲が良く、わきあいあいとやっっている感じがするよ」

その呂布の言葉に、思わず呉敦は、ぼそりとこう言つた。

「まあ、ただ一人…。裏切り者はいたけどな」

その発言に、臧覇は暗い顔になつた。

「梁済のことは、もう言うな…」

「梁滸？」

呂布がそう聞き返すと、臧覇は重い口を開いた。

「昔、うちの仲間、梁滸と言う奴がいてな。俺たちの掟を背いた揚句、脱走をして？州軍についてしまった男なのだ」

臧覇は、そう言って、話を続けた。

「俺たちは、山賊なれど、民百姓を痛めつける真似はしない。普段は自給自足で田畑を耕し、弱いものに重税をかけて苦しめる役人どもをこらしめるただけしか、武力を用いないと決めているのだ。

だが、奴は、ある村に住む美しい娘を自分の物にしようと、一味を率いて村を襲い、手向かう者を惨殺して火を放ち、金品と共に娘を略奪したのだ」

「なるほど…。それは、まことにけしからんことだな」

呂布は、眉をひそめてうなずいた。

「その事を知った俺は、すぐに奴を捕らえて百叩きの計とした。しかし、それに根を持った奴は、その日の夜のうちに行方をくらましてしまった訳だ」

臧覇がそう話をすると、孫觀は、続けてこう付け足した。

「そう…。その奴が、いつの間にか？州の太守・曹安の部下になっていやがる…。ほんと、嫌な話だぜ」

その話を聞いた呂布は、少しうつむいて、こう口を開いた。

「さっき会った印象から、曹安と言う男は戦争や殺人を、あまり好まない人物のように思える。その梁滸と言う男は、そんな彼にうまく取り入ったのだろうか」

呂布がそう言うと、高順はこう口を開いた。

「果たして、このまま、？州軍は引き下がるでしょうか…。曹安どのはともかく、泰山に恨みを持つ梁滸が黙っていないような気がしますか？」

「むう…。確かに、油断はできないかもしれん…」

高順の発言に、呂布は表情を厳しくさせたのであった。

一方、？州軍の陣営では、引き上げの準備が行われていた。そんな中で、梁滸は猛然と曹安に反対の意を示していた。

「殿……。本当に、引き上げる気でございますか！」

梁滸は、曹安にそう詰め寄った。

「停戦の約束を交わしたのだ。約束を破るわけにはいかん……」

「我らは、曹操閣下の命を受けておるのですぞ。閣下に対して、どう申し開きをなさるおつもりか」

梁滸は、曹安に対して、容赦なく食ってかかった。

「理由など考えれば、いくらでもある。とにかく、今回は引くぞ」

「そんな訳にはまいますまい」

梁滸は、体を震わせながら、曹安を睨んだ。

「呂布と言う漢は、ほんとに気持ちのいい奴だ。わしは、彼と戦う気はない……」

曹安は、小さく笑って続けた。

「それに……。わしには、どうもあの泰山の山賊たちが、お前が言うような極悪人とは思えんのだ。どうせなら、彼らを懐柔できないものかと考えている」

「ええっ！」

曹安の言葉に、梁滸は愕然とした。

「奴らが我が軍に降伏したとなると、俺の立場はどうなる……」

梁滸は、心の中で、そう不安を募らせた。

「さあ、引き揚げの支度をしろ。今後のことは、帰ってから決めるぞ」

曹安は、そう言うと、背を向けて歩き始めた。

「このままでは、閣下の咎めを受けることは確実……」

梁滸は、曹安の背を見ながら、そうつぶやいた。

「それに、このバカ殿には、ほとほと愛想が尽きた」

梁滸は、かっと思開いた。そして、次の瞬間、彼は腰に携えていた刀を抜いたのだった。

「死ねえ！」

梁滸は、背後から曹安を襲い、斬り殺してしまったのであった。

「これより、？州軍の総司令官はわしだ」

梁滸は、すぐに退却の準備を中止させ、泰山に向けて兵を再出発させたのであった。

？州軍が泰山に引き返してきた情報は、すぐさま見張りの者より呂布たちへ伝わってきた。

「曹安どのが梁滸に殺され、奴が兵を率いてきただと！」

泰山の山寨に、再び緊張が走った。

「思った通り、最悪の事態になりましたな。殿……」

高順は、そう言って、呂布に目をやった。

「もはや、やむを得んな。かくなる上は、この呂布が先陣を切って？州軍を蹴散らして見せよう……」

呂布は、そう言って立ち上がった。

「おお……。呂布どのがおれば、我が軍は千人力だ。お疲れのところを申し訳ないが、頼みましたぞ」

臧覇は、呂布に頭を下げると、配下の者に対して大声を発した。

「今より、？州軍を迎え討つ……。者ども、準備にかかれ！」

こうして、泰山の山賊たちは、威勢良く山寨を飛び出していったのであった。

そして、両軍の激しい戦いが始まった……。両軍は、暗闇の中を松明の明かりを頼りに、無我夢中で斬り合いを演じたのであった。

「臧覇、出て来い……。貴様の首級を、俺の出世の道具にしてやるわい！」

梁滸は、そう言い放って、迫り来る山賊たちを斬り伏せていった。

「ぬっ……。言わせておけば……」

それを聞いた臧覇は、槍をぐっと握りしめて彼を睨みつけた。と、その時、彼は近くにいた呂布によって、たちまち制されてしまった。

「ぶっ……。臧覇どのが、わざわざ相手をするまでもない……」

呂布は、そう言つて、臧覇のもとを離れ、暗闇の中で暴れまわる梁滸を見つけるやいなや、彼に急接近をしたのだった。

「お前のような下衆の相手は、この俺がする…。来い、梁滸！」

呂布は、そう大きくタンカを切つた。

「ぬう、こしやくな…。返り討ちにしてやる！」

梁滸は、大刀を振りかざして呂布に撃ちかかったが、呂布は赤兎馬と共にひらりと攻撃をかわした。

「罪を犯して泰山の仲間を裏切り、それで飽き足らず、主君・曹安を殺し、約束をたがえて兵を向けた罪は、万死に値する。よつて、

この呂布が貴様に天誅を下す！」

呂布は、そう言つて、梁滸を馬ごと真つ二つに斬り捨てたのであつた。

「ひい…。梁滸様が、やられた！」

総大将を失つた？ 州軍は、暗闇の中で大混乱となり、次から次へと泰山の山賊たちの餌食となつていった。そして、夜が明けた時には、辺りは？ 州軍の兵士たちの死骸で埋め尽くされていたのであつた。

第22話

？州軍の壊滅の報は、曹操のもとにも届いてきた。

「なんと…。泰山の山賊どもに呂布が加勢して、？州軍が敗れただと！」

それを聞いた曹操は、怒りの頂点に達した。

「おのれ…。よくも、曹安を殺してくれたな。ならば、余が自ら兵を率いて、その仇を取ってやるぞ！」

曹操は、すぐに戦の準備をし、精鋭を率いて泰山に向かったのだった。

曹操の進軍情報は、すぐに泰山の要塞に伝わった。

「なんと…。曹操自らが兵を率いて、こつちへ向かっているだと！その報告を聞いた呂布たちは、大きくどよめいた。」

「曹操の軍勢は、我が軍のおよそ5倍以上…。曹操は、今回の戦で“必殺呂布”の旗を掲げ、夏侯惇、夏侯淵、李通、史渙、典韋、許？など、そうそうたる武人たちを連れて、こちらへ向かっている模様です」

「むづ…。どれも名の知れた勇将たちではないか」

呉敦の報告を聞いた臧霸は、そう言っただけ息を漏らした。

「どうなされますか。殿…。」

高順の問いかけに、呂布は力強く応えた。

「勝敗は兵の数だけではない。たとえ、どんな強敵であろうと最後まで戦い抜き、我らの義を貫くのみだ！」

呂布の言葉に臧霸は、大きく頷いた。

「そうですね…。それに、曹操自らが来たのなら、奴の首を取るチャンスでもある。一か八かの大勝負をしましょう」

こうして、泰山の山賊は、結束を固めて打倒曹操を誓ったのであった。

そして、曹操軍が泰山の近くに現れると、泰山の山賊たちは、臧覇、孫觀、呉敦と兵士の1/3を要塞に残して守りを固めさせ、呂布たちは山を下って迎撃する構えを取った。

「魚鱗の陣にて、一気に曹操の首を狙うぞ」

呂布は、突撃の陣形を敷き、少ない兵力をフル活用して総大将の首を狙い、大軍を混乱に陥れる作戦に出たのであった。そして、前方から敵が迫って来ると、呂布は大きな声で怒号をあげた。

「全軍、突撃！」

呂布は、赤兎馬と共に先陣を切つて敵軍の中へ斬り込んだ。そして、次から次へと押し寄せて来る兵士を斬り裂いていった。ある兵士は真つ二つにされ、ある兵士は串刺しとなり、ある兵士は宙を舞い、ある兵士は赤兎馬に踏みつぶされていったのであった。

「ひい…。まるで、鬼か悪魔だ」

呂布の人知を超えた武勇に、曹操軍の兵士たちは怯み始めた。

「どうした…。こんなものか、曹操の軍隊は！」

呂布は、雄叫びをあげながら、方天画戟を振り回していった。

「あそこにいるのは、まさしく呂布…。この悪来の異名を持つ俺と勝負をせい！」

砂煙の舞う中、呂布を発見した典韋は、果敢に撃ちかかっていた。

「来い…。ぶつた斬つてやるぜ！」

呂布は、そう言うと、典韋と斬り合いを始めた。

「おう、典韋よ…。抜け駆けは、許さん。俺も、その勝負に加える！」

許？は、二人の激しい斬り合いを見つけると、急いではせ参じたのだった。

「おりゃあ！」

典韋の一振りを呂布は、方天画戟で受け止めた。

「死ねえっ！」

許？は、そのすきを狙って、呂布へ攻撃を仕掛けた。

「なんの…」

呂布は、すばやく許？の攻撃を払いのけた。

「今度は、こつちの番だ」

呂布は、典韋に対して鋭い突きを食らわせた。しかし、典韋は自身の持つ盾でそれを受け止め、刀を持つ方の手で再び攻撃を仕掛けた。

「一緒に、俺の攻撃も食らえ！」

典韋の攻撃のタイミングに合わせて、許？も一太刀を繰り出してきた。

「なめるな！」

呂布は、大声を発して、二人の同時攻撃を方天画戟で振り払ったのだった。そして、呂布は典韋と許？のコンビを相手に、斬り合うこと数十合にも及んだのであった。

戦いの中で、夏侯惇は、猛将・典韋と許？の二人がかりで、全く引けを取らない勝負を演じる一人の漢を見て、ふいに目を光らせた。

「呂布だな…。その首は、この俺がもらった！」

夏侯惇は、呂布を見つけると、敵兵を斬り刻みながら、彼に向かって突進をしてみたのだった。

「いかん…。次々と曹操軍の猛者たちが、殿を狙ってくる…」

高順は、すぐさま携えていた弓を構えた。

「くらえっ！」

高順は、大声を発しながら、夏侯惇を目がけて矢を放った。

「ぐおっ！」

高順の放った矢は、見事に夏侯惇の左目に突き刺さった。しかし、夏侯惇は、もだえ苦しみながらも、突き刺さった矢を左目ごと引っこ抜いてしまったのだった。

「これは、父母から頂いたもの。もつたいたい…」

夏侯惇は、矢に突き刺さった目玉を食らって、高順を睨んだ。

「下郎め…。まずは、貴様から始末してやる！」

夏侯惇は左眼窩から血を吐き出しながら、鬼のような形相で高順に

打ちかかっていった。

「いざ、勝負…」

高順は、その憎しみのこもった彼の攻撃を受け止めて、ぐっと歯を食いしばった。

「どつりやあ！」

「むん！」

高順はすかさず、夏侯惇へ反撃をしたが、その攻撃は難なく受け止められてしまったのだった。そして、彼らの一騎打ちは、次第に激しさを増していったのであった。

「向こうが弓矢で来るなら、こちらもお見舞いしてやるまでだ」

曹操軍の中でも群を抜いて弓術に秀でる夏侯淵は、そう言っ弓を構えた。

「むづ…。そうはさせるか！」

それを見た張遼は、すぐさま馬の腹を蹴って走らせた。

「死ねえ…。呂布！」

夏侯淵は、呂布に向けて矢を放った。しかし、その矢は張遼の大刀によって、はかなく斬り落とされたのであった。

「貴様の相手は、この張遼だ！」

張遼は、彼の前に大きく立ちはだかつて、そうタン力を切った。

「こじゃくな！」

夏侯淵は、そう大きく怒鳴って、張遼と打ち合いを始めたのだった。と、そこへ、呂布の首級をあげて手柄を得ようと勇みだった李通と史渙が、その隙を狙って呂布へ襲いかかるうとしたのだった。

「呂布の首は、この李通が頂く！」

「いや、この史渙がもらったぜ…」

李通と史渙は、そう発して、武器を力強く握りしめて呂布へ接近していった。すると、それを察知した楊奉と韓暹は、呂布に忍び寄ろうとする二人の猛者の前に立ちはだかって身構えたのだった。

「そうは、いくか…」

「おいらが相手してやる！」

こうして、楊奉は李通と、韓暹は史渙とそれぞれが一騎打ちを始めたのだった。このプライドを賭けた華やかな演舞に励まされた両軍の兵卒たちは、互いに自身の限界を超えるほどの力を発揮して、大接戦を繰り広げたのであった。

そして、激闘が始まってから数刻が過ぎた頃、呂布と典韋・許？コンビの戦いでは、ある変化の兆候が見え始めていた。

「どりゃあー！」

呂布は、典韋に対して鋭い突きを繰り出し、避けそこなった典韋は、その攻撃を右肩に食らってしまった。そして、その勢いで彼は落馬してしまっただけであった。

「ぐあ……」

「おお……。典韋！」

許？は、とつさに大声をあげた。

「大丈夫だ。右肩を少し、やられただけだ」

典韋は、顔をゆがめながら、そう答えた。

「隙あり！」

呂布は、注意力の薄れた許？に対して、すかさず突きを食らわした。「うわっ……。しまった！」

許？は、その攻撃を避けるために大いにのけ反ったため、落馬してしまっただけであった。

「さあ、二人とも串刺しにしてやるぜ……」

呂布が、落馬した典韋と許？に止めを刺そうとした瞬間、何者かが大声を発しながら駆けこんで来た。

「呂布どの……。大変でござる……」

その声を放った主は、なんと要塞を守っているはずの臧覇であった。そして、彼に続いて、孫觀、呉敦まで姿を現したのであった。

「なぜ、お前らがここに……。まさか……」

呂布は、嫌な予感に襲われた。

「申し訳ございません。泰山の背後から曹操の本隊が現れ、山寨は

陥落してしまいました」

「曹操の本隊だと…。曹操は、最初から別行動で要塞を狙っていたのか！」

呂布は、山寨落城の報に、思わず天を仰いだ。

「どう致しましょう…」

臧霸の問いかけに、呂布はこう言い放った。

「悔しいが…。かくなる上は、戦場を離脱して、再起を図るしかない…」

呂布は、そう言うと、続けて大声を発した。

「皆の者…。力のある限り、逃げるぞ！」

呂布の号令を聞いた泰山の山賊たちは、一斉に退却を始めたのだった。

第23話

退却を決めた呂布は、一騎打ちを演じている高順たちを逃がすため、順々に彼らのもとへ駆け寄っていった。

「高順…。逃げる！」

呂布は、その声を張り上げて夏侯惇へ突進し、躊躇をすることなく横槍を入れた。

「ぬおっ…！」

夏侯惇は、すかさずその突きを受け止めたが、その拍子に武器を落として落馬してしまつたのだった。

「殿…。かたじけない…！」

高順は、呂布に礼を言つと、すぐに馬の腹を蹴って駆け出したのであつた。それを見た呂布は、夏侯惇にとどめを刺すことなく、その場を早々と立ち去り、急いで次のターゲットへと向かつたのだった。

「次は、夏侯淵だ！」

そして、呂布は、ためらうことなく方天画戟を振りかざし、夏侯淵へそれを振り下ろした。

「うおっ！」

その不意打ちによつて、夏侯淵は武器を破壊され、その拍子に落馬をしてしまつたのであつた。

「残るは、あと二人…！」

呂布は、そう呟きながら、残りの二人の下へと接近したのであつた。

「楊奉、韓暹…。逃げるぞ！」

そして、間髪を入れることなく、呂布は、李通と史渙に攻撃を食らわせたのだった。

「ぬわっ…！」

「くおっ…！」

その鋭い攻撃に李通と史渙は、思わず怯んだ。と、その際に、楊奉と韓暹は、さつさと逃げ去つたのであつた。

「よし…。俺も、このまま離脱させてもらっぜ…」

呂布は、そう言い残すと、脱兎のごとく、去っていったのであった。
「待て…。臆病者！」

「そう簡単に、逃がすか！」

李通と史渙は、体勢を整えると、逃げる呂布たちを追いかけ始めたのだった。

「李通と史渙に続け…。絶対に逃がすな！」

落馬をした夏侯淵は、大地に頭を強く打ちつけたせいで意識が朦朧としていたが、力を振り絞って、兵士たちにそう叱咤したのであった。すると、曹操軍の兵士たちは、たちまち目標物を確認して、二人の将に続いて走り始めたのだった。

「ちい…。しぶとい奴らだ！」

呂布は、懸命に赤兎馬を走らせたが、次第に李通と史渙たちとの距離は狭まっていったのだった。

「もはやこれまでか。ならば、斬り死にするまでだぜ！」

呂布がそう言って、赤兎馬をひるがえした時、背後から楊奉と韓暹の二人の將とわずかな兵士たちが引き返して来たのだった。

「呂布どの、こんなところで死んではなりません。しんがりは、我らにお任せください！」

「我らが、呂布どのの再興の礎となって果てましょう…」

楊奉と韓暹は、そう言って、李通と史渙を迎え討つ態勢に入った。
「再興など、どうでもいい…。お前らを見捨てるわけにはいかん。

俺も、ここで一緒に死に花を咲かせようぞ！」

呂布は、そう大声を張り上げた。

「それは、なりません…。今の世を変えられるのは、呂布どのしかござらん！」

「さあ…。早くお逃げください。呂布どの！」

楊奉と韓暹は、呂布の声に負けないぐらいの大声で言い返した。

「お、お前ら…」

呂布は、思わず眉をひそめた。そして、小さく頷いてから、こう言

ったのだった。

「お主たちの死は、決して無駄にせんぞ…」

呂布は、唇を血が滲み出るほど強く噛みしめながら、背を向けたのであった。そして、無念の思いで一杯になりながら、その場を去っていったのだった。

「あつ…。呂布が逃げたぞ！」

「ここまで来て、逃がしてたまるか！」

李通と史渙は、逃げようとする呂布に必死に食い下がろうとしたが、楊奉と韓暹によって遮られてしまった。

「ここから先は、通せん！」

「おいらたちが、相手だ！」

楊奉と韓暹に遮られた李通と史渙は、大いにいきり立った。

「邪魔をするな！」

「下衆は、どいてろ！」

こうして、李通と史渙は、再び楊奉と韓暹と打ち合いを始めたのであった。

「せいや！」

史渙は、韓暹に対して、そう大声を発すると、連続で鋭い突きを放ってきたのだった。

「うわわ…」

その攻撃に、韓暹は思わず体勢を崩した。と、その隙を逃すことなく、史渙は、体勢を崩した韓暹に向かって、大きく一撃を繰り出したのだった。

「どりゃあー！」

「ぐわあー！」

その一撃は、見事に韓暹の心臓を貫き、彼の命を奪い去ったのであった。

「敵将・韓暹は、この史渙が討ち取った！」

史渙は、勝利の雄叫びをあげ、槍を高々と突き上げた。

「ああ…。韓暹！」

それを見た楊奉は、うかつにも一瞬の隙を作ってしまった。すると、李通は、そのチャンス逃さず、大刀を思い切り振りおろしたのだった。

「今だ…。死ねえ！」

「がはあ！」

李通の一撃を食らった楊奉は、全身を朱に染めながら落馬したのであった。

「よし…。あとは、残りのザコどもを処理して、呂布を追うぞ！」

李通は、自分らに従って来た兵士たちに命令をして、しんがりとなった残りの山賊たちを皆殺しにしたのだった。だが、楊奉と韓暹たちの犠牲によつて、呂布たちは執拗に追いかけて来る曹操軍から逃れることに成功したのであった。

泰山の山寨を後にした呂布は、高順らと共に各地を転々としながら、辛い逃亡生活を送っていた。それは、山野に潜んで警戒をしながら一夜を過ごし、手持ちの水や食料が無くなると、雨水を集めて喉の渴きを癒し、草木を食べて飢えを凌ぐという過酷極まりないものであった。

「はたして、どこへ参ればよいのやら…」

途方に暮れていた呂布は、力無くため息をこぼした。と、その時、前方を歩く一人の浪人を目の当たりにし、思わず息を飲んだのであった。

「むづ…。あれは、まさか陳宮…」

呂布は、ふいに張？の世話になっていた頃に出会った知患者のことを思い出したのだった。

「陳宮！」

呂布は、大声で彼の名を呼んだ。すると、その声に気付いた陳宮は、声のする方へ振り向き、思わず目を丸くしたのだった。

「おお…。そこにおわすのは、呂布どものではござらんか」

呂布たちの存在に気付いた陳宮は、急いで駆け寄ってきた。

「無事であったか…。張？軍が曹操に打ち負かされたと聞いた時は、もうこの世の人でないと思うていたが…」

「なんのこれしき…。陳宮には、曹操を倒す使命がございます。その使命を果たさずして、死ぬことはできません」

陳宮は、そう言って、大きく笑った。

「しかし、ここで会ったのも何かの縁だ。これからは、我らと共に行動をしないか？」

呂布の誘いに、陳宮は小さく頷いた。

「いいでしょう…。呂布どののお力になれるのなら、願ったり叶ったりです。共に曹操打倒のため、力を合わせましょう」

陳宮は、そう言って、握手を求めた。

「ありがとう。陳宮…。お主のような知恵者が力を貸してくれれば、我らは千人力だ」

呂布は、そう言って陳宮の手を掴んだのだった。と、その時、この放浪の旅につき従っていた徐晃と名乗る男が、おもむろに声を発した。

「しかし、殿…。我らは、何の力を持たない流浪の身…。陳宮どのが加わってくれることは心強いです、これから先はどうするおつもりですか？」

彼は、今は亡き楊奉の部下だった男で、彼に対して呂布と共に獻帝の長安脱出の手助けをするよう強く進言したほどの豪の者であった。さらに、彼は、大斧を手足のごとく扱う達人でもあり、先の曹操との一戦では、押し寄せて来る敵兵を鬼神のごとく蹴散らすなど目覚ましい働きを見せ、仲間内から多大な信頼を勝ち得ていたのだった。

「うむ…。どうするべきか…」

呂布が頭をかきながら顔をしかめていると、おもむろに陳宮はこう提言したのだった。

「徐州へ向かわれては、どうでしょうか…。最近、太守の陶謙は死去しましたが、その太守の任は息子たちに譲らず、劉備と言う人望の厚い御仁に託したとのことでございます。劉備どのは、とてもお

優しく仁徳のある方なので、我々を受け入れてくれるかもしれない」

徐州は、？州より南東に位置する長江以北の都市で、さらに東へ向かうと東シナ海に行き当たる。徐州は、四方の丘陵地に囲まれた要害で、春秋戦国時代では楚の項羽の拠点として有名である。

「劉備か…。反董卓連合軍との戦いの中で出会って以来だな…」

呂布は、すぐにその時の状況を振り返った。

「ふむ…。果たして、そう簡単に受け入れてくるものだろうか…」

呂布は、そう言って腕組みをした。すると、陳宮は、おもむろに口を開いた。

「昔は敵同士で戦い合った縁ではありませんが、あの時はあくまで董卓を討つために行動したことですから、呂布どのに恨みがあるわけではございませんまい」

その陳宮の発言を聞いた呂布は、両手で両膝を叩いた。

「確かに、そうだな…。よし…」

こうして、呂布は、劉備を頼るため、徐州へ向かうことを決めたのであった。

第24話

徐州にたどり着いた呂布たちは、新しく太守となった劉備に面会した。そして、劉備は流浪の身で苦勞をしている呂布たちの話を聞いて痛く心を打たれたのだった。

「天下の豪傑が、ここまでないがしろにされているのはいたく不憫である。我らと共に後漢の再興のため、力を合わせようではないか」「おお……。ありがとうございます。劉備どの……」
こうして、呂布は劉備の庇護を受けることになったのであった。

この情報はすぐに曹操のもとへと伝わった。

「何っ……。徐州の劉備のもとに呂布と陳宮が加わっただと！」

曹操は、大きく見開いて唸った。

「むむ……。徐州は、我が戦略上で重要な要衝……。天下統一を目指すためには、徐州の攻略は最重要課題なのに、ただでさえ厄介な劉備軍に呂布たちが加わるとは……」

曹操は、思わず頭を抱えた。

「陳宮らに邪魔をされなければ、前の徐州攻略戦で勝負はついておりましたが……」

荀？は、そう言っつて、ため息をついた。

「おのれ、呂布に陳宮……。どこまでも、余の野望を邪魔しおつて……。ならば、今度と言う今度は、絶対に息の根を止めてやるぞ！」

曹操が怒りに任せて、そう発すると、荀？はすぐさまそれを制した。「それはなりません……。自ら二虎競食の計にはまるようなものですよ」

荀？の諫言を聞いて、すぐに曹操は冷静さを取り戻した。

「余と劉備が死闘を演じ、双方ともボロボロとなったところを、隣国の有力諸侯である袁紹や袁術らに狙われると申すか……」

曹操は、あご髭をなでながら、ため息をついた。現状では、各地で

有力な群雄が割拠し、互いに覇権を狙ってしのぎを削る様相を呈していたため、如何に曹操軍が強くても決して油断はできない状態だった。特に、袁紹は河北四州を支配するほどの大勢力を持ち、彼の勢力をはるかに凌いでいたのであった。

「しかし、このまま放置していれば、次第に奴らは力をつけ、もつと厄介なことになる。何か、良い策はないか？」

曹操は、顔をしかめながら、荀？にそう問いかけた。すると、荀？は、眉間に指を押し立てながら、こう答えたのだった。

「ならば、駆虎吞狼の計を仕掛けてみては、如何でしょうか？」

ちなみに、この計略は、虎（君主）が用事を済ませようと縄張りを留守にしている間に、そこにある餌を飢えた狼（臣下）に狙わせると言う、いわば野心を持つ敵国の臣下に反乱を起こさせる作戦であった。

「ほう…。首尾は、どのようにする？」

曹操の目がキラリと光った。

「陛下より、劉備へ世間ではあまり評判の良くない袁術軍に対する討伐令を発して頂くのです。おそらく、忠義者の劉備のことですから、陛下の命令に従って袁術軍討伐に乗り出すことでしょう。その際について、劉備を快く思っていない者たちに反乱を起こさせ、徐州を彼らに乗っ取らせては、どうでしょうか？」

荀？の考えに、曹操は首をひねらせた。

「呂布が劉備を快く思っていないと申すのか？」

「いいえ…。呂布は、劉備に背かないでしょう」

荀？は、そう述べて話を続けた。

「それがしの調べでは、陶謙の誘いで徐州に招かれた劉備は新参者なので、旧臣たちにねたまれているそうです。その新参者が、彼の鼻屑で太守の任を継いだのですから、その憎しみは相当なものになっているとのこと…。さらに、劉備は徐州では異端児扱いされている陳登を重用しているため、水面下ではいつ不満が爆発してもおかしくない状態となっております」

「むむ…。舞台裏では、何が起こっているのか、わからないものよのう」

話を聞きながら頷く曹操を見ながら、荀？はさらに続けた。

「そして、徐州の民は、陶謙が太守の時代より袁術とよしみを結んで交流をしております。劉備が袁術軍を攻めると言えば、旧臣たちはおろか民衆たちまで黙っておりますまい…」

その策を聞き終えた曹操は、思わず大きく笑った。

「なるほど…。劉備と呂布たち厄介者をまとめて徐州から追い払ってやろうと言うことだな。これは、傑作…」

曹操は、そう言うのと、すぐに表情を引き締めて、こう続けた。

「よし…。すぐに、駆虎吞狼の計を実行せよ！」

「かしこまりました」

荀？は、深くお辞儀をして、その場を立ち去っていったのであった。

そして、数日後…。

劉備のもとに獻帝より袁術軍討伐の勅令が届いた。

「むう…。帝のご命令であれば、従わなくてはなるまい。すぐに、

袁術軍を倒すために、戦の準備をするぞ」

すると、劉備の意見を聞いた徐州の旧臣の筆頭である曹豹は、尋常でない剣幕で猛反発をしたのだった。

「何を言われますか。この徐州は、昔から袁術とよしみを結び、友好関係を築いておるのですぞ！」

「しかし、帝の勅令を受けた以上、断るわけにはいくまい…」

劉備は、そう言うって、眉をひそめた。そのやりとりを見た陳宮は、眼光を鋭くして、おもむろに口を開いたのだった。

「劉備どの…。徐州の民は、袁術との戦を快く思いますまい。戦を起こしては、人心が離れてしましましょう。それに、この勅令は何か策略じみたものを感じます。恐らく、曹操の仕業ではないかと推測しますが…」

陳宮の諫言を聞いた劉備は、黙って頷いたが、同時に大きくため息

をついたのだった。と、その時、陳宮の横にいた呂布は、彼をフオローしようと、こう続けた。

「拙者も陳宮の申す通りだと思えます。陛下は曹操に騙されて、このような勅令を出してしまったのだと考えます」

だが、劉備は、その意見に対して、首を縦に振らなかつた。

「陛下の意向に背けば、我らは逆賊の汚名を着ることになる…」
頑なに反対する劉備に対して、呂布はこう意見を返した。

「一時的には、そうなるかも知れませんが、拙者は長年に渡って陛下のお傍にいたので、陛下のことはよく存じております。陛下は間違っていると気づかれたら、真摯に受け止めてきちんと訂正をする誠実なお方です。勅令を断つても、後でその疑念は晴れると思えます」

呂布がそう言い終わると、ふいに陳登が発言を始めた。

「それがしが思うに、この乱世で生き残るためには、誰かと手を組まなければならぬと考えます。袁術と曹操のどちらと手を組んだ方がよいかと考えると、それがしは曹操と手を組むべきだと思えます」

「何故でござるか？」

曹操を敵視する陳宮は、急に声を荒げた。

「最近の袁術は自分が天下を取ろうと野心を抱き、曹操軍と対抗するために、領民に厳しい賦役や重税をかけて軍備の充実を図ろうとしております。その所業に対して、領民は怨嗟の声をあげ、袁術を非難しております。このような自己中心的で民衆のことを考えない野心家は、大義のもとに誅するべきだと考えます」

陳登の意見を聞いて、陳宮はすぐに反論した。

「曹操こそ、稀代の野心家でござろう。陳登どのは、曹操の本質が見えぬのか？」

陳宮の反論を聞いた陳登は、怯むことなく発言した。

「袁術よりは、ましだと考えます。曹操は、確かに冷酷な一面を持つかも知れませんが、国の運営においては、間違つたことはしてお

りません」

こうして、徐州の臣たちの論戦は、次第に白熱していった。その激化する中で、劉備はおもむろに声を上げた。

「皆の者…。賛否両論はあるが、わしは素直に勅令を受けることにしようと思う。大義のもと悪臣・袁術を倒し、袁術軍の傘下にいる領民を開放することが大切であろうと考える」

結局、劉備は反対派を押し切って、袁術軍の討伐へ乗り出すことにしたのであった。

その夜、徐州の旧臣たちは、侍大将である曹豹の屋敷に集まっていた。

「まったく…。何ゆえ、陶謙様はあんな新参者を太守にしたのじゃ。御息たちが、辞退するのであれば、最古参で侍大将であるこのわしが、太守になるべきではないのか！」

曹豹は、酔っぱらった勢いで、声を張り上げた。

「まったく、その通りでござりますな」

徐州の旧臣の一人である許耽は、そう言って大きく頷いた。

「奴が太守になった途端、我々は冷や飯食いになってしまった。しかも、あのアホの陳登ばかりを重用する始末…。たまったものではない…」

曹豹の発言に、許耽はこう付け加えた。

「それに、昔より親交のある袁術どのと戦えと言っている。もはや、狂気の沙汰ですな」

そして、曹豹たちは、さらに酒をあおって、途切れることなく劉備への罵詈雑言を並べ立てたのだった。

「何とかして、奴を追い出す方法はないかのう。奴さえいなければ、徐州は我々の意のままになるのにならう」

と、その時、曹豹は何かを思いついた。

「そうじゃ…。呂布どのたちは、我らと同じ意見じゃったのう。ならば、劉備が兵士たちを連れて出ていった際に、彼らと話をして城

を乗っ取ってやるか……」

それを聞いた許耽は、ポンと手を叩いた。

「さすが、曹豹様……。相変わらず、抜け目がないですね」
曹豹たちは、そう言って、ニヤリと笑ったのだった。

第25話

戦の準備を完了した劉備は、勅令である袁術軍討伐を実行するべく、自らが総大将となり、参謀として義弟の関羽を据え置き、さらに大斧の使い手である徐晃を従えて、徐州を発つていったのであった。徐州へ来て以来、何の働きもない呂布たちは、劉備に対して誠意を見せるため、彼を起用して従わせたのであった。

「くそっ…。なんで、こんな大事な戦いで、俺が居残りをさせられないといけないんだ」

張飛は、愚痴を言いながら城内をのっしのっしと歩いていた。劉備は、義弟の張飛も一緒に連れて行きたかったのだが、旧臣派の動向に疑念を抱いていたので、謀反を未然に防ぐために、あえて彼を徐州の守りにつけたのであった。

「おお…。そこにおられるのは、張飛どのではないか…」

張飛の姿を見つけた呂布は、大きく笑いながら彼を呼び止めたのだ。つた。

「けっ…。お前か…」

張飛は、眉間にしわを寄せて呂布を睨みつけた。

「浮かない顔をして、どうなされた？」

「巨悪を成敗する大事な戦いから外されたんだ。面白いわけがなからう！」

呂布の問いかけに、張飛はさらに不快な表情をした。

「劉備どのは、お主を見込んで徐州の守りを任せただ。逆に、光栄なことだと思っけどな…」

その呂布の意見に、張飛はきつと睨んだ。

「調子に乗るなよ。言っておくが、俺はお前を認めたくはないからな。元々は、俺たちは敵同士だったと言っことを忘れるなよ」張飛の言葉に、呂布は笑いながら、こう返した。

「ははは…。それは、もう昔の話ではないか。今は、味方同士でこ

ざる」

「勝手に味方だとか抜かすな。不愉快極まりないぜ！」

張飛は、そう怒鳴って、さっさと歩いていってしまったのだった。

「まったく…。とことん武骨な野郎だぜ」

呂布は、顎をしゃくりながら、ボソリと口にしたのであった。

その夜、張飛は異常がないかを確認するため、城の見廻りをしていった。と、その中で、ある城兵が、張飛に声をかけて来たのだった。

「張飛様…。今日は、一段と冷え込みますね。こんな寒い日は、酒でも飲んで温まりたいものですな」

城兵の発言を聞いた張飛は、ふいに頭をボリボリとかいた。

「そうだな…。この寒い中をずっと立っているのは、かわいそうな話だ」

張飛は、小さく頷いてから続けて言った。

「よし、わかった。景気づけに飲んでもいいぞ。ただし、ほどほどにしとけよ…」

「やった…。さすが、話のわかるお方だ…」

その城兵は、すぐに他の城兵たちへ飲酒の許可を頂いたことを告げた。そして、酒の入った大きな瓶を運び出して、周りの者に配り始めたのだった。

「これで、士気も上がるってものだ。そう考えると、俺もなかなかの気配り上手だな…」

普段から「武骨者」だとか、「KY」だとか言われている張飛は、その自分が発した言葉に反応し、思わず吹き出したのだった。と、その時、城兵の一人が張飛に近寄り、こう誘って来たのであった。

「張飛様も、一杯どうです？」

「そうだな。俺も少し頂くか…」

城兵の言葉に、張飛は満面の笑みを見せた。そして、彼は、並々とつがれた酒を一気に飲み干したのだった。

「嗚呼、うまい…。胃に浸みわたるぜ…」

張飛の豪快な飲みっぷりに、部下たちは思わず歓声を上げた。

「さすが、天下の豪傑・張飛様だ…。さあ、どんどん飲んでください」

「おお…。すまん」

その言葉に、張飛はさらに上機嫌となった。こうして、無類の酒好きである彼は歯止めが利かなくなり、次から次へと酒を飲み干していったのであった。そして、とうとう酔いつぶれてしまい、その場でいびきをかきながら眠ってしまったのであった。と、そのありさまを見ていた曹豹と許耽は、互いに見合わせてニヤリと笑った。

「酔いつぶれて寝てしまうわい。相変わらず、間抜けな奴よ」

「絶好のチャンスですな。すぐに、呂布どのの屋敷へ参りましょう」
そして、曹豹と許耽は、低く笑いながら、呂布の屋敷へ向かったのだった。

そのような大変な事態になっているとは露知らず、寒空の中で張飛は気持ち良さそうに、大の字になって眠っていた。

「うーん。むにゃ、むにゃ…」

と、そこへ、眠っている張飛に何者かが近づいて来たのだった。

「まったく、なんて無防備な…。ほんと、酒癖の悪い男だぜ」

呂布は、顔をしかめながら言うと、すぐに張飛を叩き起こした。すると、張飛は、飛び起きて辺りをキョロキョロと見渡したのだった。「な、何だ…。何か起こったのか！」

その様子を見た呂布は、深くため息をついた。

「何だではない。こんなところで寝ていたら、風邪をひくぞ」

呂布は、そう言うと、張飛の目の前に二つの首を勢いよく置いたのだった。

「うっ…。その首は、曹豹と許耽…」

それを見た張飛は、すぐに表情を強張らせた。

「この二人は、お前が眠りこけている間に反乱を起こして、城を乗っ取ろうと考えていた。ゆえに、処罰したわけだ」

呂布の話聞いて、張飛はしばらくぼかんと口を開けていたが、すぐにはつと我に帰った。

「なんと言ふことだ。俺は徐州の守りと言ふ大任を忘れて酔いつぶれ、もう少しで寝首をかかれるところだったのか…」

状況を理解した張飛は、思わず頭を抱え、後悔の念にかられたのであった。

「クーデターが起き、城を取られれば、劉備どのも帰る場所を失う…。もう少し、しっかりせんといかんぞ」

「す、すまん…」

じつと見据えて来る呂布に対して、張飛は、思わず頭を垂れたのだった。

「しかし、こつ寒くちゃやつとれんのもわかるぜ。後は、俺が見廻りをやるから、お前はもう少し酒でも飲んで、屋敷に帰つて寝ろよ」

呂布は、そう言つと、酒杯を張飛に渡した。すると、張飛は、すぐに顔を青くして、こつ答えた。

「いや…。俺は、もう飲まねえよ。これ以上、失態をさらしたくないからな」

張飛は、頭をかきながら、酒杯を呂布に返した。そして、苦笑いしながら、こつ続けた。

「それよりも、お前に注いでやるよ。これから、寒い中を俺の代わりに見廻りしてくれるんだからさ」

張飛は、そう言つて、その酒杯に酒を並々と注いだのだった。

「そつか…。ありがたく頂くぞ」

呂布は、そう言つて、一気に酒杯をあけた。すると、その飲みつぶりを見た張飛は、思わず表情を崩した。

「おお…。お主も、なかなかいける口だな。ならば、もう一杯いつとけ…」

張飛は、笑顔になつて、さらに酒を注いだのだった。こつして、呂布と張飛は、次第に打ち解けていったのであった。

「ほんとに、すまなかつたな…。俺は、お前のことを誤解していた

ぜ

「構わないさ……。誤解がとけて嬉しい限りだ」

その張飛の言葉を聞いた呂布は、真摯な態度で、そう答えた。

「これからは、仲良くしようぜ……」

「ああ……。共に劉備どのを支えていこう」

呂布と張飛は、互いに見つめ合ってから、大きく笑ったのだった。

「我は、終生の友を得たり……」

こうして、張飛は、上機嫌で自分の屋敷へ戻っていったのであった。

第26話

それから数日後、徐州に悲報が届いたのだった。

「なんと…。兄者たちの軍勢が、壊滅しただと！」

その報告に、徐州の臣たちは大きく動揺した。

「兄者は…。兄者たちは、無事なのか？」

張飛は、真っ先に劉備と関羽の安否を確認した。しかし、問者が言うには、行方はわからないとのことであった。

「まずいことになったな。これは、すぐに軍勢を率いて搜索に出た方がいいかもしれん」

「そうだな。よし…」

こうして、呂布と張飛は、徐州に高順らとわずかな手勢を残して、劉備の搜索に向かったのであった。

「しかし、まさかお前と一緒に行動することになるとは、夢にも思わなかったぞ」

行軍中、張飛は呂布に対して、そう皮肉を言った。

「それは、こっちのセリフだ。それよりも、今は一刻も早く劉備どろを見つけることが肝要だ。先を急ごう…」

呂布の発言に、張飛は大きく頷いた。

「合点だ…」

呂布と張飛が、そう無駄話をしながら行軍を続けていると、徐々に目の前から袁術軍の姿が見えて来たのだった。

「こっちに来るぞ…」

呂布は、そう言って、目を凝らした。

「奴らめ…。兄者たちの軍勢を壊滅させたんで、それを機に徐州を乗っ取るつと考えてやがるな」

張飛は、歯ぎしりをして袁術軍を睨みつけた。

「ここは、迎え討った方がよいかもしれんな…」

「ああ…。逆に、痛い目に遭わせてやるうぜ」

呂布と張飛は、互いに見合わせ、全軍に号令を發した。

「者ども…。兄者たちの仇を討つぞ！」

張飛の号令のもと、徐州軍は袁術軍へ接近していったのだった。

そして、両軍は激突した…。

「おら、おら、おらあ！」

張飛は、声を張り上げながら、袁術軍の兵士たちを次から次へと斬り裂いていった。

「やるな、張飛…。俺も負けんぞ」

呂布も張飛に続いて、徹底的に敵兵を斬り刻んだのだった。

「ぬう…。あの二人は、何者だ…。あいつらのせいで、我が兵士たちが恐れおののいて、戦場を逃げ惑っているではないか！」

袁術軍の総司令官である紀霊將軍は、そう言つて、怒りを露わにした。

「ならば、こちらも武勇の士を投入するまでだ。いでよ、我が勇者たち！」

紀霊は、そう言つて、陳紀、李豊、梁剛、樂就らの8人の武芸者を呼び寄せ、呂布と張飛のコンビへ向かわせたのだった。

「向こうは8人で来たか、ならば一人で4人ずつ相手つてことだな…。それとも、俺がもつと相手をしてやった方がいいか？」

張飛は、向かつて来る敵將を見て、再び皮肉を言った。

「みくびるなよ…。お前の方こそ、余裕をぶっこいてやられるんじゃないぞ」

呂布がそう返すと、張飛はニヤリと笑った。

「嗚呼、面倒くせえ。いちいち勘定をするなんざ…。こうなったら、早い者勝ちだぜ！」

「言いだろ。その代り、恨みつこなしだ！」

呂布と張飛は、そう言い放つと、一斉に前へと駆け出したのだった。すると、敵將たちは、2つのグループに分かれて、呂布たちに立ち

向かって来たのであった。

「4人がかりで、俺を倒そうってか…。甘いぜ」

呂布は、そう言って、陳紀と李豊らを、一気に真つ二つにした。

「おお、まとめていったか…。ならば、俺も同じようにやってやるぜ！」

張飛も負けまいと、梁剛と楽就ら4人の将を、同様に真つ二つにしたのだった。

「袁術軍とは、この程度か…。あくびが出るぞ」

「弱過ぎて、痛快極まりないぜ！」

呂布と張飛は、そう言って大笑いをした。

「わははははは！」

「がははははは！」

袁術軍の強者たちをあっけなく倒した呂布と張飛は、武器を振り回して縦横無尽に駆け回り、敵兵と言う敵兵を木っ端微塵にしたのだった。

「と、とてもかなわん…。ひ、退け！」

紀霊は、たまらず退却の命令を出し、ほうほうのていで逃げ失せたのであった。

その後、呂布と張飛は、必死に搜索をしたが、劉備たちを見つけることはできず、一旦徐州の城へ引き返したのだった。そして、彼らは斥候をあちこちに放って、引き続き搜索を開始したのであった。

「兄者…。どうか、無事であつてくれ…」

張飛は、落ち着きのない様子で、大広間をうろつろした。

「落ち着け…。あとは、我々の優秀な斥候部隊が探し出してくれるはずだ。それに、劉備どのはその簡単に死んでしまうような漢ではない。必ず、徐州へ戻って来る…」

呂布は、そう言って、彼を励まし続けたのであった。

それから数日後のこと…。

徐州の城に、曹操軍の使者が訪れたのであった。そして、彼の話を聞いた張飛は、思わず仰天をしたのだった。

「なんと…。兄者たちは、曹操のもとにいるのか！」

その経緯は、次のようになる…。

袁術軍と激突をした劉備軍は、徹底的に打ち負かされ、瀕死の状態となった。と、そこへ、曹操軍がひよっこり現れ、こともあるところか、劉備軍の加勢をしたのであった。それに驚いた彼らは、自軍の消耗を避けるため、すみやかに戦場から引き揚げていったのだった。無論、この戦の仕掛け人である曹操が、両軍の動向を探るべく密偵を放ち、機に応じて動く体制を整えていたことは言うまでもない。そして、曹操軍に助けられた劉備たちは、曹操の招待を受け、彼の軍門に降ったのであった。

「このままでは、呂布どのに申し訳が立たん…」

その時、劉備に同行をしていた徐晃は、そう発して自決を試みようとした。だが、曹操は、才ある者を大切にし、適材適所にて人材を最大限に活用する優れた指導者である。徐晃の類まれなる武勇と冷静沈着な知性を認めていた彼は、献帝を守り、後漢を再興する道理を突き付けて思いとどまるよう説得したのであった。そして、曹操の説得に得心をした徐晃は、無念を感じながらも彼の傘下に加わることを決めたのだった。

「何で、兄者は曹操に降っちまったんだよ…」

張飛は、頭を抱えて嘆いた。劉備は、新参者の自分が徐州の旧臣たちから疎まれてることを察知していた。さらに、臣下の反対を押し切って戦争を決意したにもかかわらず惨敗を喫する結果となったのだ。当然、彼は面目丸つぶれとなり、帰るに帰れない状態となつてしまったのであった。

「俺はダメな親分だ…。君主たる者が、かように不甲斐なくてどうする…」

劉備にとつて、太守として政治を任されることは、徐州が初めてである。任された当初は、目を輝かせて精力的に行おうとした。だが、

現実には想像以上に厳しく、思うようにまつりごとを行なえない自分に対して、次第に劣等感を抱くようになったのだった。

「それに比べて、曹操は獻帝から信賴され、中央国家のまつりごとを着実にを行い、人心を掌握している…。彼の傍で、その政治手腕を見て学ぶ、絶好のチャンスかもしれぬ…」

劉備は、曹操の力量を高く評価していた。それ故に、向上心を持って彼に近づこうと考えたのであった。

一方、曹操は、劉備ら有力者たちを徐州の地から切り離すことによつて、徐州の攻略を容易にさせる狙いがあった。その結果、二人の利害が合致したため、劉備の曹操軍への投降が実現してしまったのである。

「劉備どのが、曹操の軍門に降つた…」

呂布は、強力な味方を失つたことにより、気が動転しそうになつたと、その時、張飛は、途端に真顔となり、こつ発したのだつた。

「むむ…。ならば、こつしちやいらねえ。早く、兄者のもとに参らねば…」

その張飛の言葉を聞いた呂布は、思わず彼を制した。

「待て…。それは、お前も曹操軍に降ると言つことか？」

呂布の問いかけに、張飛は眉をひそめた。

「仕方がないだろ…。俺と兄者たちは、一心同体のようなものだ。

兄者のもとへ参らねば、裏切り者のレッテルを貼られることになる

…」

張飛の答えに、呂布は眉間にしわを寄せた。

「お前は、それで満足なのか…」

「満足な訳はない…。俺だって、曹操はあんまり好きじゃないさ。

だが、兄者がそう決めたのだから、文句はない…」

それを聞いて、呂布は大きくため息をついた。

「わかつた…。お前たちの固い絆は、俺もよくわかつている。一刻も早く、劉備どのもとへ行き、彼を安心させて来い」

呂布の言葉に、張飛は思わず涙ぐんだ。

「すまねえな…。折角、お前とはこんなに仲良くなれたのにな…」
「謝ることはない。桃園の誓いで結束したお前らは、敵味方に分かれて戦ってはならないさ。それに、それを遵守することこそ、漢つてものだろう」

呂布は、そう言って、張飛の肩を叩いたのだった。ちなみに、桃園の誓いとは、劉備、関羽、張飛の3人が、全国にはびこる黄巾賊を鎮圧するべく挙兵した際に交わした義兄弟の契りである。

「われら、生まれたときは違えども、願わくば同年同月同日に死な
ん」

その時、彼らは、このように誓い合い、血よりも濃い結束をしたのであった。

翌日、呂布は、徐州を発とうとする張飛を城門まで付き添ったのだった。

「見送りは、ここまででいいぜ。今まで、色々ありがとうな…」

張飛は、そう言うと、ふいに呂布へ握手を求めた。

「道中は、くれぐれも気を付けるんだぞ」

それに対して、呂布は、笑顔でそれに応えたのだった。すると、張飛は、穏やかな顔をして、こう続けたのであった。

「できれば、お前とは戦いたくないな…」

「それは、こっちも同じことだ」

彼らは、そう言って、互いに見合った。

「しかし、今は戦乱の世だ。何が起るか、わかったもんじゃねえ…」

「ふっ…。その時は、正々堂々と戦おうじゃないか。己のプライドを賭けてな…」

すると、彼らは、少し間をおいてから豪快に笑ったのだった。彼らは、分かり合えた親友同士であると共に武人であったからである。

「じゃあ、行って来るぜ。達者でな…」

張飛は、掛け声と共に馬へまたがり、その腹を蹴った。そして、未

練を断ち切るかのように、疾風の如く立ち去っていったのであった。

「お前こそ、しっかりやれよ！」

呂布は、そう大声を発して、大きく手を振ったのだった。

第27話

張飛が劉備と再会を果たしてから、数日が経ったある日のこと…。曹操は、悲願である徐州攻略に向けて、荀？と相談をしたのだった。「徐州より劉備を追い出すことはできたが、呂布と陳宮は残ってしまったようだな」

曹操の話を受けて、荀？は言葉を発した。

「はい…。情報によれば、徐州の旧臣たちの後押しもあって、呂布が新しい太守になったようです」

荀？は、そう言っつて、軽く頭を下げた。

「まあ、よい…。劉備と呂布の協力体制が崩れ、呂布一人となったのであれば、駆虎吞狼の計も実施した甲斐があったと言うものだな」曹操は、そう言っつと高らかに笑った。

「多少の計算違いはありましたが、徐州攻略へ一歩近づいたと思われぬす」

荀？が、そう含みのある言動をすると、曹操はすぐに反応した。

「ほう…。それは、まだ徐州攻略を始めるには、早いと言いたいか？」

曹操は、荀？をチラッと見た。

「今回の一件で、短気な袁術は黙っておりますまい。必ずや復讐心と野心を剥き出しにして、徐州の制圧を企むことでしょう。それを利用して、彼らに潰し合いをさせ、弱ったところを我が軍が介入してはどうかと考えます」

「ふむ…。なるほど…」

曹操は、ニヤリと笑った。

「荀？よ…。お主の狙いは、始めから呂布だけでなく袁術も入っつておっつたのだな」

曹操の言葉に、荀？は表情を引き締めて口を開いた。

「我々の真の大敵は北方の雄・袁紹でございます。呂布や袁術ごと

きお山の大将に時間を割いている暇はありませんぬ」

荀？の話を聞いて曹操は、小さく頷いた。

「そうであったな…。ならば、早急に要所へ密偵を張り巡らせ、機を見て動けるよう体制を整えておくでしょう」

曹操は、そう言つて、あご鬚をなでた。すると、荀？は表情を崩さずに、こう続けたのであった。

「しかし、呂布は天下に鳴り響く豪傑…。そう容易く倒すことはできないと思われます。ゆえに、打てる手はすべて打っておく必要があります」

「ほう…。どんな手がある？」

曹操の問いかけに対して、荀？はこう述べた。

「徐州には、陳登と言つ異端児がおります。以前は、劉備の参謀を務めておりましたが、呂布が太守となつて徐州の旧臣たちを重用し始めてからは、政治の舞台から疎遠となつております。内心は、面白くないことでしょう」

「なるほど…。その陳登に内応させるよう仕向けるのだな」

曹操は、小さく頷いた。

「御意にございます…。我らが攻め入つた際に陳登が城の守将となるよう巧みに根回し、呂布たちが城を出て戦っている時に城を乗っ取るよう密約を交わしてはどうかと考えております」

「面白い…。すぐに手配いたせ」

曹操がそう言つと、荀？はそれを制して話を続けた。

「殿…。実は、もう一手打ちたいと考えております」

「それは、どのようなものだ？」

その問いかけに対して、荀？は淡々と述べた。

「埋伏の毒を仕掛けたいと思ひます」

それを聞いた曹操は、眉をひそめて、荀？を見た。

「呂布軍内に我が配下を忍ばせて、隙をついて奴の寝首をかこうと言つのだな」

「さすが、ご察しがよろしいですね…」

荀？は、小さく頷いた。

「一体、誰を忍ばせようと考えておるのだ？」

曹操がそう聞くと、荀？は彼の耳元でスパイとなる者の名をあげた。「なるほど…。我が軍中において無名であるが、腕は相当たつ者だ。うまくいきそうだな」

曹操は、そう言いながら、低く笑ったのだった。

それから間もなくして、呂布のもとに3人の剣客が現れたのだった。「ほう…。3人の剣客が、我が軍に士官を求めて来たのだと？」

呂布は、それを聞いて大いに喜んだ。

「よし、すぐに会おう」

呂布は、上機嫌で客間で待たせている3人の剣客と面会をした。

「お主たちか…。我が軍の士官を希望する者たちは？」

呂布の言葉を受けて、剣客の一人が声を発した。

「はい…。呂布様の武勇に憧れて、馳せ参じました。どうか、末席に加えて頂きたく存じます」

剣客の一人である候成は、そう言って深く頭を下げた。

「名をなんと申す？」

呂布の問いかけに、3人の剣客たちは1人ずつ声をあげた。

「それがしは、候成と申します」

「俺は、魏続と申します」

「拙者は、宋憲と申します」

3人の剣客が、そう名前を言うと、呂布は穏やかな顔をして笑った。「わかった…。では、我が軍中にて、しっかり働いてくれ。期待しておるぞ」

「ありがたき幸せ…」

こうして、候成、魏続、宋憲と言う3人の剣客が、新たに呂布軍へ加わったのであった。

その頃、寿春に本拠地をおく袁術は、呂布軍への雪辱戦を企ててい

た。ちなみに寿春は、徐州より南方に位置する土地で古来より南北交通の要衝として栄え、北は淮河が流れ南は大別山脈が連なる場所である。

「紀霊よ…。徐州軍は、昔からのよしみを無視して我が領内へ攻め込んで来た卑劣極まりない者たちだ。向こうに野心があるのであれば、我が軍も対抗して、あべこべに乗っ取るべきだと思うが、お前は どう思う？」

袁術の話聞いた紀霊は、大きく頷いて答えた。

「ごもつともでございます。先の戦いでは、とつさの判断で奴らの本拠地を急襲しようが無理をしたため、敗北を喫しました。だが、確実に順を追って攻略するのであれば、我が軍が徐州軍に負けるはずはございません。徐州攻略を実施するべきでしょう」

紀霊の発言に、袁術は表情を引き締めた。

「よし…。余の腹は決まった。雪辱戦も兼ねて徐州攻略を決行しよう」

袁術がそう発言した時、二人の話の間に孫策と名乗る若武者がふいに割って入ってきたのだった。孫策は、孫堅の長男で、彼が急死した後、袁術を頼って客将となっていたのであった。ちなみに、彼は後に呉を建国する孫権の兄であり、その礎を築く人物となる。

「袁術様…。今度の徐州攻略戦では、それがしにお命じくだされ。見事に呂布の首級をあげてみせましょう」

その言葉を聞いて、袁術は小さく頷いた。

「おお…。なんと心強い。さすが、名将・孫堅の息子じゃ」

袁術は、そう言って笑顔を見せると、さらにこう続けた。

「じゃが、今回の攻略戦では総大将を紀霊とする。お主は、副将として補佐を願いたい」

「活躍の場をいただき、感謝します」

孫策は、そう言って、お辞儀をしたのだった。

そして、数日後…。

袁術軍は総大将を紀霊、副将を孫策として、徐州攻略に向けて出兵したのであった。

「孫策よ…。今回は、まず徐州の出城である小沛を攻略する。と、言うのも、最初から全兵力を動かすと多大な戦費が必要になるからだ。そこで、徐州と小沛で兵が分散している隙について、少数の兵で出城を奪うという算段だ。そして、小沛を攻略し、足場を固めてから寿春より増援部隊を呼び、徐州を攻略する段取りとなっている。よろしいかな？」

紀霊は、成人したばかりの孫策に対して丁寧に説明をした。

「確かにおっしゃる通りですが、あまり時間をかけ過ぎては、また曹操軍に横槍を入れられるハメにはなりませんまいか？」

孫策の不安に対して、紀霊はこう切り返した。

「小沛さえ落としてしまえば、我らはそこで守りを固めて、増援部隊との挟撃で曹操軍を殲滅することはできる…。余計な心配をするな」

紀霊は、そう言って、大きく笑ったのであった。

「曹操は臨機応変の利く機敏な漢と聞く…。小沛を落とす前にやって来なければよいが…」

孫策は、そう思いながら天を仰いだのだった。

一方、小沛では？萌と言う呂布の古参の猛者が守りを固めていた。

袁術軍が領内へ攻め込んで来る報を聞いた？萌は、援軍を要請するため、すぐに部下の王楷を本拠地である徐州へ遣わしたのであった。

「紀霊に孫策か…。少数の兵力とは言え、決して侮れない相手だ」

？萌は、そう焦りを感じながら、大広間にて諸将たちと軍議を開いていた。と、その時、徐州へ使者として出向いていた王楷が急いで戻ってきたのであった。

「？萌様…。たった今、徐州より戻りました。あと少しで、張遼様と臧覇様が率いる援軍が掛けつけます！」

王楷は、まるで軍議を中断させるかのような大声でそう報告した。

「そうか…。これで、なんとかかなりそうだな…」

報告を聞いた？萌は、小さく頷いた。

「さあ、皆の者…。援軍が来るまでしっかりと守りを固めるぞ」

こうして、？萌は、諸將に激を飛ばして応戦体制に入ったのであった。

第28話

そして、小沛に到着した袁術軍は、すぐさま攻城戦を開始してきたのだった。

「ありつたけの矢をお見舞いしてやれ！」

城門の上で仁王立ちする？萌の号令を受け、小沛軍は一斉に城壁から矢を放った。その容赦ない攻撃に袁術軍は、次から次へと矢の餌食となつていった。

「怯むな…。一気に攻め落とせ！」

紀霊は大声をあげて、自軍を奮い立たせた。と、その時、ふいに紀霊のもとに斥候が現れ、何かを報告したのだった。

「何…。徐州より援軍がこちらに向かっているだと…」

紀霊は、きつと徐州の方角を見た。すると、その方角から徐々に砂煙が大きく舞い上がってきたのであった。

「よし、間に合った。我が領土を侵す不逞な輩に鉄拳をお見舞いしてやるぜ！」

「さあ、この勢いに乗って突撃だ！」

張遼と臧覇の援軍は、ためらうことなく袁術軍へ突っ込んでいった。そして、彼らは大いに暴れまわって、袁術軍を引っ掻き回したのであった。

「おのれ…。誰か、俺と勝負をしろ！」

孫策は、両軍の激しい白兵戦の中を単騎で駆けながら、大声を發した。

「威勢のいい小僧だ。俺が相手になつてやる…」

張遼は、そう言つて、孫策をめぐがけて馬を走らせていった。すると、孫策は、父親ゆずりの二刀流の構えを取つて応戦してきたのであった。

「我が名は、孫堅の子・孫策…。孫家代々に伝わる二刀流の舞いとくと味わえ！」

「相手にとって不足はない」

張遼は、孫策に近づくやいなや鋭い突きを食らわせた。

「なんの！」

孫策は、刀をクロスさせて、その攻撃を受け止めた。そして、その攻撃を払いのけると同時に片方の刀で反撃をした。

「おっと…」

張遼は、払いのけられた大刀を手前に引いて、その攻撃を受け止めた。そして、張遼と孫策の一騎打ちは、次第に激しさを増していったのであった。

その頃、臧覇はさらに深く戦場の中へ斬り込み、紀霊と死闘を繰り広げていたのであった。

「さすが、袁術軍きつての猛将・紀霊だ…。だが、お前の命運もここまでと思え！」

「ぬかせ…。山賊の大将ごときに遅れを取る俺だと思つなよ！」

臧覇と紀霊が激しく打ち合っているさまを見て、勇気づけられた？ 萌は、全身に血をたぎらせて、こう言い放つたのだった。

「皆の者…。我が援軍のがんばりを無駄にするな。我らも城を出て、大暴れしてやるぞ！」

？ 萌は、そう言つて、城門を開けさせ、自ら先陣を切つて斬り込んでいった。

「むう…。そこにいるのは、敵将・？ 萌…。この陳蘭が相手だ！」

「抜け駆けはさせんぞ…。この雷博が首級をあげてやるぜ！」

袁術軍の武将である陳蘭と雷博は、？ 萌の姿を確認すると、一斉に彼へ襲いかかったのであった。

「しゃらくさい。まとめて相手をしてやるぜ！」

？ 萌は、そう言つと、二人の敵将を相手に互角の戦いを演じたのだ。そして、呂布につき従ってきた屈強の武人たちは、鬼神のごとく立ち回り、戦の経験に乏しい敵軍を、徐々に圧倒していったのであった。

「くつつ…。城から撃つて出てきたか…。くやしいが、ここは一時引き上げた方がいいかもしれんな」

紀霊は、巧みに臧覇の攻撃をかわしながら、そう算段し、自軍に向かって引き上げの号令を發した。

「退却の合図か…。勝負は、また後日…」

孫策は、そう言つて舌打ちをし、その場から立ち去つていったのであつた。

「すばらしい青年となつたものだ。きつと、父・孫堅も天国で喜ばれていることだろう…」

張遼は、小さく笑つて、消え行く若き獅子を見つめたのであつた。

小沛城へ戻つた？萌は、援軍として来た張遼と臧覇に対して礼を述べた。

「遠路よりご苦労さまです。御仁たちが来れば、百人力ですぞ」

その言葉に、張遼は大きく笑つてから、こう答えた。

「戦いはこれからですぞ。早速、今後の打ち合せを行いましょよう」
こうして、？萌たちはすぐさま軍議を開いて、話し合いを始めた。
と、その時、一人の斥候が現れて、驚くべきことを報告したのだつた。

「何だと…。曹操軍もこの小沛へ向かつて来ているだと！」

その報告に諸將たちは、騒然となつた。

「曹操め…。我らが潰し合いをした後で、漁夫の利を得ようとの腹だな。なんと陰險な奴だ」

張遼は、そう言つて、齒軋りをした。

「しかし、曹操軍と袁術軍を同時に相手するのは、あまりにも無謀すぎる。何か手はないだろうか？」

臧覇がそう發すると、王楷は、おもむろに口を開いて、こう答えたのだつた。

「私が、袁術軍の陣営へ参り、停戦を提案しましょう。向こうとて、曹操の大軍と争つて利はありますまい…」

王楷の話聞いた？萌は、渋い顔をしながら、ため息をついた。

「それしかなさそうだな…」

そして、力なくそう発したのだった。

その翌日…。

小沛城より王楷が停戦の使者として袁術軍の陣営に向かったのだった。

「この期におよんでは、お主らも一度引き揚げてから、再起を計った方が得策だと思われませんが…。如何かな？」

王楷の話聞いて、紀霊は大きく唸った。

「むむ…。ここまで来て停戦とは…。しかし、例え小沛を取ったとしても我が軍の3倍以上の兵力を持つ曹操軍が攻めてくれば、ひとたまりもないか…」

紀霊は、無念の思いで王楷の要求を飲み、本国へ退却したのであった。

王楷の報告を受けた？萌たちは、再び軍議を開いて、対曹操軍の作戦を話し合うことにしたのだった。

「あとは、曹操軍だな。大軍ゆえ、城を盾にして攻撃を防ぐべきか…」

苦悩の表情を浮かべながら？萌がそう発した時、張遼は、真剣な眼差しでこう述べたのだった。

「この城では、あの大軍を防ぎきれずまい…。ゆえに、拙者と臧覇で曹操軍に夜襲をかけようと思うだが…」

張遼の意見を聞いた？萌は、すぐに彼をじっと見つめた。

「死ぬ気か。貴殿たち…」

？萌の問いかけに、臧覇は真剣な顔をして答えた。

「我が軍のためならば、死など恐れぬ」

それを聞いた？萌は、目を細めながら小さく頷いた。

「わかった…。貴殿たちの無事と健闘を祈るぞ」

こうして、張遼と臧霸の軍勢は、夜陰にまぎれて城外へ出ていったのであった。

一方、曹操軍は小沛城近辺の木の生い茂る丘に身を潜めるかのよう
に陣営をはっていた。そして、今回の小沛攻略軍の総大将・曹仁は、
幕舎にて曹洪ら諸将を招いて酒を酌み交わしていたのであった。

「しかし、我が従兄（曹操）はたいしたものだ。袁術がこのまま引
き下がらず徐州攻略に乗り出すことを見事に的中させたのだからな」
曹洪は、そう言って、大きく笑った。

「ふっふっふ…。両軍とも大いに潰し合うがいい…。その方が、我
らにどんどん有利に働くからな」

曹仁が続けて、そう発した時、ふいに陣中が騒がしくなった。

「何事だ…」

幕舎に駆けつけてきた兵士に尋ねると、曹仁は自軍の陣営が敵によ
って襲撃されたことを知って激高したのだった。

「うぬぬ…。こしゃくな…」

曹仁は、そう言って、きつと諸将を睨んだ。

「皆の者…。一人残らず、敵を殲滅させるぞ！」

こうして、曹仁の号令を受けた諸将は、一斉に幕舎を飛び出したの
であった。

第29話

「火矢だ…。もつと火矢を浴びせて焼き払ってしまえ！」

張遼は、大声を張り上げて弓矢隊を叱咤した。そして、容赦無く曹操軍の陣営に火矢を放ち、次から次へと幕舎を焼き払っていった。

「皆の者…。突撃だ！」

頃合いを見計らっていた臧覇はそう声を張り上げ、曹操軍へ突撃を開始したのだった。この不意打ちに、曹操軍の兵士たちは混乱を起こし、燃え盛る業火の中で右往左往と逃げ惑ったのであった。

「ええい、うろたえるな。敵を目の前にして、みつとも無い真似をするな！」

曹操軍の諸将の一人である劉岱は、兵士たちに向かって怒声を発した。すると、それを聞いた臧覇は、劉岱に対して、こう挑発をしたのだった。

「そこの将よ。ならば、貴様がかかってきな」

「下衆が…。なめるな！」

劉岱は、そう言い放って大刀を大きく振りかぶり、臧覇に襲いかかっていった。

「甘いな…」

それに対して、臧覇は、そう呟くやいなや劉岱を真つ二つに斬っておとしたのであった。一方、張遼の方でも曹操軍の将・王忠と出くわし、因縁を付けられていたのだった。

「この田舎侍が…。俺が仕留めてやるわい！」

王忠は、そうタンカを切って果敢に襲いかかったが、容易に返り討ちを食らい、冷たい肉片と化していったのであった。

「おのれ…。わしが、相手をしてやる！」

「かかって来い…。この山賊くずれが！」

味方の二将を斬られて激怒した曹仁と曹洪は、殺気を発しながら張遼と臧覇に襲いかかったのだった。

「相手にとって不足はない…」

「良将なり…。勝負だ！」

こうして、曹仁と張遼、曹洪と臧覇の一騎打ちが始まり、激しい打ち合いを繰り広げたのであった。しかし、数の上では圧倒的に多い曹操軍は、次第に混乱を収束させて規律を取り戻し、奇襲をかけて来た軍勢に対して反撃を始めたのであった。

「くう、兵力に差がありすぎる…」

「もはやここまでか…」

そして、決死の覚悟で臨んだ奇襲部隊は、周囲の炎に呑み込まれるかのように壊滅したのだった。だが、この奇襲攻撃によって、曹操軍は多くの將兵を失うばかりか、兵糧を焼き尽くされてしまったため、曹仁は一か八かの大勝負に出なければならなくなったのであった。

そして、次の日…。

曹操軍による小沛城への総攻撃が始まったのだった。

「決して、張遼たちのがんばりを無駄にしてはならん…。最後の最後まで戦いぬくぞ！」

？萌は、城門の上に立って、そう大声を発した。そして、弓矢隊を叱咤して、おびたしい矢を向かって来る曹操軍へ撃ちこんだのであった。すると、その攻撃に曹操軍の兵士たちは、思わず立ち往生をしたのだった。

「前へ進め…。さがる者は、この俺が許さん！」

曹仁は、その声を張り上げて、兵士たちに捨て身の攻撃をするよう命じたのであった。なぜなら、この城を奪わない限り、彼らは食事にありつけないからだ。だが、その無謀な命令に対して、部下の王？は大声をあげて訴えてきたのだった。

「いくらなんでも無茶です。このままでは、城を落とす前に全滅してしまいます！」

「この臆病者め！」

曹仁は、そう言い放つと、問答無用と言わんばかりに王？の首を跳ね飛ばしたのであった。

「もはや我らが生き残るためには、この城を落とす以外にない。それができなければ、死以外にないと思え！」

そう断言をすると、曹仁は、悪鬼のような顔をして兵士たちを睨みつけた。すると、兵士たちは、自らの思考回路を止め、腹をくくつたかのように前進を始めたのであった。

「小沛の攻略は、徐州平定のための布石……。我が軍の繁栄のために、死力を尽くせ！」

曹仁は、そう言い放つて、城門を破壊するための丸太部隊へ合図を送った。

「かれ！」

曹洪の号令のもと、縄でくくりつけられた丸太を持った騎馬兵らが、城門へ向かって突進をし、丸太を城門へぶつけた。

「さあ、どんどんお見舞いしてやれ！」

こうして、矢の雨の中、曹操軍の丸太が次から次へと城門を攻撃していった。すると、城門は徐々に変形をし、壊れ始めたのだった。

「城門を攻撃する丸太部隊を狙って攻撃しろ！」

？萌は、そう指示を発して、丸太を持った騎馬兵たちを射殺していった。

「丸太部隊を援護しろ。手薄なところから、城壁をよじ登れ！」

曹仁がそう発すると、曹操軍の兵士たちは矢の攻撃にも怯まず、城壁を登り始めたのだった。

「打ち落とせ……。城に一步も近づけるな！」

こうして、？萌は、残った少ない兵を必死に駆使して、城を守り抜こうとしたのであった。しかし、圧倒的な数を誇る曹操軍の前に、その努力は報われることはなかった。それは、曹操軍の丸太部隊の執念に近い攻撃によって、城門を破壊されたからである。

「曹仁……。ついに、城門が開いたぞ！」

曹洪は、拳を突き上げて、そう雄叫びをあげた。

「よし…。一気に、城内へ侵入しろ！」

曹仁の号令を受けた曹操軍は、雪崩のごとく城の中へと侵入し、次から次へと城兵を斬り刻んでいったのであった。

「殿…。申し訳ございません…」

？萌は、そう言っつて、自らの首をかき斬って城門の上から飛び降りたのであった。

その頃、呂布は曹操軍も大軍を率いて小沛に向かっていると情報を手にしたため、自ら兵を率いて小沛へ向かっていた。すると、目の前から矢傷を負った二人の武者が、必死に馬を走らせて近づいてきたのであった。

「あれは、張遼に臧覇ではないか…」

呂布は、急いで彼らを迎えた。

「恥をしのんで、戦局の報告に参りました」

臧覇は、そう言っつて、大粒の涙を流した。

「無念でございます…。曹操軍によつて小沛城は落ち、？萌は自決してしまいました」

「なんと、？萌が…。一足遅かったか…」

その報告を聞いた呂布は、無念の表情を浮かべて、天を仰いだのだった。

そして、曹操の徐州への出兵の時が訪れたのであった。

「時は満ち足り…。皆の者、出陣だ！」

入念に準備を整えた曹操軍は、曹操自らが総大将となり、呂布との戦いに終止符を打つべく、徐州に向けて出発したのだった。

「曹操は、己の野心のために陛下を利用する悪臣…。今こそ、我らの力を結集して、奴の野望を打ち砕こうではないか」

呂布は、諸將を集めて、曹操との決戦に臨むことを宣言した。

「諸將の方々…。殿の武勇が、逆賊などに負けることは決してない。あとは、各々が全力を尽くして戦い抜くことが大切ですぞ。皆で一

丸となつて、殿を盛り立て、この世に大義を示そうではないか」

呂布の言葉を受けた陳宮は、そう続けて言葉を発し、諸将の士気を高めたのであつた。すると、呂布は陳登を真摯な態度で見つめて、こう発した。

「では、陳登…。留守は、頼んだぞ」

その言葉に、陳登は、昨晚の出来事を思い出した。昨夜、呂布は、陳登の屋敷へ参り、彼に胸の内を話していたのであつた。

「陳登よ…。俺は、お主の才覚を、決して軽んじてはいない。だが、この徐州をまとめるには、有力な旧臣たちを駆使せねばならぬのだ。故に、損な役割ばかりをさせるハメとなり、申し訳なく思っている」その呂布の言葉を聞いて、陳登は言葉を詰まらせた。

「もつたいなきお言葉…。それがしのことを、そこまで買つて頂けているとは…」

曹操より内応の話を持ちかけられていた陳登は、少し心が痛んだ。

「この度、曹操が自ら兵を率いて徐州へ攻め込んで来ると報告があつた…。そこで、今回の戦では、徐州の城の守備をお主に任せようと思う。大きな戦での大事な城の守りだから、敵将の首級をあげられなくても確実に功績となる。そうすれば、徐州の旧臣たちも納得することである…」

「それがしに、この徐州の留守を守れと…」

陳登は、思わずその耳を疑つた。

「俺は、お主を信じている…。頼むぞ」

呂布は、そう言い残し、去つていったのであつた。

「私は、殿を誤解していたのか…」

陳登は、後悔をした。だが、既に曹操へ内応の意思を表明している陳登は、大きなジレンマを感じ、様々な思いが交差したのだった。

「殿の期待を取るか、男の約束を取るか…」

陳登は、思わず天を仰いだ。

「殿は純粹で、心から陛下を慕っている…。だが、この国にとって良き指導者となるだろうか…。果たして、彼はこの荒れ果てた国を

救えるのだろうか……」

陳登は、苦悩の末、ついに眼から血の涙を流した。

「私は、鬼になる。何人からも嫌われる悪鬼となる。この国を思うがゆえ、過去に例が無いほどの外道と化するのだ。閻魔よ、究極の大罰を私に与えたまえ……」

陳登は、そう覚悟したのだった。それを振り返りながら、彼はこみ上げる感情を押し殺して、静かに言葉を発した。

「承知つかまつりました……」

そう言ってお辞儀をした陳登は、胃の激痛を抑えながら、こう自分に言い聞かせた。

「この乱世をきり抜けられるのは、曹操様だ……」

こうして、彼は、その目に叛意の炎を煌々と灯したのだった。

そして、呂布は自ら兵を率いて徐州を出発したのだった。

「あそこに見えるのは、まさしく曹操軍……」

呂布の目は、次第に厳しくなっていた。

「全軍……。突撃！」

呂布は、大声で号令を発した。そして、両軍は入り乱れて、激しい剣劇となった。

「でりゃあ！」

呂布は、敵軍の矢の攻撃を方天画戟で払いのけながら、果敢に弓矢隊の中に突っ込み、容赦なく敵兵を斬り刻んでいった。

「殿に続け！」

こうして、勇ましい大将の姿に喚起された呂布軍は、己の持っている何倍もの力を発揮して、曹操軍の兵士を次から次へと斬り伏せていったのであった。と、呂布が修羅場の中で奮闘していると、前の戦で曹操軍に降った徐晃が彼の姿を見つけて、思わずこう発したのだった。

「まさに、いにしえの項羽に勝るとも劣らない武勇と言ったところだな……。本当に大した漢だ……」

徐晃は、深く息を吸い込み、それを吐き出して心を落ち着けると、眼光を鋭くさせて攻撃目標を彼に定めたのだった。ちなみに、項羽は、漢を建国した祖・劉邦の最大のライバルで、武勇においては別格の強さを誇っていた楚の国王である。

「呂布どの…。お命頂戴する！」

そして、徐晃は、他に目もくれることなく、呂布へ一撃を放つてきたのだった。

「おお…。お主は、徐晃…」

呂布は、驚きながらも素早く体をひるがえし、その大斧の一撃を受け止めたのだった。

「まさか、お前と敵味方に分かれて戦うことになるとはな…」

呂布は、そう言って、思わず苦笑いをした。

「拙者も呂布どのに刃を向けたくはないが、これもお役目…。どうか、お察しくだされ…」

「これも武家の慣わしか…。仕方あるまい！」

呂布は、その大斧を払いのけると、徐晃に向かって力一杯に方天画戟で振り下ろしたのだった。すると、徐晃は、すぐに大斧を構えなおして、それを受け止めたのだった。

「ぬっっっ…」

「くっっっ…」

呂布と徐晃は、互いの武器を押し合いながら、大きく唸り声をあげた。

「また、一段と腕を上げたようだな…」

ふいに呂布がそう発すると、徐晃はニヤリと笑った。

「呂布どのこそ、さすがの腕前でござる…」

徐晃は、そう言うと、さらに続けた。

「この前、拙者は陛下に謁見をして来たぞ」

「何、それはまことか…」

呂布は、そう口にするのと、続けてこう聞き返した。

「陛下にお変わりはなかったか？」

「ああ…。陛下は、至極達人だった。だが、陛下は呂布どのの身をとても案じておられたぞ…。そして、また会いたいと…」
徐晃の言葉に、呂布の心は揺れた。

「陛下…。それがしのような者のために…」
「そうだ…。陛下のためを考えるなら、無念なれど曹操様の軍門に降るのが賢明…」

それを聞いた呂布は、思わず当惑した。何故なら、陛下を思う気持ちが一気に強い彼にとって、それは人生をかけて貫きたいことだからだ。

「今、俺がやっていることは、陛下に逆らうことなのか…」

そして、呂布は、ふいに強烈な罪悪感にとらわれたのであった。

「一体、俺は何をしているのだ…。何のために戦っているのだ…」
呂布は、うわごとのように小さく呻いた。そして、彼の頭の中で、たくさんの思いが錯綜していったのだった。

「陛下に忠勤を尽くすことこそ、我が本懐…。しかし…」
そこまで口にした時、彼の脳裏にある一つの思いがよぎった。すると、彼は、みるみるうちに我を取り戻していったのであった。

「ここで俺が降れば、俺に付き従って来た者はどうなる…。俺を生かすために死んでいった者の魂はどうなるのだ…」

呂布は、そう言っつて、大斧を振り払った。

「俺は、陛下のために働きたかった…。それは、今も変わらない…。だが、もはや俺は俺だけの物ではないのだ。俺は、一緒に戦い抜いてきた戦友と共にあるのだ！」

その呂布の言葉を聞いて、徐晃は大斧を握り直しながら口を開いた。
「呂布どのには、真に感服しました…。ならば、残念ですが、致し方ございません」

「謝ることはない…。お互いに信念を貫き通そうぞ」

呂布は、そう言っつと、方天画戟を構え直して、再び戦闘体勢を整えた。と、その時、二人の戦いの場に向かって、ある猛者が駆けてきたのであった。

「呂布よ…。それがしと勝負だ！」

青州兵の中でも卓越した武勇を誇る鮑信は、馬の速度を上げながら、獲物に対して目を光らせたのだった。

「誰かと思えば、鮑信ではないか。面白い…。返り討ちにしてやる」

呂布は、そう言い放つと、彼の攻撃を即座に払いのけたのだった。

「やるな…。だが、今度こそ決着をつけてやる」

「ふっ…。臨むところだ」

呂布は、ニヤリと笑うと、おもむろに二人の武人との間合いを取った。

「陛下…。拙者は、どこまでいっても武人でしかありません。戦うことしか能の無い武人なのです。それ故に、武人として、武人らしく最後まで戦い抜こうと思えます…。どうか、お許しくだされ…」

呂布は、そう口にするのと、眼前に方天画戟を静かに構えたのだった。すると、その戦いの匂いを嗅ぎつけたのか、曹操軍の武勇の士である于禁、楽進、李典、管亥の4人が、続々と彼に群がって来たのであった。

「ふんばれ…。徐晃に、鮑信！」

「それがしも助太刀をするぞ！」

「その首、もらった！」

「いや、俺がもらい受ける！」

そして、4人の勇士たちは、そう発すると、容赦なく呂布へと襲いかかったのだった。

「いかん…。殿を助ける！」

「おう！」

その光景を見た張遼は、傍にいた臧覇に声をかけ、呂布に助太刀をしようとした。すると、別の方向から、新たに曹操軍の2人の猛将が迫ってきたのだった。

「援護などは、させん！」

「お前らは、俺たちが相手になってやる！」

典韋と許？は、呂布を援護しようとする二人に的を絞って、果敢に

突進してきたのだった。

「くそ……。次から次へと……」

張遼は、そう吐き捨てながら、典章の鋭い突きを受け払い、彼と激しい斬り合いを演じることになったのであった。

「さあ……。東になって、かかって来やがれ！」

一方、強敵たちに取り囲まれた呂布は、そう大声を発して、溢れんばかりに血をたぎらせたのだった。

「我らをなめるなよ！」

その于禁の声を合図に、曹操軍の6人の猛者たちは、一斉に呂布へ攻撃を仕掛けたのだった。しかし、呂布はその攻撃に怯むことなく、彼らを相手に堂々と互角の戦いを演じたのであった。

「なんと言う漢だ……。ケタが違いすぎる……」

曹操は、呂布の規格外の強さに、思わず舌を捲った。

「しかし、もう夕暮れ時……。今日の戦は、この辺りで終了となるな」曹操は、そう言って、不敵な笑みをこぼした。

「お前らは、もう徐州には戻れん……」

その頃、徐州では陳登によって、曹操軍の旗が掲げられていたのであった。

第30話

陳登の寝返りによって本拠地を取られた呂布軍は、徐州のもう一つの出城である下？へと逃げ込むことになったのだった。ちなみに、下？は、徐州の東に位置し、黄河と淮河の堆積作用によって形成された黄淮平原にあり、北に微山湖、南に駱馬湖と大きな湖に囲まれている。

「ついに、ここまで追い詰めたぞ。今度こそ、奴との決着をつける時……」

それに対して、曹操は追撃の手を緩めることなく、その小城に迫り、ぐるりと取り囲んで陣地を張り巡らしたのであった。

「ものの見事に取り囲まれましたね……」

城壁から周囲をぐるりと見渡した高順が呂布に問いかけると、彼は眉間にしわを寄せて、目を凝らしたのだった。

「曹操軍が、この城を取り囲んでいるだと……。俺には、よく見えな
いんだが？」

呂布の言葉に、高順はあつけにとられた。

「殿には、あれだけたくさんいる曹操軍が見えないのですか？」

高順は、首をかしげながら、そう言った。

「よくわからんが、最近になって随分目が悪くなったようだな……」

呂布は、そう言って、その場を立ち去ろうとした。すると、ふいに彼はつまずいて、その場に転んでしまったのだった。

「ああ……。大丈夫ですか……」

「むづ……。こんな所に窪みがあったとは……」

その呂布の様子を見た高順は、ふいに嫌な不安にかられた。

「殿……。天下の名医と誉れ高き華佗が、この下？に逗留されていると聞いております。その名医の診察を受けられてはどうですか？」

高順の意見に、呂布は小さく頷いた。

「そうだな……」

こうして、呂布は、名医・華佗を呼び寄せ、診察を受けることにしたのであった。

「華佗どの…。殿の目の具合は、如何なものでござるか？」

じつくりと診察をする華佗に、高順は声を荒げた。すると、華佗は、静かに目を閉じた後、高順に向き直って、こう発したのだった。

「残念ながら、呂布様の目は、じきに光を失うことになるでしょう…。」

華佗は、そう言って、真摯な眼で高順を見つめた。すると、その診断結果に、高順は思わず愕然としたのだった。

「失明してしまつのですか…。」

高順は、両手で華佗の肩を掴んで、声を吐き出した。

「何とか見えるようにはならないのですか？」

「呂布様のご病気は、進行性のものです。恐れながら、私の力ではどうすることもできないでしょう…。」

華佗は、申し訳なさそうに頭を下げた。

「そ、そんな…」

高順は、がっくりと膝から地面に落ちたのだった。

「高順よ…。これは、もはや天命かもしれん。天命とあれば、それに従うしかあるまい…。」

呂布は、頭を垂れて項垂れる高順に対して、そう気丈に振る舞った。

「ありがとう、華佗どの…。世話になったな」

「お力となることができず、無念です。どうかこの先、お体をご自愛されますようお願いします」

華佗は、そう言って、深くお辞儀をしてから退出していったのであった。

「高順…」

呂布は、ふいに高順の名を呼んだ。

「はっ…。何でございましょう」

高順は、涙を浮かべながら、そう答えた。

「俺の首をはねて、曹操軍に降伏せよ。俺の首一つで、皆の命が助かることだろう…」

その言葉を聞いた高順は、すぐにかつと見開き、涙をこらえて真剣な表情となったのだった。

「そのようなことを申されますな。拙者を含めて、みんな殿を慕って付き従ってきたのでございますぞ。殿が、この城を枕に戦って死ぬと言っているのであれば、拙者も喜んでお供つかまつります」

高順は、そう言っ、気迫のある目で呂布を見つめた。

「共に死んでくれると言うのか…」

呂布は、おもむろに目を細めた。

「このまま無抵抗で、曹操に降することは死ぬよりも屈辱的なことです。武士の風上にもおけぬ恥ずべき行為です。拙者も武士の端くれである以上、戦って死にたいと思います」

高順は、そう淡々と述べた。すると、呂布はその発言に対して大きくため息をついた後で、こう発したのだった。

「お主の心意気は、ようわかった…」

呂布は、不自由となった目で必死に高順の姿を探してから、彼の目を見つめた。

「ならば、最期は武士らしく華々しく散ってやるか…。高順…」

呂布は、そう発して、ニヤリと笑った。

「はっ…。この高順、世の果てまで殿に付き従います」

すると、高順も続けてニヤリと笑って、そう心に誓ったのであった。

その頃、陳宮はこの難局を打開するための策を必死に考えていたのであった。そのため、次第に部屋でじっとしていらなくなり、とうとう城内を彷徨い始めたのだった。と、そこへ、ふいにある者が現れ、陳宮に声をかけた。

「陳宮様…。今日もお悩みのようですね…。お勤め、ご苦労様です」
古くから呂布の配下として付き従ってきた成廉は、そう言ってお辞儀をしたのだった。

「おお…。誰かと思えば、成廉どのか…」

陳宮もすぐに我に返って、成廉に挨拶をした。

「しかし、本当に君は殿によく似ておられるな…。殿の衣装を着れば、遠目では区別がつかないぞ」

この成廉と言う漢は、呂布の顔にそっくりだと言うことで、臣下の間でもてはやされていたのであった。

「殿に似ていることは、とても光栄の至りでございます。この顔で生んでくれた両親へは、とても感謝をしていますよ」

成廉は、そう言って、にっこり笑った。

「おっと…。そう言えば、これから軍議を行うと殿が言っておられたな。急いで、参らないといかん…。一緒に参ろう」

「はっ…。では、お供致します」

こうして、陳宮と成廉は、軍議に参加をするため、城の大広間へと向かったのだった。

高順は、遅刻をしてきた陳宮と成廉をとがめた。

「遅いぞ、陳宮に、成廉…」

「申し訳ない…。色々と考えごとをしていたのでな…」

陳宮と成廉は、そう言って、深く頭を下げた。

「よし…。では、これより今後の作戦についての軍議を行う」

こうして、軍議は始まった。しかし、完全に曹操軍に包囲された状況で、良き対策案はなかなか出ず、軍議は暗礁に乗りかけたのだった。

「もはや、この策しかあるまい…」

その重苦しい雰囲気の中、陳宮は思い悩んだ末、おもむろに重い口を開いたのだった。

「かくなる上は、犄角の計しかございますまい。殿が兵を率いて城外へ出られ、それがしは城で兵を構え、相互のタイミングを見計らって、敵陣の後方を攻撃し、敵軍を壊滅させるしかございません」
陳宮の献言に、呂布は大きく頷いた。

「なるほど…。曹操軍が俺を狙ってくれば、陳宮がその後方を突き、逆に敵軍がこの下？の城を攻撃すれば、俺がその後方を突くと言うことだな。まさに、妙計…」

呂布がそう言って陳宮を褒めた時、ふいに高順が声を発したのだ。た。

「その作戦は、殿を危険にさらすことになる。それがしは、到底賛成しかねぬ」

その意見に対して、陳宮は毅然とした態度で、こう話した。

「高順どの…。この作戦は、曹操が殿を標的としていることと殿の人知を超えた武勇があつて成せるものにございます。多少の危険はございますが、それがしはやってできない策だとは思っておりません」

すると、陳宮の発言に対して、高順はこう切り換えしたのだった。

「陳宮どの…。実は、殿の目は、もうじき光を失うことになるそうだ…」

「えっ…」

高順の発言に、家臣一同は騒然となった。

「誠なのか…」

陳宮は、思わず、そう発した。

「名医・華佗がそう診断したのだ…。間違いはあるまい…」

「なんと言うことだ…」

その事実を知った陳宮は、天を仰いで立ち往生をした。すると、呂布は、ゆっくりと口を開いて、こう言い放ったのだった。

「俺は構わん…。どうせ、盲目の身になったとあれば、戦場にて役に立つ武将ではなくなる。その策で、曹操軍を壊滅させ、皆が生き延びられるのであれば、喜んでこの命を差し出そう…」

その呂布の言葉に陳宮は、猛烈に反対した。

「我が軍は、殿があつてこそ成り立つのです。その殿がいなくなれば、この軍は死んだも同然にございます。ならば、それがしが城外へ出ておとりとなり、見事に死に花を咲かせましょう！」

陳宮がその言葉を発した瞬間、横に控えていた成廉が声を上げたのだった。

「いえ…。この大役は、それがしにお命じくだされ。それがしは、殿によく似ておりますので、衣装を貸してもらえれば、見事に殿の影武者となりましょう。それがしが、この命に代えてもその策を成功させてみせます」

その成廉の発言に、一同は静まり返った。

「殿以外がこの役を実行する場合、命の保証はできませんぞ」

陳宮は、そう言って、成廉をじつと見た。

「それがしの命で、我が軍が助かるのなら、本望にございます」

すると、成廉は、真摯な目で陳宮を見つめ返したのだった。そのやりとりを目の当たりにした呂布は、おもむろに成廉を見て、静かに声を発したのであった。

「成廉よ…。その覚悟、しかと受け止めた」

呂布は、そう言うのと深くため息をつき、こう続けた。

「だが、死に急ぐなよ。生きて帰って来い…」

「はっ…。承知しました」

成廉は、呂布に一礼をすると、力強く声を発したのだった。こうして、この窮地を打開するため、陳宮の考案した掎角の計が実行されることになったのであった。

第31話

そして、呂布の衣装を身にまとった成廉は、一軍を率いて城外へ出たのだった。

「さあ、俺の首を取りに全軍でかかって来い。曹操…」

成廉は、そう発すると、下？城を取り囲む曹操軍の一角を目掛けて集中攻撃を開始したのであった。

「殿…。呂布自らが、我が軍へ攻撃を開始したそうです」

今回の戦で、曹操と共に同行をしていた夏侯淵が、部下から受けた報告を、すかさず彼へと伝えてきた。

「なんと、この大軍に対して、自ら討って出てきたのか！」

それを聞いた曹操は、眉を吊り上げて大きく見開いた。

「まさか、この包囲網を突破して、逃げ失せようとしているのではありませんか…」

曹操の横で控えていた夏侯惇が、少々焦りを感じながら、そう発した。

「ここまで来て、逃してたまるか」

曹操は、激昂しながら幕舎を出て、攻撃を受けている味方の陣地を睨んだ。すると、その方角にいた味方の兵士たちが、次から次へとなぎ倒されていく様子を目の当たりにしたのだった。

「いかん…。このままだと、本当に突破されてしまう…」

夏侯淵は、その光景を見て顔色を変えた。

「ええい…。全軍で、呂布を討ち取れ！」

曹操は、大号令を発して、そう指示を出した。だが、時はすでに遅く、その場所に配置されていた将兵たちは、無残にも全滅してしまったのであった。

「さあ、このまま、さらに先へ進むぞ。敵の部隊全てを我らに引き付けるのだ！」

成廉は、そう大声を発し、自軍をさらに城より遠くへと進ませたの

であった。

「絶対に、逃がさん！」

曹操は、執念でその影武者が率いる軍勢に食らいつこうとしたのだった。そのため、曹操軍の陣形は、次第に長く連なる線状となり、長蛇の陣へと変化していったのであった。

「かかったな…。曹操…」

そして、陳宮は、頃合いを見計らって城門を開けさせ、一軍を率いて曹操軍の後方を狙ったのだった。すると、ふいを突かれた曹操軍は、たちまち大混乱を起こしたのであった。

「ぬう…。計られた…」

曹操は、慌てて軍団の混乱を収束させようとしたが、大軍だけあって、そう簡単にはいかなかった。そして、曹操軍はみるみるうちに多くの將兵を失っていったのだった。

「よし…。このまま、一気に曹操軍を壊滅させてやる」

成廉は、率いていた軍勢を引き返し、果敢に曹操軍へ突っ込んだのだった。そして、手当たり次第に敵兵を斬り刻んでいったのであった。

「おのれ…。この楽進が相手だ！」

楽進は、成廉の姿を見つけるやいなや、槍を構えて突っ込んで来た。

「こしゃくな！」

こうして、成廉と楽進は、混乱する戦場の中、激しく打ち合ったのだった。そして、打ち合うこと数十合に及んだが、次第に成廉は疲れ始め、じわりじわりと押されていったのであった。

「とうあつ！」

と、その瞬間、楽進の鋭い突きが成廉の胸を貫通した。

「がはあつ！」

この一撃により、成廉は、断末魔をあげながら落馬して息絶えてしまったのであった。

「やったぞ…。この楽進が呂布を討ち取った！」

すると、その勝利の雄叫びを聞いた曹操軍は、雰囲気を一変させ、

活気を取り戻したのだった。そして、呂布軍に対して、果敢に猛反撃をしてきたのであった。

「いかん…。成廉が討たれて、敵の士気が上がったか…」

陳宮は、すぐさま全軍に引きあげの合図を発した。そして、合図を受けた呂布軍は次々と城内へ逃げ込み始めたのであった。

「このチャンス逃すな。一気に城を攻め落とせ！」

曹操は、そう大声を張り上げて、攻城戦への合図を発動したのだった。

「曹操軍が押し寄せて来たぞ…。矢を放て！」

「敵をこの城の中へ入れるな…。皆殺しにしろ！」

城門の上で構えていた張遼と臧覇は、射撃隊に合図を送り、追撃してきた曹操軍に対して矢の雨を浴びせたのだった。すると、追いかけてきた曹操軍はたちまち蜂の巣状態となったのであった。

「よし…。味方は、すべて帰還したな。すぐに、門を閉める！」

臧覇の号令を受けた門番たちは、敵を中へ入れさせまいと必死になつて、重く大きな城門の扉を閉めたのであった。

「ちっ…。閉められたか…。ここは、一度仕切りなおした方が良さそうだな」

曹操は、すぐに冷静に判断をし、自軍に合図をして兵を引きあげさせたのであった。

「あと一步というところで…。まことに残念…」

陳宮は、城門の前で歯ぎしりをしたのだった。

一方、影武者の首を携えた楽進は、意気揚々と曹操のもとへ赴いたのだった。

「呂布の首をお持ち致しました…」

「うむ…。でかしたぞ…。さすが、我が勇士だ」

曹操のお褒めの言葉を受けながら、楽進はその首を彼の目の前に置いた。

「殿…。存分にご確認ください」

「とりあえず、呂布がいなくなれば、しめたものだ。どれどれ…」
曹操は、そう言いながら、その首を確認した。しかし、彼はその首が呂布でないことを瞬時に見抜いたのだった。

「むう…。似ているが、これは呂布ではないぞ…」

「えっ…」

それを聞いた楽進は、一気に色を失った。しかし、曹操は、すぐに気持ちを切り替えて、彼のためにフォローをしたのだった。

「まあ、良い…。そちのおかげで、我が軍は壊滅を逃れたのだ。大義であったぞ…」

その言葉に、楽進は、深く頭を下げたのであった。

「しかし、影武者だったとは…」

曹操は、その首をじっと眺めながら、心の中で何かが引つかかった。「何故にわざわざ影武者などを使った。呂布自身が出て来れば、我が軍を完全に壊滅できたらろうに…」

と、そこまで口にした時、ふいに彼の脳裏に何かがよぎったのであった。

「もしや…。呂布は、怪我か病かで戦場に出られない状況となっているのではなからうか…」

曹操は、思わずはっとした。と、次の瞬間、曹操の目の前に、埋伏の毒となつてスパイ活動をしていた剣客の一人が姿を現したのだった。

「殿…。任務より、戻つて参りました」

候成は、そう発すると、すぐに曹操へ一礼をした。

「おお…。ちょうど良いところに、帰つて来た」

曹操は、候成の姿を見るやいなや、すぐにこう問いかけたのだった。「一つ聞きたいのだが、呂布の身に何か変化はあったか？」

その問いかけに対して、候成は口角を上げて、こう述べた。

「さすがに、ご察しがいいですね。実は、呂布は目の病気を発し、まもなく失明する状態にあるようです。現段階でも、相当不自由になつている様子にございます」

「やはり、そうだったのか…」

その報告を受けた曹操は、目を光らせてニヤリと笑った。と、その時、部下から報告を受けた夏侯淵が、おもむろに声を発したのであった。

「殿…。たった今、劉備どのが到着されたそうです」

「おお、やっと来たか…。すぐに、ここへ連れて参れ」

曹操が答えると、夏侯淵はすぐに部下へ命じて、劉備を幕舎へと導いたのであった。

「曹操どの…。仰せのとおり、増援部隊として一軍を率いて参りました」

実は、前々より曹操は劉備に対して増援部隊の派兵命令を出しており、その命を受けた劉備は、関羽と張飛を従えて、多数の兵士たちを引き連れてきたのであった。

「おお、劉備ど…。遠路より、ご苦労であった」

曹操は、そう言って、劉備をねぎらった。

「先の戦いで、手痛いダメージを受けたが、これで十分挽回ができそうだ。貴殿の働きを期待しておるぞ」

「はっ…。ありがたき、お言葉…」

劉備は、深々と頭を下げた。

「ふっふっふ…。これで、我が軍の勝利は決まったようなものだ」

こうして、曹操は、明朝より下？城の総攻撃を決断したのであった。

そして、下？城への総攻撃が始まったのであった。

「皆の者、怯むな…。呂布は、もはや戦闘不能の身だ。恐れるものは、何も無いぞ！」

曹操は、城壁の上から降り注ぐ矢の雨の中、味方に対して大声で激を飛ばしたのだった。

「殿…。おかげんは、よろしいですか…」

この死闘のさなか、高順は呂布の寝室にて彼の病状を伺っていた。

「うむ…。体の方は問題ないが、どうやら完全に見えなくなっ

まったようだ」

呂布は、目を閉じたまま、気配を頼りに高順にそう話した。

「無念でございます…」

高順は、呂布が完全に失明してしまったことに対して、大いに嘆いたのだった。

「案ずることはない…。それよりも、今朝はやけに騒々しいな。ついに、曹操軍の総攻撃が始まったのか？」

呂布の問いかけに高順は、心を落ち着けながら答えた。

「はい…。しかしながら、我が軍とて負けてはいられませぬ。それがしも、今から城の守りへ参ろうと思っております」

「わかった…。ならば、俺もその戦場に連れて行ってくれ」

それを聞いた高順は、ふいに血相を変えた。

「それはなりません…。殿は、ここで療養をしてくださいませ」

「皆が一生懸命戦っているのに、俺だけが病床に臥せっているわけはいかん」

その呂布の心意気に、高順は強く心を打たれた。そして、彼は、少し考えてからこう話した。

「ならば、大広間にて玉座より、戦局の動向を伺いながら、ご指示をお出しくだされ。殿は、我が軍の軍神…。その存在こそが、我が軍を大いに奮い立たせるでしょう」

高順の言葉を聞いて、呂布は大きく頷いた。

「わかった…。では、大広間まで連れて行ってくれ」

こうして、呂布は高順に誘導してもらいながら、大広間へ向かったのであった。

「さあ、大広間に着きましたぞ」

高順は、そう言って、呂布を玉座に座らせた。

「ありがとうございます。高順…」

「では、拙者は戦場へ向かいます」

高順が一礼をして、玉座から離れようとした時、おもむろに呂布が

口を開いて、彼にこう話しかけてきたのだった。

「しかし、俺たちは…。今まで、たくさんの修羅場をくぐり抜けてきたものだな…」

呂布の言葉に、高順はピタリと立ち止まり、彼に振り返った。

「俺みたいな武芸しか能のない大馬鹿野郎に、お前は最後の最後まで付き従ってくれた…。お前には、本当に世話になったと思っっている。心から感謝するぞ…」

「急に何を言われますか…」

高順は、急に目頭が熱くなった。

「拙者こそ、殿にお礼を言わなければなりません。こんな充実した人生を送れたのは、殿のおかげですから…」

そして、高順は、感謝の意を述べると穏やかな顔をして、こう続けたのだった。

「殿と一緒に人生を歩むことができ、感無量にございます。本当に、本当にありがとうございます」

高順は、再び一礼をして表情を引き締めた。

「それでは、ごめん！」

高順は、そう言い放つと、勢いよく大広間から走り去ったのだった。そして、彼は覚悟と言う名の炎をその目に灯して、死に臨んだのであった。

その頃、曹操軍は、城門を打ち破ろうと、幾度となく丸太攻撃を繰り返していたのであった。

「ええい…。次の丸太は、まだ用意できぬか！」

曹操は、少し苛立ちながら、丸太の催促をした。

「殿…。たった今、次の丸太の準備が整いましたぞ」

大きな丸太を綱でくくり付けた騎馬兵たちが、土煙を上げながらやって来る様子を見て、夏侯惇はそう答えた。

「かれ！」

曹操の怒号のもと、丸太部隊は怒涛の如く、城門へ突撃した。そし

て、度重なる攻撃によって変形した城門に、渾身の一撃をぶつけたのだった。すると、その大きな丸太はそれを貫いて、ついに破壊してしまったのであった。

「城門が開いたぞ…。全軍、突撃だ！」

夏侯惇は、そう大声を発しながら、先陣を切って城内へ突入した。と、そこへ、高順が目の前に立ちはだかったのであった。

「これより先へは通せん！」

「おお…。お主は、我が左目を奪った高順…。ならば、まずはお前から血祭にあげてくれる！」

こうして、高順と夏侯惇の一騎打ちが始まったのだった。

「うりゃあ！」

「せいや！」

高順と夏侯惇の打ち合いは数百合に達し、まさに死闘であった。しかし、左目を奪われた夏侯惇の気迫が高順を勝り、ついに高順は夏侯惇の突きを腹に食らってしまったのであった。

「ぐ、ぐふっ…」

高順は、血がしたたり落ちる腹を押さえながらよろめいた。

「殿…。先に地獄へ行つて、待つておりますぞ…」

高順は、そう言つて、夏侯惇の次の攻撃を食らつて絶命したのだった。だが、彼の死に顔からは、苦しみや悲しみの表情はなかった。命果てるまで、最後まで戦い抜いた彼は、自身の人生に悔いはないと言わんばかりに、満足そうな顔をしていたのであった。

「高順と言つたな。惜しい漢をなくした…」

夏侯惇は、そう言つて目を閉じ、静かに一礼をしたのであった。

最終話

その時、背後から果敢に城内へ攻め入ってきた曹操の怒鳴り声が聞こえてきたのだった。

「夏侯惇……。こんな所で、もたもたしている場合ではないぞ。一刻も早く、呂布を探し出せ！」

「面目ない……」

夏侯惇は、そう言つと、さらに深く城内へと侵入していったのであった。

「さあ、余も探すとするか……」

曹操がそう言つて、駆け出そうとした時、ふいに何者かの呼び止められたのだった。

「そこにいるのは、曹操か！」

その声を聞いた曹操は、声のする方を鋭く睨みつけた。

「陳宮……」

曹操は、その男が憎悪の対象であることを確認すると、鬼のような形相で接近していった。

「貴様の首は、ここではねてやる！」

「それは、こちらのセリフだ！」

こうして、陳宮と曹操の激しい斬り合いが始まったのであった。そして、彼らの打ち合いは数十合を数えたが、徐々に曹操が陳宮を圧倒し始め、ついに陳宮は曹操の一撃を食らったのだった。

「ぐわあ！」

陳宮は、痛みを堪えながら、曹操を睨みつけた。

「この世は決して、お前のものにはならん……。この先、お前の浅ましき野望の前に志ある者が必ず立ちはだかるだろう……」

陳宮は、そう言い放つと、自らの首をかき切つて果てたのであった。

「志ある者だと……。我が野望は、誰にも邪魔はさせんぞ……」

そう言つと、曹操は、不快そうな顔をして、その場から去つたのだ

った。しかし、先の話となるが、その後、曹操の前に立ちはだかる強大なライバルが現れ、曹操は彼と長期に渡って死闘を繰り返す運命となる。その漢こそ、曹操の傍らで、その優れた為政者から必死に学び、民から慕われる名君を目指していた劉備であった。

その頃、大広間では、玉座に座っていた呂布の前に、魏統と宋憲が殺意を持って立ちはだかっていた。

「まさか、お主らが曹操のスパイだったとは、思わなかった…」
突然の味方の裏切りに、呂布は眉間にしわを寄せた。

「ふっふっふ…。目が見えなくなつては、どうすることもできまい…」

「呂布よ…。その首は、もらったぞ…」

魏統と宋憲は、そう言つて、腰に携えていた刀を抜いた。

「愚か者めが…。目など見えなくても、お前らぐらいなら、俺の相手ではない…」

呂布は、すくつと立ち上がり、刀を構えたのだった。

「ほざけ…。俺たちをなめるなよ！」

「死ね…。呂布！」

魏統と宋憲は、そう言い放つと、同時に呂布へ仕掛けた。

「ザコが…。出来過ぎたことをするな！」

呂布は、そう雄叫びをあげると、斬りかかつて来た魏統と宋憲を一気に真つ二つにしてしまったのであった。

「ふっ…。たわいもない…」

呂布は、そう言つて、刀の先についた血を振り払つたのだった。

「騒ぎの音が、さらに大きくなってくる…。どうやら、城門を突破されてしまったようだな。ならば、ここへ敵兵たちが、たどり着くのも時間の問題であろう…」

呂布は、大きくため息をついた。

「ここが俺の墓標…」

呂布は、そう言い放つて仁王立ちをし、侵入して来る敵を待った。

と、その時、彼と面識のある一人の武人が、この大広間へたどり着き、大声で呂布を呼んだのであった。

「見つけたぞ…。呂布！」

張飛は、呂布を見つけるやいなや割れんばかりの大声をあげた。その彼の声を聞いた呂布は、おもむろに小さく笑ったのだった。

「なんと、張飛が現れたか…。まさに、何かの因縁のようだな…」

呂布は、懐かしさを感じながら、そう発した。すると、張飛は、ふいに心配そうな顔をして、こう尋ねてきたのだった。

「おい…。目が見えなくなつたと言つのは、本当なのか…」

「ああ…。この通り、もはや何も見えない状態だ…」

呂布は、おぼつかない足取りで、声のする方へと歩み寄っていった。その様子を見た張飛は、一息をついてこう言い放った。

「友として忠告する…。今すぐ、降伏をしろ…」

その張飛の言葉を聞いた呂布は、ふいにぴたりと動きを止めた。

「ふっ…。この期に及んで降伏などする気はない…。俺は、ここを死に場所とするつもりだ…」

呂布は、そう言つと、静かに刀を構えた。

「待て…。俺は、心渡り合えた友を斬りたくはない。頼むから、俺の忠告を聞いてくれ…」

張飛は、そう言つて、目を凝らした。しかし、呂布はニコリと笑つて、こう答えたのであった。

「張飛よ…。お主が俺を友と思うなら、この俺を斬れ…。俺は、戦いの中でしか生きられぬ武骨者ゆえ、戦場で役に立たなくなつたとあれば、これ以上生きていく望みはないのだから…」

「呂布…」

張飛は、その言葉に思わず眉をひそめた。そして、しばらくの間、呂布を見つめてから何かを決心したかの如く、腰に携えていた刀を引き抜いたのだった。

「やはり、お前は心を分かち合えた友だ。俺も同じ立場なら、そう

言ったであろう…。俺は、お前と仲良くなれて、本当に幸せ者だぜ…」

張飛は、涙をこらえながら、刀を構えた。

「言っておくが、ただでは死なんぞ。俺は、最期まで全力を尽くすつもりだ。心して、かかって来い…」

「百も承知だぜ…」

二人は、そう言うと、呼吸を整えながら間合いを取り、鋭く睨み合っただった。

「さすが、天下に名を馳せた漢だ…。あんな状態になっても、全く隙が無い…」

張飛は、その静寂の中で、思わずぐくりと生唾を飲んだ。と、同時に、彼を斬ることに躊躇する感情を覚えた。

「できるなら…」

張飛は、そう言いかけたが、その迷いに対して、ぐつと歯を食いしばったのだった。

「ためらうな…。武士として生きてきた漢の誇りを傷つけることこそ、奴にとって人生最大の屈辱でしかないのだぞ…」

張飛は、こみ上げてくる感情を必死に抑えながら、自分へそう言い聞かせた。そして、こう続けたのだった。

「それに、あれほどの豪傑の息の根を止めることができるのは、この世において俺以外にはおるまい…」

張飛は、脳裏の中でそう言い放つと、かっと目を光らせた。と、次の瞬間、二人は、覚悟を決めたかのように、一斉に言葉を発したのだった。

「いざ…」

「勝負！」

呂布と張飛が互いにそう発した瞬間、二人は大きくジャンプをして、渾身の力で刀を振り下ろしたのであった。そして、お互いが大地に足をつけて振り向いた時、呂布は全身を朱に染めながら声を上げたのだった。

「ぐはあ！」

呂布は、よろめきながら、血をしたたらせた。

「さすが、俺が認めた武人だぜ……」

呂布は、そう言うのとニヤリと笑った。

「最後まで付き合ってくれて感謝するぞ、張飛……。お前は、お前の道を絶対に貫けよ。あの世で、しっかりと見届けてやるから……」

呂布は、そう言うと、どさりと倒れて息を引き取ったのであった。

彼の波乱に満ちた人生は、時代がそうさせたとは言え、常に命の取り合いであり、生と死の隣りあわせの中で生きると言う、まことに荒んだものであった。だが、彼はそんな人生に対して呪う気持ちは微塵もなかった。武人として生まれ、武人として散っていくことに誇りを持っていたからである。

「……。友よ……」

張飛は、血の滴る刀を捨て、体を震わせながら、亡骸となった呂布へ歩み寄った。

「お前こそ……。お前こそ、真の武人だぜ……」

張飛は、そう言って、ふいにしゃがみこんだ。そして、大きく頭を垂れて、こう続けたのであった。

「お前のことは、一生忘れないぞ。俺は、必ずいつぱしの漢になつてみせる……」

張飛は、大粒の涙を流しながら、呂布にそう誓ったのであった。

こうして、呂布軍は、曹操軍によって滅ぼされたのであった。そして、ライバルの一人を破った曹操は、勢いに乗じて中原の覇者への道をつき進むことになるのである。しかし、前述をしたように、曹操は漢の全土を掌握することはできなかった。その後、この国では、三国鼎立の時代へと移っていくのだから……。

呂布の死の知らせは、献帝のもとにも届いた。その知らせを聞いた献帝は、体を震わせながら、思わず天を仰いだのだった。

「呂布よ…。お前ほどの義に厚い豪傑が、何故死ななければならなかったのだ…」

献帝は、そう言つて、静かに目を閉じた。

「本当に惜しいお方を亡くしましたな」

横で控えていた伏完は、眉をひそめながら、そう言葉を添えた。すると、献帝は、ふいにハラハラと涙を流したのだった。

「お前のことは、決して忘れはせぬぞ…。決して…」

「陛下…」

献帝の胸中を察した伏完は、静かに頭垂れた。

「陛下にとつて、彼は心許せる友…。なんと、おいたわしいことだ」そして、彼は、その重い空気から逃れるべく、ふいに外の景色へと目を移したのだった。と、その時、目に飛び込んで来た光景を見て、彼は思わずはっとしたのであった。

「…。今日は、本当に良い天気でございますな…。彼は、天国へ行つても、恐らく赤兎馬にまたがって、あの大空を駆けていることでしょう…」

その言葉を聞いた献帝は、ふいにかつと目を見開いた。そして、伏完が見つめる先へとすばやく目を合わせたのだった。すると、馬にまたがった武者のような形をした雲が、ゆつたりと気持ちよさそうに浮かんでいたのだった。

「りよ…。呂布…」

献帝は、思わずそう言葉をこぼした。すると、彼は次第に落ち着きを取り戻し、穏やかな表情となつたのであった。

「…。そうじゃな…」

献帝は、その雲をじつと見つめながら、こう続けた。

「よくぞ、苦難の道を乗り越え、最後の最後まで戦い抜いた。お主の働き、誠に大義である。あとは、ゆつくりと、その体を休めよ…」そう言つと、献帝は、名残惜しむかのように、その雲が消えていくまで目を離すことなく見続けたのだった。

〜
完
〜

あとがき

猛虎奮迅 呂布伝 の物語を初めてお披露目したのは、今年の春だったと思います（アメーバブログにて）。当初の作品は、先掛高校野球部シリーズ（Yahoo!ブログで掲載）と同様に劇画本のシナリオのように執筆をしておりました。しかし、野球をテーマに白熱した実際のプレーを際立たせるような展開を重視した前作品に比べて、当作品は二次小説ではありませんが、古今東西で老若男女に支持されている三国志を舞台に歴史を描くと言う観点から、それと同様なタッチで執筆をするのは、その魅力を損なうだけでなく、うまく活かしきれないと判断したため、今回リメイクをすることになりました。

そして、いざリメイクを始めると、意外と誤字脱字が多かったり、説明不足のために頭をひねる箇所があったりと散々な思いをしました。また、新たにアイデアが浮かんで話を追加および変更をしている箇所もあるため、最終的には、リメイクした作品とは思えないくらいになっていました。当初、作品を書き切った時は、完璧だと思って掲載をしたのですが、少し時間を置いて客観的に評価できるようになった状態で読み直すと、自身の書いた作品の良し悪しが、はっきりとわかることに改めて気付かされた思いです。

しかし、呂布と言う人物は、つくづく破天荒な人生を送った男だと思えます。正史では、最初は田舎の太守である養父・丁原に任せ、董卓の誘いに乗って彼を殺すと、今度は董卓を養父と仰いで都仕えを始めます。だが、そこで王允から誘いを受けると、今度は董卓を殺して彼と共に政権を樹立しました。ここまでは、トントン拍子で出世をしていった彼でしたが、董卓の残党によって政権を篡奪され、都落ちをすると、袁術、張楊、袁紹と有力な諸侯を渡り歩い

ては追い出されるといふ悲惨な境遇を繰り返すことになります。その後、張？・陳宮らと手を組んで曹操と血戦を繰り返して、戦いに敗れると、劉備のもとに身を寄せることになりました。だが、彼は、助けの手を差し伸べてくれた劉備に対しても反旗を翻して本拠地を奪い、ついに一国一城の主となっています。その後、彼は再び曹操と争って敗れ、とうとう縛り首となり、その生涯を終えることになりました。確かに、その行いは決して肯定できるものではありませんが、当時の無秩序で、盛衰の激しい弱肉強食の時代においては、一君に全うして仕えることは極めて難しく、己の立志と生き抜くための手段として、そうせざるを得なかったようにも思えます。また、そう言った世の中なので、普通ならば、コロコロと主君を変える以前に、あっさり殺される確率の方が高いのではないのでしょうか。そう考えると、まさに彼は時代に翻弄されたピエロだと言えるのかもしれません。だが、彼のように、徹底した反骨精神をもってダイナミックに人生を全うした人間は数少ないことでしょう。彼は、天下を乱す害虫だったかもしれませんが、そのたった一人の男が、縦横無尽に暴れまわったことで中国という広大な舞台が動き、新たな時代へと遷移していったようにも感じます。丁原を斬って董卓に仕えなければ、董卓の政権の樹立は無いと思われ、曹操は台頭する機会を失った可能性があります。また、董卓を斬らなければ、彼の悪政が続く、暗黒時代へ突入していたかもしれません。さらに、劉備を徐州太守の座から引きずり下ろさなければ、そのまま太守として君臨するでしょうから、徐州攻略を企む曹操の餌食となり、そこで殺されるか、若しくは曹操の忠臣となり、三国鼎立の時代がやって来なかったかもしれません。一人の行動が歴史をも動かし、如何なる閉ざされた道をも切り開くことができる…それを、彼は実証してくれたように思えます。

最後になりましたが、こうして連載を続けることができたのも皆様の温かいご声援があったからだと感じております。

この場を借りしまして、慎んでお礼を申し上げます。

ご愛読をして頂き、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2397y/>

猛虎奮迅 - 呂布伝 -

2011年11月20日19時13分発行